日　本　体　育　学　会

体育心理学専門分科会会報

第 20 号　（通巻第 48 号）

体育心理学専門分科会

2008 年 8 月発行

日本体育学会体育心理学専門分科会会則

第1条　本会は，日本体育学会 体育心理学専門分科会と称する．

第2条　本会は，体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため，会員相互の情報交換を行い，研究と実践を推進することを目的とする．

第3条　本会は，第2条の目的を達成するために次の事業を行う．

（1）　研究会の開催
（2）　会報の発行
（3）　会員の研究に資する国内，国外の情報の収集と紹介
（4）　その他，本会の目的に資する事業

第4条　本会の会員は，本会の趣旨に賛同する者で，会費を納入した者とする．

第5条　本会に次の役員を置く．

（1）　会長　　1名
（2）　理事　　12名
（3）　監事　　2名

第6条　役員の選出は，次の方法で行う．ただし，末位が同数の場合は抽選とする．

（1）　会長は，会員の単記無記名投票による最多得票者とする．
（2）　理事は，会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする．
　　選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し，庶務・会計を担当する．
（3）　理事長は，理事の単記無記名投票による最多得票者とする．
（4）　監事は，会員の中から会長が委嘱する．

第7条　役員の任期は，4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし，2期の重任を限度とする．ただし，事務局選出の理事はこの限りでない．

第8条　本会に理事会を置き，会長および理事でもって構成する．

第9条　理事会には，業務を円滑に遂行するため，次の委員会を置く．
学会大会委員会，企画委員会，広報委員会，庶務・会計委員会
ただし，庶務・会計委員会は，事務局選出の理事が担当する．

第10条　会務を補佐するため，会長の指名により幹事若干名を置くことができる．

第11条　本会の会議は，総会および理事会とする．

第12条　総会は，次の事項を審議決定する．

（1）　役員の選出
（2）　事業報告および収支決算
（3）　事業計画および収支予算
（4）　会則の改正
（5）　その他

第13条　総会は年1回，日本体育学会の開催地で開催し，当日の出席会員をもって構成する．

第14条　本会の経費は，会費，日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する．

第15条　本会の会計年度は，日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門分科会総会までとする．

附則　1．本会の事務局は，総会の議を経て決定する．
　　2．本会は，日本体育学会の依頼により，日本体育学会関連役員等を選出する．
　　3．この会則は，平成14年10月13日から施行する．

体育心理学専門分科会の役員（敬称略）

任　期：平成19年4月1日～平成21年3月31日
会　長：猪俣　公宏
理事長：吉川　政夫
理　事：学会大会委員会（○中込　四郎，荒木　雅信，土屋　裕睦）
　　企画委員会（○石井　源信，伊藤　政展，鈴木　壮）
　　広報委員会（○吉田　茂，佐久間　春夫，竹中　晃二）
　　庶務・会計委員会（○谷口　幸一，高妻　容一）　　○：委員長
監　事：栗木　一博，高見　和至
幹　事：松本　秀夫

巻頭言

—思い巡らしていること—

体育心理学専門分科会会長　　猪俣　公宏（中京大学）

体育心理学専門分科会が発足してすでに半世紀の歳月が流れたことになる。この間、所属会員の数、学会発表の数も発足当時とは比べ物にならないくらいに増加し、また科学としての研究水準も着実に上がり、内容や方法論上の専門化が進んできているともいえよう。

しかしながら、最近では同じような研究領域を対象とした学会が設立され、それらの学会との関連で、体育心理学専門分科会の独自性とは何か、また社会的にどのような役割を果たすべきなのかなどの問題がまた新たに問われているように思われる。

私は日本スポーツ心理学会にも所属し、おまけに会長をお引き受けしているので、本専門分科会とさまざまな点において重なることが多く、正直、時々困ることがある。両者はどのように区別されるべきなのか？両者のそれぞれ独自の存在意義とは？私の役目上、これらの問題に思いを巡らし、自問することが多くなってきた。その中で、最近、私なりにこの問題について解決の手がかりをまとめてみた。一つは体育学会という大きな学術組織の一専門分科会として他領域の専門分科会との交流をさらに進め、広い意味での体育事象における諸問題の解決を共同して目指すことである。しかし、残念ながら現状は相互の交流に欠け、縦割り、専門化の方向を辿っているといえよう。この点における軌道修正が求められている。次に国際的に見るといわゆる“体育心理学”の研究組織はスポーツ心理学へ吸収され、ほとんどの国において独立した学会組織は持たれていないか、その活動自体が衰退してきているのが実状である。わが国における伝統的な意味での“体育”は単なるPhysical Education（欧米ではほとんど学校体育の概念で解釈されている）ではなく、広く身体活動を心身両面にわたる人間形成の視点から捉える文化的特長を持つものである。そこに体育とスポーツを区別すべき重要なポイントがあるといえよう。私はこのような文化的背景を考慮した体育の心理学的研究を他領域と協同しながら発展させることがこの分科会に課せられた二つ目の目指すべき方向ではないかと考えている。

以上、日頃、体育心理学専門分科会について私が思い巡らしてきた一端を述べ、巻頭言とさせていただきます。本専門分科会に所属する皆様にとって一層魅力ある分科会になるよう微力を尽くす所存であります。ぜひとも皆様方のご協力をお願いします。

体育心理学専門分科会会報第２０号

目　次

巻頭言　－思い巡らしていること－……猪俣　公宏（中京大学）…… i

目次…… ii

Ⅰ．特別寄稿

スポーツ集団研究と社会的スキル

阿江　美恵子（東京女子体育大学）…… 3

Ⅱ．日本体育学会第58回大会関連

１．キーノートレクチャー１

テーマ：体の動きが心を作る　―身体心理学という観点から―

演　者：春木　豊（早稲田大学名誉教授）

司　会：吉川　政夫（東海大学）

演者報告……春木　豊（早稲田大学名誉教授）…… 9

傍聴記……石原　端子（大阪体育大学大学院）……13

２．キーノートレクチャー２

テーマ：スポーツオノマトペの情報伝達機能が運動パフォーマンスに及ぼす影響

演　者：藤野　良孝（メディア教育開発センター）

司　会：谷口　幸一（東海大学）

演者報告……藤野　良孝（メディア教育開発センター）……14

傍聴記……関矢　寛史（広島大学）……15

３．シンポジウム

テーマ：モチベーションを高める指導法

司　会：高妻　容一（東海大学）

演　者：西貝　雅裕（太成学院大学中・高等学校）

－中学生・高校生の生徒や選手に対する指導－

原田　隆史（原田総合教育研究所）

－教師・指導者・ビジネスマンに対する指導－

菅生　貴之（大阪体育大学）

－オリンピック選手などトップレベル競技者に対する指導－

司会報告……高妻　容一（東海大学）……16

演者報告……西貝　雅裕（太成学院大学中・高等学校）……18

菅生　貴之（大阪体育大学）……20

傍聴記……佐々木　史之（日本体育大学）……22

川田　裕次郎（順天堂大学大学院）……23

4．口頭発表
座長報告
栗木　一博（仙台大学）……24
山本　裕二（名古屋大学）……25

5．ポスター発表
ポスター発表記
野田　さとみ（奈良女子大学大学院）……26
中本　浩揮（鹿屋体育大学大学院）……27
田中　千恵（神戸親和女子大学）……28
山崎　将幸（九州大学大学院）……29

6．大会参加記
武田　大輔（筑波大学・奈良産業大学）……30
桂　　和仁(武蔵丘短期大学)……31

Ⅲ．研究会の活動報告
スポーツ動機づけ研究会活動報告
蓑内　豊（北星学園大学）……35
スポーツ社会心理学研究会活動報告
杉山　佳生（九州大学）……36
臨床スポーツ心理研究会活動報告
竹之内　隆志（名古屋大学）……37
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会活動報告
高妻　容一（東海大学）……39
運動学習研究会活動報告
加藤　貴昭（慶應義塾大学）……40
老年学研究部会活動報告
谷口　幸一（東海大学）……41

Ⅳ．研究室紹介
天理大学体育学部体育学科　スポーツ心理学研究室
西田　円（天理大学）……45

Ⅴ．学位論文紹介
体育の授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響
島本　好平（東京工業大学）……49
プレッシャーが運動スキルに及ぼす影響
田中　美吏（広島大学大学院総合科学研究科）……52
体育授業における友人関係ストレスと体育授業への適応
佐々木　万丈（仙台電波工業高等専門学校）……55
高校運動部員の心理的ストレスに関する研究
：部活動ストレスモデルの構築と介入プログラムの作成
渋倉　崇行（県立新潟女子短期大学）……59
A study on reaction times to a visual target during smooth pursuit eye movement
追従性眼球運動中に呈示される視覚刺激への反応時間に関する研究（英文）

瀬谷　安弘（東北大学加齢医学研究所）……63
スポーツ競技者の継続的自己モニタリング技法の開発
崔　回淑（筑波大学博士特別研究員）……68
競争場面の認知に関する精神生理学的研究　―事象関連電位を中心に―
松本　清（奈良女子大学博士後期課程研究生）……71
幼児の運動有能感に及ぼすジェンダーの影響に関する研究　―運動有能感を高める幼稚園での保育実践をもとに―
岡澤　哲子（名古屋学芸大学子どもケア学科）……75

Ⅵ. 海外情報
マックマスター大学における研究生活
石倉　忠夫（同志社大学）……81
Prince of Wales 医学研究所滞在紀
乾　信之（鳴門教育大学）……84

Ⅶ. 日本体育学会第59回大会案内
1．日本体育学会第59回大会（早稲田大学）の内容……89

2．プレセミナー……95
テーマ：体育心理学の知見を体育授業現場にどう活かすか－実践を踏まえて－
演　者：岡澤　祥訓（奈良教育大学）
司　会：鈴木　壯（岐阜大学）

3．キーノートレクチャー1……98
テーマ：教員養成系大学における「体育心理学」の講義をめぐって
演　者：杉原　隆（十文字学園女子大学）
司　会：土屋　裕睦（大阪体育大学）

4．キーノートレクチャー2……99
テーマ：応用実践科学におけるフィールドの持つ意味－運動学習研究より－
演　者：山本　裕二（名古屋大学）
司　会：荒木　雅信（大阪体育大学）

5．シンポジウム……100
題目：体育・スポーツ場面における個人差・パーソナリティ要因に関わる研究の課題
司　会：中込　四郎（筑波大学）
演　者：鈴木　聡（東京学芸大学附属世田谷小学校）
竹之内　隆志（名古屋大学）
荒井　弘和（大阪人間科学大学）

Ⅷ. 事務局報告
平成19年度事業報告……105
平成19年度体育心理学専門分科会総会・理事会議事録……106
平成19年度決算報告……111
平成20年度予算案……112

Ⅰ．特別寄稿

スポーツ集団研究と社会的スキル

阿江　美恵子（東京女子体育大学）

1．体育と競技スポーツの違いから感じること

「体育の先生になりたい」というのがほとんどの体育関係の学科を選択する競技スポーツ好きの高校生の進路希望である。体育を教えることと運動部で競技スポーツを実践することは大きな違いがあるのだが、保健体育科の教員は競技力向上の推進役、競技団体の役員、そしてスポーツ文化を広める広報マンまでを努めている。競技スポーツはそのような体育界の一部、というより勝手に独り立ちして、一人歩きをしている。大学運動部に加入したとたん、学生は競技者になる。一部のスポーツで有名な高校でも同じことが起こっている。プロのスポーツ選手のように、競技者は生活全てをスポーツに打ち込んで当然と競技スポーツ指導者は考える。これは学生から見れば理不尽ではないか。

他方、子どもの側にもマネージャーを志望する人が出てきて、すべて選手のためにを合言葉に、自分がプレイしないぶん（だと思うのだが）負けたことを選手以上に悔しがり、もっと真剣に練習することを強要する。どこが苦しいのかを理解しての励ましは嬉しいが、ひいきのひいき倒しは選手をさらに苦しめると思われる。

体育心理学の研究を志す人は、まず体育やスポーツについての理念や現状を学んで欲しいというのがこの項を書いた理由である。体育・スポーツとは何かを知らずして、さらにスポーツ界の理不尽な部分を理解せずして、結果を正しく解釈できないと感じるからである。

国を代表するような一流の競技スポーツ集団でさえも、選手が成熟していない種目はたくさんある。体育から競技スポーツへ、そしてまた普通の人へ、その変化をとらえるのはスポーツ社会心理学の研究領域だと思うし、研究への期待も大きくなっている。

2．スポーツ社会心理学

スポーツのもつ様々な環境とくに社会的要因がスポーツ社会心理学の研究領域である。人間は社会的動物なので、人間行動全てが社会的である。一人で行えるスポーツはほんの少しで、多くは集団でスポーツ活動を行う。「人が二人集まれば集団である」というのが集団の定義であり、自分以外の人との関わりが必然的に大きな解決すべきテーマとなる。

スポーツ社会心理学の扱うテーマは、まず、スポーツ集団でありこの中に多くのサブテーマがある。対人認知と自己認知、集団行動、リーダーシップ、コーチと選手の関係、集団の構造、チームワーク、集団凝集性、集団の雰囲気（動機づけ）、社会的勢力、社会的アイデンティティ、と興味深いテーマはたくさんあるが運動学習やメンタルトレーニングほど研究が増えているとは言いがたい。

その理由を考えてみると研究方法として現実のスポーツ集団を対象にすることは、研究室だけで研究が進まないし、まさに対人関係処理能力が必要となり、交渉力、社会的スキルも磨く必要がある。バリバリの競技スポーツ指導者にも頭を下げ、調査をお願いしなければデータは取れない。かくいう私は体育大学に勤務する利点を活かし、正面攻撃ではデータを取らせてもらえない運動部のデータを指導者に内緒で授業内に取ることもある。高校での体罰に関する調査をしたら、大学での事例が出てきてびっくりしたということもあった(その事例はもう時効)。紙と鉛筆だけを使うので研究費は安上がりなので、良い調査用紙ができれば面白い研究ができること請け合いである。

3．スポーツ集団凝集性

A. V., Carron がスポーツ集団凝集性についての一連の研究を発表したのは、1970 年代である。日本では 1960 年代に奈良女子大学を中心にスポーツ集団の研究が行われ、すでに退官されている丹羽劭昭先生の集団研究はいまでも多くの情報を残している。集団研究は体育社会学、体育心理学の両方の領域に重なったことが、研究者間の情報交換を妨げたと言えなくもない。研究方法的には心理学のほうが現実を映しているように思える。

しかし、集団凝集性はチームワークとは異なる概念で、チームのパフォーマンスの予測には威力を持たなかった。また、Carron が尺度を作成し、誰でも使える基準を得たことも集団凝集性研究がその後滅っている理由であろう。

集団凝集性の研究から、競技スポーツチームのパフォーマンス向上にはチーム内の人間の力が大きいことは予測されたが、Carron の考え方に日本のスポーツ集団はダイレクトにあてはまらなかった。多くの学校期のスポーツチームを観察すると、日本ではチーム内で個が尊重されて活躍するという考え方が浸透していないことがわかった。指導者への過度な依存や反応が必ず出現する。したがってリーダーやリーダーシップへの関心が高く、指導現場ではリーダーシップのノウハウが氾濫している。

リーダーシップについての研究も「虎の尻尾を踏む」可能性があるため、研究は多くない。指導者を客観的に評価するとか、良い指導者についての研究はもっと増えて欲しい内容である。

4．体育と社会性の発達

ヨーロッパ諸国の体育は、身体活動と人格・社会機能の二つの目標を掲げ、後者では身体活動を通した社会教育（社会心理学の領域）に関心が向けられるようになった(オウェールほか, 2006)。そこで扱われるのは、社会性の発達、道徳性の発達、集団内の相互作用、競争と協同、集団の発達などである。体育の授業だけで社会性の発達を促進できるかは体育カリキュラムによって異なるであろうが、技能を教えることだけに熱心であった体育教師が発想を変える必要がある。そのために資料が体育心理学に整っているかというと十分ではない。「競争と協同」は学生時代に実験を行った記憶があるが、子ども

の社会が変質しているので、改めて検討する時期に来ているのではないかと思われる。

集団は発達しては壊れ、壊れては発達する。「このチームでプレイできて幸せであった」というチームの雰囲気は、「二度とここにいたくない」という悲しい集団に比べてはるかに生産性に富み、人生を豊かにする経験であると言えよう。良くない集団は壊し、良い集団を再形成するというのも集団の社会性のありようである。

5．社会的スキルの発達

人間は社会的動物である。しかし、生まれたときから社会性が備わっているのではなく、社会性を発達させて社会の一員として過ごすためのスキルを身につけていく。集団のなかで友人ができること、集団内で協力して役割分担することなど、社会的なスキルは対人関係を良好にし、社会集団の一員として過ごすために必要なことである。その手段として言語的コミュニケーション能力、非言語的なコミュニケーション能力などがあげられるであろう。

現在の日本では子どもの社会性の低下が指摘されているが、スポーツ集団は様々な社会性の発達を促す場であることが見出されている。社会的行動のスキルを磨くことを意図的に計画するアドベンチャープログラムは、野外教育で用いられ、新入生のオリエンテーションプログラムでも用いられている。

スポーツの持つ競争状況と協力状況を体験することで、対人関係における自分の位置を認識し、日常場面での友人関係のあり方にも影響を与えることが見出されている（杉山ほか，2006）。スポーツを通じて競技場面での協調性を向上させることで、友人関係にも良い影響を与えるのである。

また、セルフハンディキャップといって、自分がうまく出来ないのは「怪我をしているからだ」ということを事前に報告して、許しを請うことで険悪な結果になることを避ける行動も見られる。単なる言い訳とは違い、人間関係に配慮した行動だが、日本での研究はほとんどない。

6．キャリアトランジション

スポーツ選手が人生の早い時期に目的を達成し、残りの人生を抜け殻のように生きるというのは過去の話になった。しかし、プロ選手になったものの早期退職をして違う人生を歩まなければいけない選手もたくさんいる。そこに焦点をあてたのが、キャリアトランジションという研究である。スポーツ選手のスポーツへの傾注時間は長く、道の多様化を考えない選手教育のせいで、スポーツから引退したあとにどう生きたらよいか、ということが大きな問題になっている。一流選手の競技寿命が延び、なかなか競技から引退しないことも問題の一部かもしれない。

スポーツに固執し、自己評価を変えない選手の場合はメンタルトレーニングやスポーツカウンセリングも必要になるが、引退する前にキャリアについての教育を行うことで、スムーズなキャリアトランジション（移行）が可能である（三木，2005）。田中ウルヴェ京は、キャリア

トランジション教育に着目し、勉強会を開催し、若い選手のキャリア移行のサポートを行っている（田中，2006）。

7．ジェンダーに敏感な視点

日本スポーツとジェンダー学会（会長帝塚山学院大学　飯田貴子）は今年で発足７年目になる。この学会では生理学と同様に心理学もやり玉にあがることが多い。アメリカを中心とした欧米の研究では、ジェンダーに配慮した研究視点が常に求められている。具体的には、性差は文化的に形成されたものであり、結果の解釈がさらに性差認識を再生産していないかに意識を払いながら研究が進められなければならない、ということである。心理学は男女差を論じることが多いが、その男女差を断じることで男女差をあるものとして肯定してしまう、との批判にこれからは耐えうる結果の解釈が必要になる。

また、男らしさを競う文化として発展してきたスポーツ文化の内包する強固な性規範が、スポーツ参加やリーダーに与える影響も見逃せない課題である。これらは女性が研究すれば良いと思われているようだがそうではなく、性同一性障害はどちらの性でも出現している。

8．おわりに

動機づけ研究も社会心理学の範疇だが、ここでは触れなかった。

体育は上手になることを中心に置いて、良い人間関係の体験を学ぶ場である。それが競技スポーツでも当然のように保証されるべきである。競技スポーツで人間は理性を失うのであろうか、またはより動物的になるのであろうか。競技集団をみていると多くの「まさか」がある。そのまさかが起きないように、研究を役立てたいと思う。（まとまりのない文章をお許し下さい。）

文献

オウェール，Y. V. ほか，スポーツ社会心理学研究会訳（2006）体育教師のための心理学．東京：大修館書店，pp. 203.

三木ひろみ（2005）スポーツ選手のキャリア教育－実践現場からの提言．日本スポーツ心理学会第 32 会大会研究発表抄録集，pp. 8-9，日本スポーツ心理学会第 32 会大会会員企画シンポジウム．

杉山佳生ほか（2006）競技社会的スキルと友人関係のあり方との関係．日本スポーツ心理学会第 33 回大会研究発表抄録集，pp. 70-71.

田中ウルヴェ京（2006）アスリートのキャリアトランジション：『キャリア』に着目する意味とは．日本スポーツ心理学会第 33 回大会研究発表抄録集，pp. 8-9，日本スポーツ心理学会第 33 会大会会員企画シンポジウム．

Ⅱ．日本体育学会第 58 回大会関連

キーノートレクチャー1

演者報告
「体の動きが心を作る―身体心理学という観点から―」

春木　豊（早稲田大学名誉教授）

1．動きから心が発生した

進化の過程を考えてみると、動物は、まず「動く」ことからは始まった。下等動物は心がなく、大脳がなくても、動くことが出来た。すなわち心があって動くのではない。動くことは心とは独立している。そして心は進化の過程において、動きから生まれてきたものである。

このプロセスは「回避条件づけ」をモデルにして、理解することが出来る。すなわち、回避条件づけとは、条件刺激（たとえば音）の数秒後に、無条件刺激（電気ショック）を与える。被験体（たとえばネズミ）は反射的に繰り返し上に飛び上がったりするが、偶然横に跳ねて、シャトルボックスの片方の部屋に飛び込むことが起こる。それで音も電気ショックも止まる。数秒間隔でこのことを繰り返し反復すると、ネズミの行動は変わってくる。すなわち、ショックがくると躊躇なく、さっと片方の部屋に移動するようになる。逃避行動の発生である。ショックに対する反射的な行動に対して、選択的意図的な行動になったのである。前者はリスポンデント反応、後者はオペラント反応である。反射は長い間の進化の過程において、生物が蓄積してきた身体的能力であるが、それを基礎に、更に選択的、意図的な行動が成立したのである。このような行動を心的であると言うならば、心が発生したといえる。ここまでは逃避行動の条件づけであって、回避行動の条件づけではない。更に手続きを続けてゆくと、行動が変わってくる。すなわちネズミは音が鳴っただけで、電気ショックが来る前に、片方の部屋に移動するようになる。何回か失敗して、電気ショックを受けながらもついには、完全に音だけでショックなしに、移動するようになる。これが回避条件づけである。詳細な説明は省略するが、この行動は、音が鳴ると、ネズミに「不安」が発生し、それが動機づけになって、行動が起こると説明されているのである。ここに更に高度な心が発生したといえないであろうか。原初的な心は選択、予期と気分、情動であるといえる。

2．人間の中にある動物的行動

人間には動物的要素が多数組み込まれている。食欲をはじめとする、いわゆる本能行動は動物と変わらない。その他、たとえばボスのチンパンジーが威張る時の姿勢は肩を張り、毛が立つ。人間も威張る時は肩を張る。その象徴は武士の裃という服装に表れている。社会的な地位を特に軍人では肩の飾りで表わす。社会的地位のことを肩書きと言うのは、このことの象徴である。このように体のありよう、すなわち姿勢は人間のありようを示すものであるといえる。

3．姿勢の基礎的研究と教育実践

姿勢によって、心（気分）が変化することは、日常の経験から誰でも知っていることであろう。背中を丸めてうずくまった姿勢では、鬱の気分になり、元気が出ないであろう。背中をまっすぐにして、顔の向きを正面にすれば、活気が出て、物事に直面する態度が生まれる。このことを実験的に調査し、確かめた。また最近では姿勢と前頭葉の脳活動との関係も調べている。背

中を丸めると活動が低下するのである。すなわち姿勢は心のありようと直結しているのである。

このことを踏まえて、子どもたちの姿勢教育の必要性を考え、長野県伊那市長谷地区の小学校、中学校に腰が立つ、椅子を導入して、姿勢に対する意識の変化を観察している。現在のところ、全ての生徒に効果は行き渡っているとは言えないが、姿勢意識が成長する生徒においては、自主性が高まるなどの効果が見られている。更に姿勢意識を高める方法を考慮中である。

4．身体心理学の提唱

上記のような考え方を心理学として理解するために「身体心理学」を提唱し、理論的な整理を試みている。すなわち身体心理学とは、① 身心に関する考え方を進化論に立脚する。② ホリスティックな人間観 ③ 動きの次元の独立と重視 ④ 動きから心にアプローチするである。これはダーウィンやジェームスの身心論に立つことである。

5．身体心理学の発展

動きには、スキナーの用語に従うならば、リスポンデント反応（無意志的な生理的な反応）とオペラント反応（意志的な心的な反応）に分けられている。しかしこのほかに、無意志的でもあり、意志的でもある反応群がある。それを上記の用語を合成して「リスプラント反応（無意志的、生理的反応＋意志的、心的反応）」としてまとめる。それらの反応群は以下の通りである。① グループ1 呼吸、筋反応 ② グループ2 表情、姿勢、発声、歩行 ③ 対人距離、対人反応 このほか瞬きなどあるが、意味のある反応に限っている。 身心の関係について更に考察するならば、身体には感覚が存在するが、それは五感（対応する器官がある）がよく知られている。それらは外界の状況をキャッチする感覚である。しかしこのほかに、動き（筋反応）を感知する感覚がある。これこそが原初的感覚（体性感覚）である。

一方、心の原初的状態は気分である。そしてこの気分と上記の諸感覚とは分かちがたい状態である。たとえば緊張・弛緩といったとき、その状態は気分を表す言葉でもあり、感覚を表す言葉でもあるというように、どちらともいえない。この状態（気分＋感覚）を「気感」と称することにする。ここにおいて、身心は一如である。身心の関係は姿勢→心、心→姿勢のような因果関係ではなく、姿勢／心のように相即である。

6．身体心理学（Embodied Psychology）が目指すこと

身体心理学は、リスプラント反応のワークを通して、身心一如の気感を練り、身心の根底を築き上げることである。このようなワークを「元気功」と称しているが、このことによって、身体に根づいた精神（身体としての精神）の育成をはかり、「リアリティのある心」「生命感に満ちた心」「感動あふれる心」を実現することである。





左から3番目が春木豊名誉教授

＊講演時に使用した資料を抜粋して添付しました

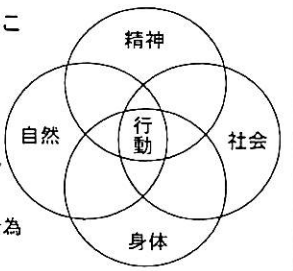
4. 身体心理学の提唱
ーからだとこころの関係:その1ー

1)進化学の立場からこころにアプローチ

2)ホリスティックな人間観

3)動きの次元の重視

4)動きの種類
反射、体動、動作、行為



4. 身体心理学の提唱
ーからだとこころの関係:その1ー

5)動きからこころへのアプローチ
(1)環境(状況)に対する反応の直接性
(2)ダーウィン説、ジェームズ説





4. 身体心理学の発展
ーからだとこころの関係:その2ー

1)動きとこころの関係の分類

(1)リスポンデント: 無意志的→身体的

(2)オペラント: 意志的→心的

(3)リスプラント: 意志的+無意志的
→身体的+心的



4. 身体心理学の発展
ーからだとこころの関係:その2ー

2)リスプラントの動きの種類

- グループ1: 呼吸、筋反応
- グループ2: 表情、姿勢、発声、歩行
- グループ3: 対人距離、対人接触

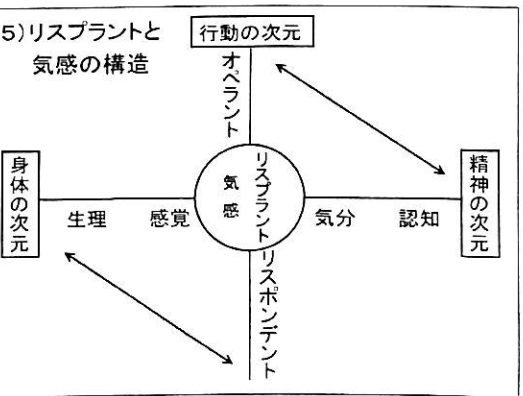
4. 身体心理学の発展
ーからだとこころの関係:その2ー

3)気感の概念の提唱
気分+感覚=気感

4)リスプラントと気感の対応関係

リスプラント	気感
呼吸	興奮—沈静
筋反応	緊張—弛緩
表情	快ー不快
姿勢	覚醒ーまどろみ
歩行	活性ー不活性
発声	開放ー閉鎖
対人接触	

5)リスプラントと気感の構造



5. 身体心理学が目指すこと
ーからだとこころの関係ー

1）からだとこころの因果関係
（1）からだからこころへ
①姿勢の意味
- 姿勢を整えることによる情動のコントロール
- 姿勢の構え＝心構え
- 正しい姿勢＝自己の主体性・存在感
- 姿勢と保健

5. 身体心理学が目指すこと
ーからだとこころの関係ー

②坐禅
調身・調息・調心



（2）こころからからだへ
①イメージの力
②認知の力

5. 身体心理学が目指すこと
ーからだとこころの関係ー

2）からだとこころの相即関係
（1）西田哲学
①純粋経験
②行為的直観
③即の論理



（2）修行の意味
身体を通しての感得

5. 身体心理学が目指すこと
ーからだとこころの関係ー

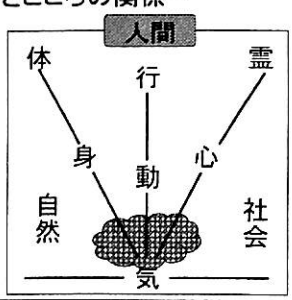
（3）気感の意味
①リスプラントを通してのからだとこころの相即
②純粋体験



5. 身体心理学が目指すこと
ーからだとこころの関係ー

（4）リスプラント訓練
による気感の育成
（元気功）

心身の活性化と健康



5. 身体心理学が目指すこと

5）身体に根づいた精神の育成
—身体としての精神—

- リアリティのある心
- 生命感に満ちた心
- 感動あふれる心

キーノートレクチャー１

傍聴記

石原　端子（大阪体育大学大学院）

本年度の体育学会は神戸で開催された。キーノートレクチャー１は、２日目の午後に「体の動きが心を作る－身体心理学という観点から－」のタイトルで春木　豊先生のレクチャーが行われた。

レクチャー終了後、会場を退出しようとしていると、吉川先生が笑顔で近づいてこられ、隣に居られた筆者の指導教員に原稿を依頼された。ところが、「ノート取りながら熱心に聴いてたみたいだしぃ、是非」というこちらも笑顔の師の一言で、原稿執筆の大仕事が筆者にまわってきてしまった。最近イチロー選手がTVCMの一問一答で「ピンチ」という問へ「チャンス」と返答されていた。どうかそうなりますように…。

さて、その日は朝９時から筆者の所属する体育心理分科会のポスター発表があり、前夜に出来上がったばかりのポスターを抱えて、早朝の電車に飛び乗った。阪急六甲駅からはバスに乗った。目的地の神戸大学までは意外にも上り坂のみ。“ウンウン”とうなりながら上っていくバスの中から、女子高校生さんが坂の上にある校舎まで軽そうな足取りで歩いて登校される様子を眺めながら、いたく感心する。会場の武道館では、すでに大きな扇風機がブルンブルンと音を立てていた。朝から暑い日だった。

体育心理学を学び始めたばかりの筆者は、スポーツ競技経験によって人はどのように変わっていくのか、という体育心理学の古典的テーマに感心を持つ者の一人である。とりわけ“体の動きが心を作る”という一文は、「こころが成熟するとは？」に興味のある筆者にとって心躍るタイトルであった。

レクチャーは先ず、心は動きの中から生まれたとする身体心理学の概念の説明から生命の起源、動きの進化（自然的動き、自発的動き、意識的動き、創造的動き）、心の起源、心の原初形態へ、そして動きと心の関係へと進んだ。「動き（呼吸、表情、姿勢など）」を独立変数として「心（情動や気分など）」がどのように生まれ変容していくのか、その過程を解き明かそうとするものであった。心が先か動きが先かの問題は、鶏が先か卵が先かの話を連想させた。その課題を、先ず動きが先であるとし、その理由を丁寧にかつ緻密に説明されるあたりのお話は、実験心理学の面白さが垣間見え楽しかった。

ところで先生が、「研究の集大成」として動きと心の関係に興味をもたれたのは、座禅がきっかけだったのだそうだ。数年前ある大会で、不甲斐ないプレーをし落ち込み、悲壮感を漂わせながら歩いていた筆者を見ていた観客の方から「Chin up！」と声がかかった。ハッと我に帰り歩く姿勢を正したとき、何故かそれまでのすべてのプレーが消化されフッと落ち着いた。先生の話を聴きながらその記憶が甦ってきた。

さてレクチャーの最後は、先生のこの問で締めくくられた。「喜んで飛び上がったのか、飛び上がるように喜んだのか、どちらが喜んでいるように見えますか？」実際にイメージしてみた。前者は「喜んで」という意識の分だけ飛び上がったような感じがする。後者は「飛び上がるように」という動きの中に、大きな無意識が関与している様な喜び方に感じる。後者の方が飛び上がった高さが少しだけ高いのかなぁ…。

キーノートレクチャー２

演者報告
「スポーツオノマトペの情報伝達機能が運動パフォーマンスに及ぼす影響」

藤野　良孝（メディア教育開発センター）

（1）はじめに

ある日「スポーツオノマトペの研究をキーノートレクチャーで話してみませんか」という打診がありました。正直なところ、ワクワクした喜びと、私で良いのだろうかという気持ちがありました。それは、スポーツオノマトペの研究がまだまだマイナー（発展途上）であり、先生方に役立つような有益な情報を提供できないと感じていたからです。以前、スポーツ心理学会のミニシンポジウムなどでスポーツオノマトペについてお話させていただく機会があったのですが、当時、会場がシーンと寂しかったことを覚えています。上述のように、発表当日「人はきてくれるだろうか」というネガティブな思いとドキドキした期待感で、会場に待機しておりました。すると、これまでよりも少し多くの先生方が足を運んで下さって大変感激しました。

（2）キーノートレクチャーの内容について

そもそもスポーツオノマトペがマイナーかつ興味をもっていただけない代表的な理由は、「擬音・擬態語的な声が子どもじみている」、「オノマトペはボキャブラリーのない人が使う」、「言葉そのものが論理的でないから、使っても意味がない」等の認識が強くあるからではないかと推察しております。そこで、キーノートレクチャーではそれらを払拭すべく長嶋茂雄監督（巨人軍名誉監督）が選手に指導するときに使うスポーツオノマトペの解説、トップアスリートのシャウト効果（広義な意味）に関して、「ンガー」「サー」「シャー」などを音声言語学の観点から広くお話させていただきました。次に、運動指導者・選手が指導や運動強勢に応じて生成、知覚しているスポーツオノマトペのうち、特に声の「高さ」に着眼し、音高呈示（「グッ」、「サッ」）が握力、全身反応時間に及ぼす影響について心理的・行動的・生理的指標から述べました。加えて、トップアスリートがスポーツオノマトペをどのような時に使い、どんな効果を得ているのかについての質的知見（インタビュー、フィールド観察）についても述べました。最後に、ICT（情報通信）を活用したスポーツオノマトペ呈示の運動学習が、モチベーションや学習遂行の理解促進に役立つ可能性を述べて、全体をまとめさせていただきました。

（3）発表を終えて

会場の先生方からは、とてもあたたかい雰囲気と励ましの声をかけていただき、喜びと癒しで一杯になりました。またこのようなご機会があれば参加（勉強）させていただきたいと思います。

最後になりましたが、専門分科会には、このような素晴らしい機会を与えていただき感謝しております。会場に来てくださった緒先生にも重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。



講演する藤野先生

キーノートレクチャー2

傍聴記

関矢　寛史（広島大学）

藤野良孝先生（メディア教育開発センター）によるキーノートレクチャー「スポーツオノマトペの情報伝達機能が運動パフォーマンスに及ぼす影響」を拝聴することができました。オノマトペ（擬態語・擬声語）は、多くのスポーツ選手・指導者が意識的もしくは無意識的に用いている現場と直結したテーマであり、以前から藤野先生のご研究に大変興味を持っていました。藤野先生はまず、実際にトップアスリートや指導者がオノマトペを使用している事例を紹介され、次いで「運動に伴って生成される擬音・擬態語の総称：運動遂行の原動力として身体的・精神的機能の促進に貢献する音」というオノマトペの定義、そして「情報伝達」と「運動制御」という2つの機能を紹介されました。また、アンケート調査に基づくアスリートのオノマトペ使用実態、使用意識、使用効果について発表されました。さらに、オノマトペの音韻・音響的特徴を詳細に分析し、柔道で使用頻度の高い「サッ」を井上康生選手が発話した録音データを再生してくださったため、音韻・音響的に微妙に異なるいろいろな「サッ」を聴くことができました。さらに、音声データを周波数分析し、音声刺激と握力値の関係を検討した一連の実験結果を発表されました。

このキーノートレクチャーを聴くことによって、オノマトペの現場での重要性を再認識することができたと同時に、他の研究トピックと関連付けて研究していくことが重要であると思いました。たとえば、メンタルトレーニングの研究とオノマトペは密接に繋がっていると思います。オノマトペは「言葉」であると同時に「音」ですから、イメージを描くときに利用できると思います。リラクセーション、サイキングアップ、集中力などの心理的スキルを向上させるために有効に利用するべきであると感じました。また、オノマトペはキューワード（cue word）でもあり、注意の焦点を操作することに利用できると感じました。プレッシャーで緊張したときに、動作遂行中の注意をどこに向けるかは「あがり」への対処法として重要ですが、オノマトペを利用した有効な対処法が開発できるのではないかと感じました。また、英語圏の人に比べて日本人の方が、日常でもオノマトペを頻繁に使うと聞いたことがあります。それが本当なら、日本人の特性を生かしたメンタルトレーニングの開発にも繋がるのではないでしょうか？

また、アンケート調査の結果にもありましたが、オノマトペを使うと「運動やスポーツが楽しくなる」という回答が非常に多く、運動スキルの学習やパフォーマンスの発揮場面をはじめ、メンタルトレーニングでのオノマトペの利用など、現場で受け入れられやすいのではないかと思いました。スポーツオノマトペの研究は、スポーツ心理学の中でもこれから大きく発展する可能性を持ったテーマであると思いました。

シンポジウム

司会報告

高妻　容一（東海大学）

今回のシンポジウムは、「モチベーションを高める指導法」というタイトルで、各分野で活躍されているシンポジストから、いろいろな立場で話題提供をしてもらった。

たとえば、①モチベーションの理論的背景や現場での指導、②中学生や高校生の生徒や選手に対する指導、③教師・指導者・ビジネスマンに対する指導、④オリンピック選手やナショナルチーム等に対する指導、⑤大学生選手に対してのモチベーションの高め方に対する指導について話題提供をしてもらった。特に、スポーツ・体育授業・進路指導・生活指導・ビジネスの現場にまで幅を広げて、生徒、学生、選手、コーチ、教員、ビジネスマンなどがどのようにモチベーションを高めるかの指導法についてディスカッションが行われた。さらに、シンポジスト同士だけでなく会場の参加者も含めて、指導やサポートの現場における新しい形でのアプローチや実践方法を見つけていきたいという趣旨であった。

（1）高妻容一氏（東海大学）がコーディネーターとして、このシンポジウムの目的や企画、モチベーションの理論的背景や現場での指導について、簡単に紹介した。同時に、各シンポジストの紹介をした。次に、日本体育協会公認スポーツ指導者養成テキストの「有機体に行動を起させ、その行動を一定の目標に方向づける過程」や「行動を一定の目標に向けて発動させ推進し、持続させる過程（教養としてのスポーツ心理学：大修館書店）」などのモチベーションの定義や背景を簡単に紹介した。さらに、目標設定用紙を用いたモチベーションの高め方の指導法などについても話題提供をした。

（2）西貝雅裕氏（太成学院大学中・高等学校）が、中学校や高等学校の生徒・選手に対する現場でのモチベーションを高める指導法の実践例を紹介した。ここでは、スポーツだけでなく生徒指導や生活指導にまで少し幅を広げて、スポーツ選手や中学・高校の生徒に対するモチベーションの高め方をどうするかなどの内容であった。特に、外発的な動機づけと内発的な動機づけを取り上げ、指導者のスタンツとして、子共たちへの外発的な指導から、内発的なモチベーションを高める指導について、話題提供があった。

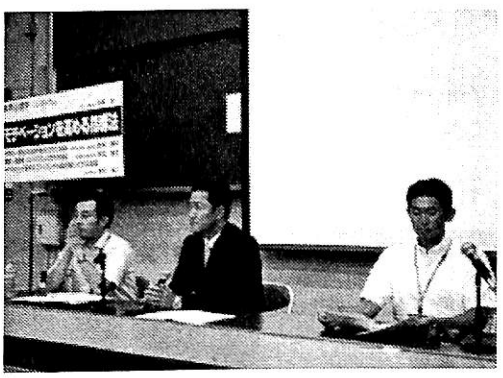
（3）原田隆史氏（原田総合教育研究所）には、教師塾という教師を集めた研究会で実践されている内容や教師へのモチベーションを高める指導法、また教師が生徒に対して、さらに企業での応用についての話しがあった。特に、ス

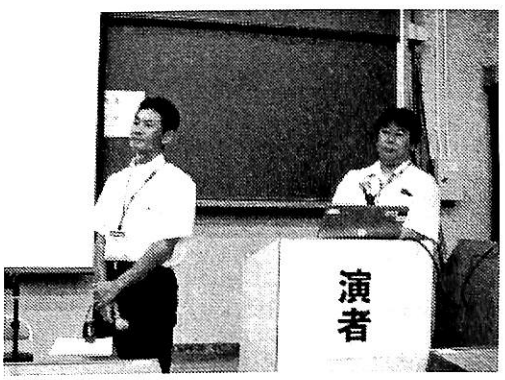
ポーツの現場で実践したことが、教育やビジネスの世界でどのように応用されているのかなどの話題提供があった。たとえば、「経営とは、夢・思い・志を掲げ、具体化するための全てのもの」とした上で、教師は学級経営、スポーツ指導者はクラブ経営、経営者は会社経営、店長は部店経営という立場で、生徒・選手・社員・部下を育てることである。そこには、指導者が育成理念を持ち、指導する人々を自立させるとしたら、目標設定等でモチベーションを高める必要があるなどの話題提供であった。

（4）菅生貴之氏（大阪体育大学）は、JISS（国立スポーツ科学センター）で関わった、オリンピックやナショナルチーム等の世界で戦う選手やコーチのスポーツ現場でのモチベーションを高める指導法についての話であったが、現場における指導やサポートの難しさを話題提供してくれた。特に、国立スポーツ科学センターという特殊な組織において、競技力向上のためのトータルサポートをする場合に、一流競技者でも多くの不安や悩みをかかえており、それらがモチベーションの低下につながるケースやとにかく話を聞くことから、選手のモチベーションの再構築をさせる立場であったことなどが話題提供された。

各シンポジストの話題提供の後では、会場の参加者からの質疑応答、またディスカッションが熱心に繰り広げられた。今回は、体育心理学専門分科会のメンバー以外の参加も多く、現場でのモチベーションを高める指導法についての興味が高いことがうかがえた。

最後に、今回のシンポジウムは、理論や研究という研究者の観点ではなく、現場での指導という観点に注目し、現場ではどのようなモチベーションの高め方が実践されているのかを取り上げた。ディスカッションの中で、その現場での指導や実践方法に対して、理論的にはどうかという質問等も出て、現場（実践）と研究（理論）のキャッチボール（情報交換）ができたと考える。





シンポジウム

演者報告

西貝　雅裕（太成学院大学中学・高等学校）

「モチベーションを高める指導法」のテーマのもと、４人のシンポジストがそれぞれの分野、観点から話題提供を行い、私からは「中学生や高校生の生徒や選手に対する指導」についての話題提供を行いました。以下に内容についての簡単な報告を行います。

まず、対象となるのは中学生・高校生といったジュニア世代であり、教育的スポーツ心理学を積極的に指導介入することを行っている。そして、高校生世代になると外発的動機づけ（怒られるから、ペナルティーがあるから）による、モチベーションの低下、やる気の欠如、が見られることもある。そこで、“あなたはなぜ、そのスポーツをしていますか？”のシンプルな質問を投げかけ、忘れかけている内発的動機づけを見直し、大切にすることによってモチベーション（やる気を高める）ことを大切にしている。

また、内発的動機づけに積極的に働きかけをすることにより、自己責任に気づき、自分の競技に対しての価値観を高めることも目的としている。

いい指導者ほど、このあたりの価値観を与える哲学的思考にすぐれていると感じている。一流指導者ほど選手のやる気を引き出すのがうまく、その競技を好きにさせることもうまい。いわゆるプラス思考で選手に接し、選手もプラス思考になるので、練習に前向き、やる気、積極的に取り組む。

私の場合は、専門が野球なので、野球を例に例えた。高校野球の目的は甲子園大会ではない。甲子園ありきではなく、「人格の形成」すなわち、よき人間作りが理念・目的である。そのうえで、目標として甲子園大会という舞台で野球という競技を披露し合う。それが甲子園大会である。このように、物事の価値観、理念を先行させることを大切にする。

したがって、中学生・高校生を中心とするジュニアアスリートにはスポーツの目的を教え、価値観を伝え、競技スポーツの楽しさ（本質）を教える。

そして、その価値観を伝える手段として、一流選手をモデルとして、その競技に臨む態度・姿勢、考え方、哲学的思考もあわせて教える。

また、アティチュード・トレーニングとして、態度・姿勢をトレーニングする。形から入る。すなわち“身構え”をつくり、“心構え”を作る。

例えば、自信のある顔、自信のある目、やる気のある顔、やる気のない顔、やる気のある立

ち方、座り方、やる気のない立ち方、座り方、集中している目、集中している姿勢。

人は、図らずも心の状態が何らかの形で表現される。それが、態度、姿勢、顔つき、目つき、声の大きさ、抑揚、言葉づかいなど、何らかの形で表現をされている。したがって、その形（身構え：態度・姿勢）から働きかけ、心の構え（やる気、モチベーション）を作っていく。このアティチュード・トレーニングを、日常生活を通じて鍛えていく。

メンタルトレーニングの目的はいくつか考えられる。競技力向上を目的とするので、“本番での実力発揮”はもちろんであるが、本番でより実力を発揮するためには“質の高い練習”に取り組みより効率よく上達することが求められる。そこで、特にジュニアアスリートは生活の一部に「練習（部活動）」があると考えることができる。したがって、“質の高い練習”を行うためには、“質の高い生活”を送ることが必要になる。練習だけで競技力向上を図ることが難しいことは容易に考えることができる。質の高い生活を過ごすためには“プラス思考”で生活をすることが早道で、ジュニア世代のアスリートにおいては、アスリートとしての成長のみならず、プラス思考で生活をすることにより、人間的な面での成長も大いに促され、人格の向上・成長もメンタルトレーニングの持つ目的の一つとなっている。

まとめ。中学・高校生年代のジュニアアスリートには教育的スポーツ心理学の観点から、積極的に指導・介入（教育）を行う。そしてその入り口としているのはアティチュード・トレーニングである。まずプラス思考の態度・姿勢を育て、生活の質を高め、生活面からメンタルトレーニングに取り組み、内発的動機づけを大切に、スポーツの価値観を養い、モチベーション（やる気）を高める実践に取り組んでいる。

シンポジストとしての感想

今回体育心理専門分科会のシンポジウムのシンポジストとして話題提供をさせていただきましたが、貴重な機会と貴重な経験をさせていただき心より感謝いたしております。ありがとうございました。

対象とするフィールドが変われば、当然のことですが指導する側の姿勢も変わります。それぞれのレベル、フィールドで研鑽を重ねてまいりたいとあらためて思いました。

フロアーの多くの先生方との情報交換をすることができ非常に有意義なシンポジウムでありました。ありがとうございました。

シンポジウム

演者報告

菅生　貴之（大阪体育大学）

私は前職の国立スポーツ科学センターにおいて、研究員として心理面のサポート活動をしていた。今回“モチベーションを高める指導法”という、競技現場で比較的関心が高いにもかかわらず大変難しいテーマをいただいた中で、私が選手に対して行ってきた「技術を高めるための指導」ではなく、「競技力向上のためのスポーツメンタルトレーニング(以下、SMT とする)技法指導」という関わりについて話題を提供させていただいた。このような機会を与えていただき、司会者の高妻先生および分科会関係の各位に謝意を示したい。

私が専門としている SMT においては、モチベーションを高めるためには適切な目標設定や日々の心理モニタリング、心理的コンディショニングなどの技法が有効であるとされている。私たち SMT の指導者は異なった課題を抱えてメンタルトレーニングを希望してくる選手の主訴を聞き、SMT 技法をどのようにプログラミングするかが問われる。その際は「何を」提供するかよりも「どのように」提供するかの方が重要であることが多い。

本シンポジウムにおいては、一流競技者に対して一般的な SMT プログラムによる技法指導を試みた事例の概略を示しながら、「SMT 技法の指導者」としての関わりの限界について述べさせていただいた。国立スポーツ科学センターという組織の特殊性も関連していると思うが、一流競技者が心理相談や SMT を希望してくる場合には、従来の SMT 技法指導で競技者に対処法を指導していくような関係は長くは続かない。JISS に来館する多くの選手は国内では一流選手としてのキャリアを積み重ねてきており、SMT 技法への適応が大変早い特徴がある。そもそも SMT 技法は競技会で成功を収めた競技者の取り組みを参考にして体系化され、効果が実証されてきたものであるので、当然といえば当然であるかもしれない。技法指導の関わりがおおむね終了の時期を迎えると、選手は「競技継続への疑問」であったり、「競技力向上の困難さ」、「チーム内での人間関係の崩壊」などを訴えてくる。そうした競技生活や日常生活上の問題が、競技に対するモチベーションと深く関わりあっているため、それらを分離して技法指導の関わりのみで解決していくことがもはや困難な状況にあることが多い。

そうした選手の複雑で込み入った訴えに対しては効果的な単一の SMT 技法は、ない、と言

っていいだろう。そこで我々SMT 指導者ができることはその困難な状況を共感的に理解して寄り添っていくことだけである。選手はモチベーションの低下を訴えながらも、私に話をすることで一筋の光明を探していく。一流競技者であるが故か、彼らは一度低下したモチベーションを自分の力で再構築していく「力」を持っていた。どうにもならない困難な状況を語りながら、最終的には多くの選手がそのどうにもならない状況を理解し、新たな理解の仕方を発見して行ってくれたように思う。そうした共感する関係が定着してくると、選手は私という立場の人間をどのように使うかを理解するようになってくる。多くの場合、試合直前になると私のもとにやってきて、試合に対する「決意表明」をして試合へのモチベーションを高めているようであった。

本シンポジウムではとかく「指導によってモチベーションが高まる」という方向に議論が向きがちであったように感じている。もちろん、対象によってはそういうことも可能ではないかと感じるが、少なくとも私の関わったケースではそういう選手は少なかったので、シンポジウムの趣旨とは合致していたかどうかは分からないが、共感することでモチベーションを再構築する手助けをした、という関わり方を紹介させていただいた。

全体の議論の感想としては、発表の時間が少し長くなってしまい、議論にあまり時間が割けなかったのは残念であった。ポピュラーではあるがかなり困難なテーマである「モチベーション」というものの奥深さを議論する時間があまりなく、技法の確認を主とした質問にほとんどの時間が割かれてしまったことも反省点として感じている。また、最後にご意見をいただいた名古屋大学の西田保先生からは、学会のシンポジウムとしてもう少し科学的なエビデンスに基づいた見地も必要ではないかとの指摘があった。実践者としての技法指導のトレーニングも重要ではあろう。一方で実践者だからといって経験則によってのみ指導を行えばよいというものでは決してないはずである。そこに科学的根拠を求めていくことは、私たちの学会認定資格(SMT 指導士)の存在を高めていく上でより重要であり、肝に銘じたいご指摘であったと思う。

シンポジウム

傍聴記

佐々木　史之（日本体育大学）

今回のシンポジウムは「モチベーションを高める指導法」という、スポーツ心理学を学ぶ者にとっては元より、教員、指導者、あるいはそれらを目指そうとしている者にとって誰もが興味を抱くテーマであり、会場はほぼ満席に近い状況で進行した。

まず、司会の高妻先生の「動機づけ」についての導入部分から始まり、3 人のシンポジストがそれぞれ違った立場からご自身の経験に基づくアプローチ法を発表し、質疑応答を行った。

西貝先生は、中・高の学校現場の立場から、モチベーションを下げないようにする“予防”が大切であると強く主張された。その中で目的と目標を区別させ、「なぜそのスポーツをしているのか」を気づかせることや、一流選手のモデルを挙げること、「身構え」が「心構え」につながるアティチュードトレーニングの大切さについて述べられた。質問の一つに、中学生に一流選手のモデルを示すのは離れ過ぎていないかというものがあったが、技術的な内容ではなく、道具の扱い方などを含めた競技に対する姿勢や価値観を紹介するという回答であった。

原田先生は、学校教育現場から培ったノウハウを生かしてご自身で開設した研究所の立場から、教師、指導者、会社経営者に共通する課題として、生きる力を身につけた「自立型人間の育成」を訴えていた。その中に目標設定や強い勝利意識、日誌指導や、心技体・生活のバランス、コミュニケーションの大切さなどを挙げていた。ニートに関してどのようなアプローチが有効かという質問には、対面で行うコミュニケーションが必要で、農業体験などで、狂っている体内時計を取り戻すことも効果的であるという回答であった。

菅生先生は国立スポーツ科学センターの立場から、特にモチベーションが下がっているトップアスリートに対して SMT 技法をコミュニケーションに用いながら、選手の話をとことん聴くことを紹介された。すると選手には「気づき」が生まれ、自分自身で自然に行っていた心理的コンディショニングのやり方や行動の意味を理解し、自分でモチベーションを高めてくれるという。選手が安心して悩みを打ち明けられる相談者が必要というふうにも受け止められた。選手の話を聴く場合、時間の区切りをするのかという質問には、選手の方が時間認識を持っているとのことであった。

最後に全体を通しての質問があったが、その中で、モチベーションを高める方法としての理論の裏付けや立証をして欲しかったという西田先生の意見があった。また高妻先生からご自身が実践されているプログラムの紹介もあり、漫画や映像によるモチベーションを高める方法もあることを付け加えられた。いずれにしろ、現場での有効な指導法を学べた有意義なシンポジウムであった。

シンポジウム

傍聴記

川田　裕次郎（順天堂大学大学院）

『モチベーションを高める指導法』をテーマにシンポジウムが開催されました。このシンポジウムの設定の趣旨として、司会をされた高妻容一先生はこれまでのモチベーションの研究では理論が先行し、現場レベルでの十分な検討がなされていないことを指摘され、実際に現場ではどのようなアプローチが行われているのかを検討することが目的であることを述べられました。シンポジウムでは3人の先生から、実際の現場ではどのようにモチベーションを高め維持していくのか、あるいはモチベーションが低下してしまった選手をどのように支援していくのかということをそれぞれの視点からお話しいただきました。

＜西貝雅裕氏＞

西貝氏は中学・高校で教鞭をとり野球部監督として指導現場の第一線で活躍されてきました。西貝氏は野球を例に中学生や高校生といったジュニア世代の競技者に対してどのように関わっていくのかをお話いただき、実際の指導現場で行っている“なぜ”を考えさせ内発的動機づけを引き出していく方法を紹介されました。さらに、中学・高校といったジュニア世代の競技者にはまず指導者が積極的に関っていくことや生活の中に競技そのものを位置づける重要性を熱く語られました。

＜原田隆史氏＞

原田氏は公立中学校で陸上競技部の監督として13年連続日本一を達成した経験を活かし、教師やビジネスマンを対象にモチベーションを高める方法を指導され、活躍されています。原田氏はあらゆる優勝者や成功者に学び、強い勝利意識と目標設定をすることがモチベーションの高揚には重要性であると語られました。そのためには、“心づくり指導”（Plan:目標設定→Check:態度教育→Do:やりきり→See:心の整理→ Share:ノウハウの共有）が有効であると語られていました。

＜菅生貴之氏＞

菅生氏からは国立スポーツ科学センターにおいてトップアスリートの心理的な問題の相談を数多く扱ってきた経験から、いくつかの事例を提供していただき、それらにどのように関わってきたかについてお話いただきました。トップアスリートにはその立場ゆえに特有の奥深いモチベーションの低下パターンが存在し、彼らを支援していくためにただ一つ確実にできることはカウンセリングマインドをもって選手を理解し選手の複雑な悩みに寄り添うことであることを強調されていました。

その後、総合討論に移り、会場から数多くのコメントや質疑応答があり活発な意見交換が行われました。最後にモチベーションの研究者として総合的な意見を求められた名古屋大学の西田保先生は現場での実践にはどのような理論的な背景があるのかをより明確に示していくことにより、さらに「実践」と「研究」の歩み寄りできると挨拶され、盛会のうちにシンポジウムが終了しました。

口頭発表

座長報告

栗木　一博（仙台大学）

三件の発表があった。まず一件目は京都大学の國部雅大先生による発表で輻輳および開散眼球運動が到達動作およぼす影響に関する報告がなされた。丁寧なプレゼンテーションが行なわれ、実験のデザインや装置に関して具体的なイメージを持つことができた。発表の最初に剣道の「遠山の目付け」が紹介され、これもまた、研究の具体像を喚起するのに大変役立った。結果は輻輳眼球運動つまり、遠方から近方に焦点を合わせる眼球運動がその逆の開散運動よりも到達動作が早く安定させるというものであった。これは、先述した剣道の遠山の目付けを裏付ける結果であり、大変興味深かった。

二件目は名古屋大学の山本裕二先生による発表で、被験者の手による人形（？）の操作をコンピュータディスプレイ上に投影し、イメージを可視化することによって運動の学習を支援しようとするものであった。これまで、描画や人形によってイメージを具体化するという報告がいくつかなされてきたように記憶しているが、本報告では動きを一つの流れとして可視化することが可能という意味で大変ユニークなものであった。結果として、運動イメージが試行を繰り返すことによって時間的空間的に正確性を増すこと、運動イメージの空間的な正確性とパフォーマンスとの間に相関関係があることが報告された。被験者が作成したイメージ映像が発表中に提示されていたが、微妙で、非常に短い時間で行われる手首の動きなどの再現には研究のユニークさは抜きにして、まだ実際のパフォーマンスとは隔たりがあると感じた。また、この報告で用いられた運動課題はダーツであり、動きが比較的単純で、イメージ可視化のためのツールを操作しやすいものであったが、より空間的にダイナミックな動作についてはどのような結果が得られるのだろうか是非知りたいところである。投球動作で「肘が上がらない」といったフォームの欠点をこの装置を使って矯正することが可能だろうか。興味は尽きない。

三件目は大阪工業大学の木内敦詞先生による発表で、大学において行われている体育実技の授業において活動後の心理的・社会的・生理的自己評価による介入を行なうことがその後の運動行動や運動に対する意思決定（運動から受ける恩恵や感じる負担によって測定される指標）にどのような影響を及ぼすかについての調査報告であった。結果は授業時間後の介入が運動に対する恩恵認知を上昇させるというものであった。しかし、ここでは最も重要であろうと考えられる詳細な授業内容について触れられていない。授業後チェックシートとの関連性を報告の中に盛り込むことができれば授業の主観的な充実度などの影響も論じることができたのではないかと考える。発表の領域が多岐に亘っており、セッション全体を通じたまとめをすることができなかった。十分に座長の勤めを果たせたか不安が残る。

口頭発表

座長報告

山本　裕二（名古屋大学）

「体育系大学生の友人関係の特徴 - ライフイベントの分析を中心に - 」栗木一博(仙台大学)

まず演者よりサブタイトルとしての「ライフイベント」に関しての訂正があり，友人関係の認知と行動に関する尺度作成とそれらの尺度間の相関について体育系大学生の特徴が報告された．フロアの桂先生（武蔵丘短期大学）から，ここで示された友人関係の特徴は体育系の特徴なのか一般的な大学生の特徴なのかという質問が出され，自己開示という因子が抽出されることが体育系学生の特徴であるという説明がなされた．

「『大福帳』を用いて対人コミュニケーションスキル支援を意図した生涯スポーツ教育実践の有効性 - 大学適応感への効果検証 - 」西田順一(群馬大学)・橋本公雄（九州大学）・山本勝昭（福岡大学)

三重大学の織田先生が開発された授業改善方法である「大福帳」を，大学体育授業における社会的スキル獲得に援用し，適応感の変容に影響したとする報告がなされた．土屋先生（大阪体育大学）から，(1)授業実践者と研究者の関係，(2)介入群と対照群との授業種目の違いが結果に与えた影響，(3)クラスサイズが小さいことによる初期値のばらつきの３点について質問がなされた．(1)に関しては研究者自身の授業であり，(3)に関しては分析方法を検討することによって解決したい旨回答があったが，(2)に関しては明確な回答はなかった．

「ゴルフ、テニス競技中の唾液アミラーゼ活性と競技パフォーマンスの検討」佐藤啓壮(平成リハビリテーション専門学校)・阿部靖彦（東北福祉大学)

唾液アミラーゼ活性(%Amy)による客観的ストレス評価を試みるものであった．大学男子ゴルフ選手と高校男子テニス選手を対象に，試合中の%Amy を測定し，ゲームパフォーマンスとの関係を検討し，ゴルフの場合には%Amy が低い方が，テニスの方は%Amy が高い方がよいという報告がなされた．橋本先生（九州大学）から心理的ストレス評価との関係と測定法に関して質問がなされ，心理的評価とは関係がないというデータもあること，また計測エラーに関しては１割未満でありある程度安定して測定できることが回答された．関矢先生（広島大学）からは，運動量と%Amy との関係について質問があり，関連はありそうだが実際フィールドでの検討結果はない旨回答された．

ポスター発表直後ということもあってか聴衆が少なく残念であった．また，限られた時間ではあるが，それだけに研究の目的や方向性（入口）と研究結果（出口）についてのわかりやすい説明が不可欠であり，さまざまに細分化された現状にあっては，少なくとも体育心理学，あるいは体育・スポーツ科学という領域の人には研究内容が伝わるようにすることが発表者の責務であり，そのことが，研究の質を高めることと等価であると自戒の念も含め強く感じられた．

ポスター発表

ポスター発表記

野田　さとみ（奈良女子大学大学院）

発表当日9月5日の神戸は、台風9号の影響もあり最高気温 34.8 度を記録した真夏日となりました。バスを降りて受付までに加え、発表会場である武道場へのひたすら続く上り坂に少々戸惑っていたところ、トレーニング中の運動部学生がエネルギッシュに通り過ぎていき、これぞまさに神戸大学という雰囲気を感じました。会場は、空調がない環境に発表準備の熱気が加わり、中に入ると一気に汗が噴出すほどの暑さでした。事前に予測はしていたものの、半日ここで過ごせるだろうかと少々体力に不安を感じてしまったのですが、さすがは体育学会、そんなことに動じる様子もなく準備を進めておられる先生方を目の当たりにし、一瞬でも気持ちが萎えそうになった自分に恥ずかしさを覚えました。そして、この会場で数時間を過ごす覚悟を決め、ポスターの掲示を始めました。今回の学会は近隣の会場での開催ということで、奈良女子大学関係の方々の参加が多く、準備は協力しあいながらあっという間に完了させることが出来ました。

実は、発表の前日には突然ポスターサイズの印刷が出来ないというアクシデントが起き、発表が出来ないのではという不安いっぱいの状況でした。しかし、急遽代替方法でポスターを作成することになり、研究室のメンバーのみごとな協力体制に助けられ、夜遅くまでかかりましたがポスター完成にこぎつけることが出来ました。本当に自分の力だけでは無理だったと、助けて下さった皆さんに感謝をしつつ、ポスターの前に立たせていただきました。

今回の発表は、自分にとって研究内容を変更して初めてのものだったため準備不足の部分が多く、どのような反応をいただけるのか、緊張のスタートでした。会場は発表者と来場者の白熱したやり取りで気温がますます上昇しているようでしたが、気をひきしめポスターの前に立った途端、さっそく興味を持って来て下さる方がありました。伝わっているだろうか、ご理解いただけるだろうか、これでよかったのだろうかと自問自答を繰り返しながらでしたが、研究目的・方法・結果等について精一杯説明をさせていただきました。そして、たくさんのご指摘・ご意見をいただきました。データを処理やそこに現れた結果に集中するあまり、研究の位置づけそのものが見えなくなりがちだったのですが、客観的な目でご指摘をいただくことで、自らの視野を外に向け研究内容と社会とのつながりを見つめなおす良いきっかけとなりました。多面的な視点で直接ご意見を聞かせていただけるポスター発表の魅力を、改めて感じました。その中で具体的なこれからの課題や励ましのお言葉をいただけたことが大きな収穫です。

最後になりましたが、拙い説明にもかかわらず貴重なご意見を下さった方々、ご指導をいただいた佐久間先生、そして協力してくれた研究室のメンバーに心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

ポスター発表

ポスター発表記

中本　浩揮（鹿屋体育大学大学院）

本年度の日本体育学会は開催日の前にクールビズでの参加という御触れが封書で届いたが，学生は身なりを整えて汗だくで発表するものだとの勝手な信念からスーツを着て発表会場に向かった．が，ポスター会場はさすがに暑かったのでスーツは脱ぐことになった．

日本体育学会でのポスター発表は2度目となる．他大学の先生の意見を頂けるのが学会ぐらいしかない私にとっては発表自体が年数回しかない貴重な時間であるが，本学会での発表は様々な領域の先生方からもご教授頂けるという点で他学会にない面白さがある．これまで，スポーツにおける熟達化をテーマに研究を進めてきたが，今回は熟練者の優れたパフォーマンスを媒介する要因として抑制機能に焦点を当てて発表をさせて頂いた．抑制機能は急激な環境変化に行動を適応するために必要な機能で競技との関わりが深いと考えられるが，行動指標のみから抑制自体を捉えることは難しく，抑制の調査に信頼性の高い実験パラダイムや脳波などの生理指標を用いるのが一般的である．しかし，今回は急激な速度変化を伴う一致タイミング課題という抑制機能の調査としては新しい実験パラダイムでの挑戦であったため，結果の解釈が恣意的ではないかと発表に大きな不安があった．

今回の発表を通して今更ながら考えたことは，自分の研究がスポーツ現場の何の役に立つのかという当たり前で最も重要な部分だった．多くの人とディスカッションをさせて頂き，抑制機能そのものの説明がままならないというのも問題だが，この研究を現場にどうフィードバックするのかという質問に対して言葉が詰まったのはさらに重要な問題と感じた．もちろん，現場に即利用可能な研究⇒良い研究でもないだろうし，その逆でもないと思うが，少なくとも研究を積み重ねた上で最終的に到達するところは現実場面への応用だろう．そう考えると，自身の研究が熟達化研究として次の段階へと進むためには，どのような活動が抑制機能の獲得につながるのかといった学習過程を解明することが必要であると感じた．特に，多くの被験者が減速に対する一致タイミング課題に適応できなかった事実と野球選手はそれが可能であったという事実は，今回用いた課題が抑制に関わる運動学習過程を学習初期から熟練した水準まで観測できる可能性があることを示している．このテーマの発見は今学会参加の大きな収穫であった．

いつもながら思うが学会という場は本当に未熟者の私にとって有意味な苦い思い出を作ってくれる．このような貴重な体験は，体育学の発展を支えておられる先生方，そこに追いつきたいと考えている同士達あってこそ経験できることである．私の難解な発表に対して建設的な御示唆を頂けたことをこの場を借りて深く感謝申し上げたい．

ポスター発表

ポスター発表記

田中　千恵（神戸親和女子大学）

本大会は9月5日から7日にかけての3日間、第58回大会が神戸大学で開催されました。残暑の厳しさが感じられましたが、体育館の熱気と同様に、ポスター発表会場では熱い雰囲気が伝わり、多くの意見が交わされ盛況であったように思います。発表時間が過ぎていても、活発な議論が至る所で行われておりました。

この度は、地元神戸での開催ということで、期待を胸に楽しんで参加することができました。私にとっては、何年か振りのポスター発表だったのですが、ポスターの形式は色をうまく取り入れているものが多く、視覚的な効果が感じられました。また、内容もわかりやすく、様々な形態のものがあったので、見ているだけでも楽しく大変勉強になりました。

体育心理専門分科会における発表内容は、多岐にわたり、様々な研究手法があり、とても刺激を受けました。中でも特に興味を持ったのは、質問紙法を実施したあと、地域社会への介入や応用も見られた発表で、大変参考になりました。さらに、具体的にわからない所を直接に質問することができましたので、研究に対する意欲を高めることができました。現場への応用や介入は、いつも悩むところであるのですが、類似した研究分野の先生方と議論することで、貴重な示唆を与えて頂きました。今回の学会のように、発表者と傍聴している双方が、熱い思いを持って議論をしていると、お互いに良い刺激を受け、今後の体育心理学会の発展につながっていくことを強く感じました。自身の発表では、大学院生からの質問も多く受け、嬉しく思いました。また会場では、学生や大学院生やの姿も多く見かけましたが、今後も積極的にこういった学会に参加し、さらに研究を深めていかれることを切に願います。

また、今回の発表では、素敵な出会いもありました。今春、卒業した学生と発表会場で偶然に出会ったことは、大変嬉しい出来事でした。彼女は大学院に進学し、今回は初めての発表だったそうです。彼女の無事に発表を終えて自信に満ちた様子は、とても輝きに満ちており、自分も初心を忘れずに研究に取り組んでいこうと思いました。

このように、ポスター発表の場は、素敵な出会いと遭遇し、普段なかなかお会いできない先生方と直接に納得がいくまで議論することができるので、とても貴重な機会であることを改めて実感致しました。自身が、研究の方向性について迷っている部分がありましたので、ポスターを見に来て下さった先生方と、直接お話しを交わすうちに、自分なりに理解を深めることができました。さらに、今後の研究をどうやってすすめていけばよいのか、大変ヒントになりました。

最後になりましたが、質問に対して熱心にお答えくださいました先生方、ならびに私のポスター発表を傍聴してくださいました先生方に、この場をお借りしてお礼申し上げます。また、学会でお目にかかれることを楽しみに、研究に取り組んでいきたいと思います。

ポスター発表

ポスター発表記

山﨑　将幸（九州大学大学院）

この度、神戸大学で開催された第58回日本体育学会に参加させていただき、私自身も事例研究のポスター発表をさせていただきました。今回の発表に関しても、スポーツ心理学分野の諸先生方や実際に競技現場でサポートをされている方に見ていただいて、今後の研究活動に対して非常に参考になる意見をいただくことができました。発表の中には、競技選手を対象としたものだけではなく、様々なスポーツやその他運動に関する心理的現象を扱った研究があり、研究に対する視野を広げるという意味でも、大変勉強になりました。このポスター発表は、発表者と討論者が直接議論できることが利点だと思います。口頭発表は、質問しにくい場合もありますが、ポスター発表では、比較的容易に質問することができ、研究に対する理解がより深まると思います。特に、私たちのような大学院生にとっては、諸先生方からの研究に対するアドバイスをいただくことのできる良い機会になっていると感じました。

ポスター発表の会場では2日間にわたって83のポスター発表が行われ、会場である体育館は大勢の人が訪れ、非常に活発で熱気あふれる議論が行われていたように感じました。体育心理学分野は、他の分野と比べてもポスター発表の数が非常に多く、熱心に研究に取り組んでいることが伺えると思います。私自身も発表以外の時間で会場をまわってみると、議論する人であふれており、発表時間の1時間では議論が足りずに、発表が終わった後も、休憩所等で議論・討論が続いていた光景を目にしました。他の分野のポスター発表も観覧しにいきましたが、このような光景は、体育心理学分野特有の現象であり、ポスター発表者と来場者の意欲・関心の高さを実感しました。

また、今回の発表では、大学院生の発表が数多くあったように感じました。我々大学院生にとっては、学会発表の場を通じて、他の大学院生の活動を知ることができる機会であると思います。こうした大学院生の発表の中には、様々なフィールドで研究活動を行っており、我々自身の研究活動の紹介も含めて情報交換の場となっており、大学院生同士で刺激を受けあうことができたと思います。

最後に、私自身、日本体育学会は学部生のころから参加しており、今回で6年目となります。6年間を通じて、研究発表から多くのことを学び、多くの出会いを経験し、現在まで研究活動を進めて参りました。今後も精力的に研究活動を行い、体育心理学専門分科会の発展に貢献できるよう努力していく所存であります。また、貴重なご意見をいただいた諸先生方ならびに分科会の事務局の方々に感謝の意を表します。

大会参加記

武田　大輔（筑波大学・奈良産業大学）

本年度の学会が開催された神戸は，私の故郷です．神戸で生まれ，高校生までの 18 年間を過ごしました．実家が阪急六甲駅近くですので，神戸大学は私の遊び場のような所でした．学会会場に向かうまでの風景が懐かしく，例年とは違い，「ちょっとそこまで出かけてくる」といった気持ちで参加しました．

さて，最初に訪れたのはポスター発表会場でした．9 月というのに，真夏のような暑さで，ポスター会場には，汗を拭きつつ研究発表を眺めている先生方が多かったです．様々な分野の研究発表があり，先生方の研究に対する積極的な姿勢に，私自身もがんばらねばと刺激を受けました．近年の発表でよく目にする研究方法に，質的アプローチというのがあります．質的アプローチを採用している研究を概観すると，各研究者によって，質的アプローチの「質的」の考え方が異なるように感じます．質的研究について，今一度整理する機会・場があってもいいのではないかと感じました．また，メンタルトレーニングに関する研究も多く目にします．しかし，学会発表では数多く目にするのですが，いわゆる学術雑誌での掲載は少ないように感じます．このあたりのギャップが何であるのか考えることも必要かと思いました．

ポスター発表の他に，キーノートレクチャーも拝聴させていただきました．レクチャー1は，早稲田大学名誉教授の春木先生により，体の動きが心を作る -身体心理学という観点から- の題目で講義が行われました．「行動」という観点から，いかに心が行動によって形成されうるのかについて，様々な研究が紹介されました．意識・無意識，身体・精神の中間の概念として，「リスプラント」や「気感」など身体心理学ならではの概念が提唱されていました．

レクチャー2 は，若手研究者である藤野先生による，スポーツオノマトペの情報伝達機能が運動パフォーマンスに及ぼす影響についての講義でした．これは，藤野先生の博士論文作成の中で行われた研究が中心となっていたようです．主にスポーツ指導などで用いられるオノマトペについて，音の違いと力の出力の関係について量的な方法を中心として，丁寧に研究を重ねてこられた様子が伺われました．今後，どのように動きの質と結びつけていくのかと，期待を持ちました．

ところで，私自身も大会・専門分科会企画とは別に開催された臨床スポーツ心理研究会にて，心理臨床の事例を発表させていただきました．普段は，心理臨床を専門とする先生との議論が多いのですが，ここには様々な立場の先生方が参加されておりましたので，新たな視点からの質問もあり，私としてはとても有意義な時間を過ごすことができました．

故郷での学会参加は，研究者としての歩みを，自己の原点からの歩みと織り交ぜ，問いなおし再構築する機会だったのではないかとの思いを巡らせ，神戸を後にし，つくばへ戻りました．

（参加記を書くにあたり，私の記憶の再現をサポートしてくださった国立スポーツ科学センターの平木先生に感謝申し上げます．）

大会参加記

桂　和仁（武蔵丘短期大学）

特に，キーノートレクチャーが面白かった．

春木豊先生の「体の動きが心を作る　－身体心理学という観点から－」も，藤野良孝先生の「スポーツオノマトペの情報伝達機能が運動パフォーマンスに及ぼす影響」もである．内容の詳細は傍聴記を書かれる方にお譲りするとして，お二人は風貌もテーマも対照的であった．どっしり落ち着いて哲学者として語られる春木先生と研究するのが楽しくてしょうがない感じで少年のような表情を浮かべながら発表される藤野先生．報告者は不安やあがりに対処する際，“心を心でコントロールするのは難しい．体で心をコントロールする適情的方法のほうが容易である”と常々講義の中で述べてきた．これは，亡くなられた太田鐵男先生の受け売りであったが、お二人のレクリャーを拝聴しさらにその意を強めることが出来た．テーマが対照的だったと記したばかりであるが，内容を突き詰めていけば同じところに落ち着くような気がした．

体育心理専門分科会に籍を置く者として，心苦しいが，今回の学会は発育発達専門分科会のキーノートレクチャー「幼少年期の運動指導　－その内容と方法，そして指導者育成－」で始まった．心理のシンポジウムと重なるので迷ったが，幼児の運動発達を授業で取り上げることが多いのと，３０分間で終了するということで先ずこちらに向かった．

そして引き続くシンポジウム「幼少年の身体・生活・発達　－研究から見えてくるもの，そして提言－」にも参加してしまった．様々な調査データと提言に頷いてしまったからである．“熱心さが故に方法に拘りすぎる運動指導では説明を聞いて待っている時間が長い”“自由あそびの多い幼稚園児や保育園児ほど運動能力が高い”“あそびとは，内発的動機付けによる自己決定と有能さの認知の追求”“有能感と優越感は違う”等々を聞いているうちに体育心理のシンポジウムに出そこなってしまった．同じように残念なことがあった．２日目のポスター発表と口頭発表が重なってしまった点である．演題数の多さ，時間と場所の制約など仕方の無いことである．それにしても，何とか工夫できないものかと感じた．何年も前は口頭発表が主であった．これでは質疑応答の時間が短時間にならざるを得ず，不十分間が残るため，より深く個別に聞けるポスター発表が望まれた．現実は，熱心な研究者が多く演題数に見合ったスペースが確保できない問題が生じている．暑さと混雑の中，人ごみに分け入ってゆっくりと聞くほどの熱心さが報告者には無く，待っている人にも遠慮してしまう．発表者も緊張感を失ってしまうのではないだろうか．口頭発表は映像以外に発表者の個性を垣間みることができるように感じる．もう少し，口頭発表を増やすことが出来ないものかと郷愁を覚えた熱い暑い学会であった．

Ⅲ. 研究会の活動報告

スポーツ動機づけ研究会活動報告

蓑内　豊（北星学園大学）

第５回スポーツ動機づけ研究会が平成19年５月12日（土）～13日（日）の日程で名古屋大学の総合保健体育科学センター２階会議室にて行われました。この研究会は名古屋大学の西田保先生を中心として12年ほど前に数名でスタートしたものです。しばらくの間，休止状態でしたが，2003年からは年に一度のペースで開催されており，参加者も毎回約20名と活性化しつつあります。この研究会のメンバーである速水敏彦先生（名古屋大学）は昨年出版された「他人を見下す若者たち」（講談社現代新書）がベストセラーになっています。先生はご多忙のようで，残念ながら今年は欠席でした。

今年の発表は７演題で，「運動行動における心理的欲求の充足と動機づけの関連」（松本裕史，武庫川女子大学），「身体的自己概念・自尊感情の変容とその要因について」（蓑内豊，北星学園大学），「高校運動部員におけるストレス体験の意味」（渋倉崇行，新潟女子短期大学），「スポーツ動機づけ尺度の検討」（杉山哲司，日本女子大学），「集団効力感から考える動機づけビデオ」（永尾雄一，九州大学院生），「障害者バドミントン選手におけるモチベーションビデオの適用」（山崎将幸，九州大学院生），「flow及びその周辺概念に関する心理学的研究」（杉山卓也，中京大学院生）でした。いずれの発表時間も50分間で，学会発表よりも活発で中身の濃い討論がなされました。これらの中から大学院生の発表内容を簡単に紹介します。永尾氏と山崎氏の発表はいずれも動機づけビデオに関するものでした。永尾氏はビデオを見たチーム（集団）のパフォーマンスが向上する原理として集団的効力感に注目したものでした。また，山崎氏の発表には障害者選手に対して行った事例報告もあり，その効果とともに使用方法についても考えさせられるものでした。杉山氏の発表はこれまでの量的データの分析結果に基づき，さらなる発展的研究や新しく質的データを取り入れた研究の可能性について提案するものでした。いずれも今後の進展が期待されるものでした。

研究発表だけではなく，交流会も楽しく盛んに行われました。ウェルカムパーティーは会議室での開催でしたが，参加者が持ち寄った各地の名産品が並び，特に日本酒コーナーはさながら全国各地の銘酒の品評会といった有様でした。全部の発表が終わった後の２日目午後には，フレンドリーフィジカルアクティビティーとしてフットサルが行われ，新しい人工芝グランドで気持ちの良い汗を流しました。

今後については，現場で指導をされている方や一流選手，プロ選手などの意見を伺い，現場にも活用できるような成果をあげることも考えています。

スポーツ動機づけ研究会（Sport Motivation研究会）は，略してSM研究会と呼んでいますが，別に妖しいものではありません。動機づけに関心のある方や入会希望の方は，下記までご連絡ください。

西田　保先生（052-789-3952，nishida@htc.nagoya-u.ac.jp）

スポーツ社会心理学研究会活動報告

杉山　佳生（九州大学）

平成 19 年度中は、定例研究会といった形での活動は特に行いませんでしたが、日本スポーツ心理学会の学会企画シンポジウムにおいて、社会心理学的なテーマが設定され、本研究会のメンバーが司会やシンポジスト、指定討論者として参画したので、まずは、その内容を報告いたします。

このシンポジウムは、「運動部活動の意味を問う」というテーマで3年間継続されてきたシンポジウムの最終回であり、「社会心理学的観点からの教育的意義」という副題がつけられました。その実施意図は、「全人教育に関わるスポーツ・運動部活動の役割を、社会心理学的視点から問い直したい」というものでした。阿江美恵子先生（東京女子体育大学）が司会を担当し、シンポジストとして、体育史を専門とする阿部生雄先生（筑波大学）、精神科医師の黒川淳一先生（犬山病院）、キャリアプランニングに詳しい三木ひろみ先生（筑波大学）が登壇されました。阿部先生は、イギリスのエリート教育の中に位置づけられていた運動部活動の歴史とその意義、特に、人間形成に結びつくことが期待されるスポーツマンシップの発達について考証され、黒川先生は、運動部活動に関連して生じる「不適応」への対応を取り上げ、困難を乗り越える際の心理的メカニズム（適応機制）について論じられました。また、三木先生は、大学の体育学部で実際に行われているキャリア支援教育を紹介するとともに、スポーツ選手のための社会教育のあり方を提案されました。このように、「社会心理学的検証」というにふさわしく、歴史、問題行動への対処、キャリア移行といった幅広い視点から、スポーツ・運動部活動の社会的意義を再考しようというシンポジウムでした。

ところで、少し自戒めいた話をいたしますが、本会報で紹介されている他の研究会と比較してみても、スポーツ社会心理学研究会の活動は、あまり活発ではないようです。ここ数年、定例の研究会が開催できないでいることは、扱う内容が広範であり、メンバーが行っている研究も多岐にわたっているため、統一のテーマで論議することが難しいということもありますが、事務局の問題だといわれても仕方のないところもあります。もちろん、メーリングリストでの情報交換や翻訳書の出版などを、これまでにも行ってきてはいますが、これからのこの領域の研究の活性化のためにも、ここらあたりで気を入れなおして、何か新しいことに取り組めればと考えています。そのおりには、研究会メンバーであるなしに関わらず、皆様のご協力を賜りたく存じますので、どうぞよろしくお願いいたします。

お問合せ先
スポーツ社会心理学研究会事務局（世話人）
杉山佳生（九州大学健康科学センター）
sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

臨床スポーツ心理研究会活動報告

竹之内　隆志（名古屋大学）

臨床スポーツ心理研究会は「個をみることの大切さ」を旗印に1991年に発足し，毎年体育学会の折りに開催されている．スポーツ選手の心理相談事例やスポーツセラピー・ダンスセラピーの事例，動作法の事例など，個に寄り添った事例報告を聴き，個を深く検討することでスポーツ選手の心を理解しようとする研究会である．近年の傾向としては，スポーツ選手にカウンセリングを適用した事例の報告が多くなっている．

第17回研究会は，平成19年9月6日の午後6時30分から2時間に渡って，神戸大学発達科学部大会議室で行われた．事例提供者は武田大輔先生（筑波大学・奈良産業大学），指定討論者は中込四郎先生（筑波大学・本研究会代表者），司会は土屋裕睦先生（大阪体育大学）であった．参加人数は38名で，約半数は大学院生であった．

まず研究会代表者の中込先生から，事例の匿名性への配慮や守秘義務など事例を聴く上でのマナーの確認がなされた．その後，武田先生から「ベースの不確かさが背景にある大学競技者の事例」と題した報告がなされた．クライエントは，「不眠や焦燥感，食事の統制が出来ない，他の部員との対人関係の悪化」を訴えてスポーツカウンセリングルームに来談した競技者で，約1年半，合計 40 数回行われた面接の内容が報告された．面接が進むにつれて当初の訴えが徐々に緩和し，自分のペースで競技に取り組めるようになったことが読み取れた．討議では，最初にクライエントに会った時に何を感じどのように関わっていこうと考えたのかといった見立ての問題，クライエントの語りや風景画の特徴，そしてそれらの特徴を基にしたクライエントの心の理解などが話題となった．さらに，クライエントはしばしば動作の失調を訴えたが，動作失調の様態が心の様態と符合する場面が多々あり，動作や身体の問題を手がかりとしたスポーツ選手の心の理解についても討議された．

個人的には，武田先生の「待つ」あるいは「見守る」姿勢が印象に残った．武田先生はクライエントにベースの不確かさを感じておられたが，「こうしたらよい」などの「指示」をすることなく，「待つ」あるいは「見守る」姿勢をとられていた．人としての心理的なベースは教えて育つものではなく，クライエントが自ら様々な経験をすることで育っていくと思われる．そのため「待つ」姿勢をとられたのであろう．また，ク

ライエントが安心して様々な経験をするには他者の「見守り」が必要であり，武田先生はそうした役割を果たしたのだと感じた．選手が心理的に困っていると，スポーツ心理学の知識に基づいて選手に何かを教えようと思ってしまう．しかし，「教える」よりも「待つ」ことが必要な場合もあると本事例報告から感じた．

事例を聴くということは，クライエントを主人公としたドラマを聴くことなので，聴いているとクライエントの言動に一喜一憂したり共感したり疑問を感じたり，あるいはクライエントのその後を案じたり期待したりするなどのことが起こってくる．このように事例検討では様々な感情や思いが生じてくるが，このことがスポーツ選手の心についての深い理解を導くように思われる．また，カウンセラーがクライエントに長く関わり，ラポールが形成された上で語られるクライエントの語りには，スポーツ選手としての生き方や価値についての本質的な問いが含まれることが多い．そのようなクライエントの語りを聴いていると，自分自身の生き方や価値の見直しを迫られることがあり，本研究会への参加は私にとって自分自身を振り返るよい機会ともなっている．

なお，本研究会の事務局は岸順治先生（岐阜経済大学）が現在担当されている．興味のある方は連絡されたい．

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会活動報告

高妻　容一（東海大学）

本年度は、全国各地の各支部会で開催している毎月 1 回の研究会の内容を報告する。

（1）北海道支部会では、旭川工業高校において月 1 回の研究会を開催し、参加者のほとんどが高校の運動部指導者であった。ここでは、各チームにおけるメンタル面強化の事例が報告された。また 5 月の連休には、新十津川において、3 日間の講習と合宿をセットにした研究会が開催された。

（2）栃木支部会では、作新学院大学において月 1 回の研究会が開催され、多くの情報交換が行われた。また年に数回は、講習会も開催している。

（3）関東地区研究会は、毎月 1 回渋谷の青山学院大学にて開催し、3 月には 2 日間のサッカー用の講習が実施された。参加者の多くは、大学生や高校生の運動部員であり、最近は一般のサラリーマンや企業関係者も増えてきた。また講習会を受講した高校生空手選手が世界大会で準優勝したとの報告もあった。1 月には、プロ野球選手が自主トレの期間に参加し、メンタル面強化の情報交換に熱心に耳を傾けていた。

（4）東海大学研究会は、大学の休暇を除く、毎週月曜日に開催をしている。最近は、中学のバスケットボール指導者の参加が増え、4 月に開催した 1 日講習会には約 600 名が参加した。また 1 月に開催した野球用講習会には、約 500 名が参加学）し、野球におけるメンタル面強化の現場のニーズが高まってきている。12 月には、メジャーリーグナショナルズのストレングス＆コンディショニングコーチを招き、特別講演を実施した。

（5）静岡支部会は、東海大学付属翔洋高校で毎月 1 回開催され、中学生野球部やサッカー部を中心に、毎月 200～300 名の参加がある。最近は、選手の保護者が興味を持ち、コーチ・選手・保護者のチームワークについての話題が多く取り上げられている。

（6）愛知支部会は、毎月 1 回愛知学院大学で開催され、多くの情報交換がされている。

（7）関西地区研究会とコーチ用の専門分科会は、毎月 1 回ずつ開催されている。8 月には、初級・中級編の講習会が開催され、300 名の参加者があった。

（8）北陸支部会は、福井運動公園を中心に毎月 1 回の研究会を開催している。特に、ＨＰを利用しての情報交換に力を入れている。

（9）長崎支部会は、県の総合体育館において毎月 1 回の研究会を実施し、そこに参加する多くのチームが全国大会に出場を果たしている。また年 1 回は、指導者を対象とした 2 日間講習会が開催され、この講習会は 10 年以上も継続して毎年開催されている。

運動学習研究会活動報告

加藤　貴昭（慶應義塾大学）

第 17 回運動学習研究会は 2007 年 6 月 16 日（土）および 17 日（日）の 2 日間にわたり、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（政策・メディア研究科）にて開催されました。慶應義塾大学の日吉キャンパスには体育研究所がありますが、湘南藤沢キャンパスには 1990 年に誕生した総合政策学部と環境情報学部、そして大学院として政策・メディア研究科があります。また、最近では看護医療学部が併設され、健康マネジメント研究科も設立されました。私達が所属する環境情報学部の名称は、ギブソンの生態心理学における「アフォーダンス」の概念に由来しているそうですが、所属する研究者は多肢にわたり、様々なテーマに取り組んでいます。今回、私達のキャンパスで運動学習研究会を開催できたことは学部や研究科、さらには学生らにとっても価値のあることだと思っております。

今回の研究会には総勢 40 名の方々にご参加いただき、口頭発表（50 分）が 8 題目、口頭発表（25 分）が 7 題目、ポスター発表が 7 題目でした。主な参加者としては大学教員および大学院生ですが、リハビリテーション領域の研究者の方々も数多く参加していただきました。発表された研究テーマの内容は、運動学習のみならず、知覚、認知、および運動制御に関連するものが多々見られ、非常に興味深い発表と議論が展開されました。特にプレッシャーが与える「あがり」に関する研究テーマは、運動学習・運動制御のみならず、健康・スポーツ心理学の領域にも関連があるため、今後の動向に注目したいと思います。

今回は数多くの参加者と発表があったのにも関わらず、こちらの準備の関係などから 2 日間という短い期間で文字通り詰め込まれた研究集会となってしまいました。また恒例のお楽しみ時間（各種スポーツで汗を流す、大浴場を満喫する）を確保することができなかったことも残念でしたが、湘南藤沢という田舎をそれなりに楽しんでいただけたかと思っております。

なお、本研究会の内容は、発表抄録、参加者のコメント、さらにはそのコメントに対する発表者のリプライが成果報告書として発行されております。詳細につきましては運動学習研究会ホームページをご覧ください。

次年度は首都大学東京が幹事校となり、八王子セミナーハウスにて開催されることとなっておりますので、多くの方々のご参加をお待ちしております。



老年学研究部会活動報告

谷口　幸一（東海大学）

日本体育学会体育心理学分科会の会報(2006)にて、本活動を開始したい旨の提案記事を掲載させて頂いてから、はや２年が経過した。その間に、本部会の定期的勉強会は開催していないが、体育心理学分科会の会員２名が、一つの出版企画に参加した。その成果が「ジェロントロジースポーツ」（ジェロントロジースポーツ研究所刊、2007）である。その著書の概要を紹介して、この領域の研究や実践活動に興味を抱く研者者が増えることを期待したい。本書の「序章」を執筆されている井上成美氏は『ジェロントロジーでは、身体的低下に捉われる事なく、エイジングをより深く多角的な視点で捉え、理解する事で個人の生き甲斐を再創出すると共に、個人の人格が尊重され、生き甲斐とその存在感における「社会づくり」を提言する分野であると理解できる』と述べている。スポーツを通じて、高齢者の熟達した知的フィールドをむしろ活用する社会の創出が望まれる。本書はこのような理念に立ち、加齢とスポーツの課題を生理学、医学、身体運動学、バイオメカニクス、心理学、政策学、経営学、教育学などの学際的観点から捉え、新たな生涯スポーツ学の構築を目指している。

Gerontology sportsより引用

- Gerontology sports contents

ジェロントロジースポーツ総論
ジェロントロジースポーツの生理学
ジェロントロジースポーツの身体運動学
ジェロントロジースポーツのバイオメカニクス
ジェロントロジースポーツの心理学
ジェロントロジースポーツの政策学
ジェロントロジースポーツの経営学
ジェロントロジースポーツの経済学
ジェロントロジースポーツの教育学
ジェロントロジースポーツの教育学未病学



老年学(Gerontology)という研究領域が生まれて既に半世紀が経過しているが、現状ではその理念が社会における実践に十分に生かされているとは言えない。時間の関数として人の老いを捉えることが一般的であるが、加齢とともに個人差は拡大する。同じ暦年齢 70 歳でも体力年齢(機能年齢)は 10 歳以上の開きがあるという事実からも明らかである。感覚・知覚、記憶・学習能力、知能、性格、社会性など認知機能の個人差も大きく、認知症や寝たきり。閉じこもりなどの負のイメージにつながる老いの姿は、多くに見積もっても高齢者人口の1〜2割程度である。大方の同世代の人々は自立した生活、趣味や社会活動に積極的な健康レベルにある人である。プロダクティブな生き方、アクティブな高齢者の姿が見えにくいのは、マスコミの話題の取り上げ方、取材の内容にもその責任の一端があるという指摘は事実と思われる。インパクトのあるニュース価の高い事象として、高齢者虐待、老老介護や認認介護にまつわる悲劇、孤独死などに関わる出来事が多い。地域貢献、生きがい、ボランティア、世代間交流、生涯現役、継続学習などのプラスのイメージにつながるニュースは意外に少ない。

神戸大学発達科学部の長ヶ原誠氏(体育心理学分科会会員)が、「マスターズ甲子園」のイベントを企画してはや 5 年が経つ(http://www.masterskoshien.com)。 2007 年の第 4 回大会では、星野仙一氏を大会名誉会長にして、重松清氏に本大会の応援団長として文の力での支援を請いながら、青春時代に甲子園を目指したが、夢かなわず無念の涙を流した多くの甲子園球児(全国200 万人)たちが、中高年になってから全国の地区別予選から戦い、ついにまさかの甲子園のマウンドに立つという「夢」を実現する企画で、毎年夏から秋の好日に開催されている。2008 年の第 5 回大会は、8 百余人の選手、8 百人のスタッフ・ボランティアに支えられて、6 月 15 日に甲子園球場を貸切でおこなわれた。そのイベント企画の壮大さもさることながら、そこには、子と共に参加する選手、孫や子や妻にその勇姿を披露する選手、3 世代がともに野球というスポーツを核にして、世代を超えた連帯意識と感激に包まれる時間である。お父さん、お爺ちゃんの晴れ舞台の活躍に目を見張る孫、父や夫の溌剌とした青春を垣間見た瞬間に新たな家族の絆と尊敬の念が芽生えるというひと時と想像できる。マスターズ甲子園の活動理念に示されているいるように、生き甲斐・活力ある人生を目指す『個人』、同窓会交流・世代間交流の場としての『地域』、OB/OG 文化・熟年文化の創出される『社会』、野球文化の継承・ユースへの応援を指向する『未来』、これこそが、スポーツを通しての老年学の実践と思う。老年学は、人が老いるという全人的課題に既成の諸学問が協働で取り組むという新たな視点に立った学際学である。ジェロントロジースポーツとは、スポーツという文化が老いの生活課題にどのような貢献ができるかを模索する新たな理念と実践を伴う学問である。マスターズ甲子園の例のように、スポーツジェロントロジーが社会的に認知され、新たな中高年文化の創造に繋がることを期待したい。

Ⅳ. 研究室紹介

天理大学

体育学部体育学科 スポーツ心理学研究室

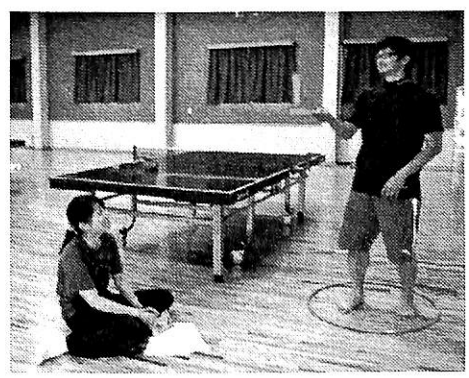
西田　円（天理大学）

天理大学は、1925 年に創設された天理外国語学校を前身とし、1949 年に現在の天理大学となりました。また、2004 年 4 月には、大学院臨床人間学研究科（修士課程）が開設されました。天理大学は、水泳、柔道、ホッケーなど、これまで数多くのオリンピック選手を輩出してきました。今年開催される北京オリンピックにも、在学生、卒業生、教職員の出場・参加が決まっています。体育学部の教員には、柔道のオリンピックメダリストが顔を並べています。最近では、柔道の授業に女子学生の姿が目立つようになりました。

1955 年に開設された体育学部は、体育学科の 1 学科からなり、スポーツ学コース、健康学コース、武道学コースが設置されています。コースの選択は 3 年次に行い、スポーツ学コースを選択した学生は「スポーツ科学演習」、健康学コースを選択した学生は「健康科学演習」、武道学コースを選択した学生は「武道学演習」の中から、目的、関心に合った演習を選択します。スポーツ学コースの場合、運動生理学、スポーツ社会学、コーチングなど、13 の演習科目があり、スポーツ心理学演習はその中に含まれます。そして、4 年次では、それぞれの担当教員の「卒業研究」を履修し、卒業研究論文の作成を目指します。

西田が担当する「スポーツ科学演習」と「卒業研究」は、安田昭子先生が退職された後を引き継ぐ形で、2007 年度より開講されました。

スポーツ心理学研究室では、3 年次の演習 I（春学期）で、主にスポーツ心理学に関連する基礎実験を行います。最終的には、学生が実験デザインを作成し、実験を実施します。ここでは、実験方法や手順、レポートの書き方、統計処理の仕方などを学びます。また、演習 II（秋学期）では、スポーツの場面で生じる心理的な問題や課題を取り上げ、その理論的背景と対応策についてディスカッションを交えて理解を深



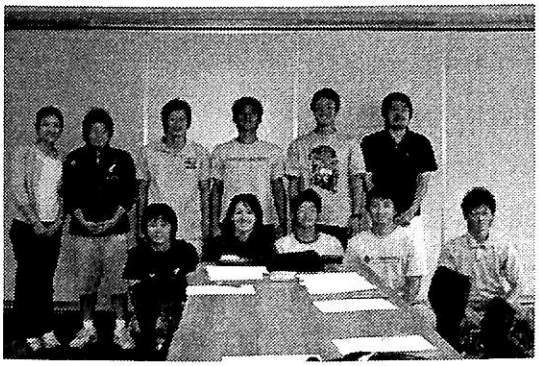
学生の実験デザインによる
卓球の玉突き課題を用いた実験

めていきます。また、質問紙を用いた研究方法を学び、学生が関心のあるテーマについて調査を実施するなど、4年次の卒業研究論文の作成に繋がるような指導を行います。

現在、スポーツ心理学研究室は、3年生15名、4年生17名が所属する大所帯です。学生の専門競技も様々で、ホッケー、競泳、飛込み、バスケットボール、ハンドボール、野球、ソフトボール、サッカー、陸上、テニス、空手、弓道と、個性溢れるアスリートたちが集まっています。大所帯でありながらもアットホームな雰囲気の研究室です。

西田が担当する研究室としては、今年度の学生が2期生となるできたてほやほやの研究室です。そのため、学生とともに試行錯誤しながら実験や研究を進める毎日です。

卒業後は教員を目指す学生が多く、また、現役を続行する学生や大学院進学を目指す学生もいます。この研究室で学んだことや、ともに学んだ仲間が、卒業後の彼らの支えになるような研究室を目指していきたいと思います。




西田研究室のメンバー：心優しい4年生(左)と笑いの絶えない3年生(右)

Ⅴ．学位論文紹介

体育の授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響

島本　好平（東京工業大学）

学位：博士（学術）　　授与機関：東京工業大学
取得日：2007年9月25日　　指導教員：石井源信教授

はじめに

本論文は，自立した社会人への最終の準備期間にある大学生（以下，学生）と，「日常生活の中で生じるさまざまな問題や要求に対して，建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」（WHO, 1997）等と定義される「ライフスキル」に焦点を当て，体育実技の授業（以下，体育授業）におけるスポーツ経験がライフスキルにどのような影響を与えているか，横断的データをもとに検討を行ったものである．また，健康スポーツとも関連する，満足感等のメンタルヘルスのポジティブな側面を媒介要因として位置づけ，体育授業におけるスポーツ経験のライフスキルへの直接的な影響のみならず，媒介要因を介した間接的な影響についても検討を行っている．

本論文は全6章から構成され，第2章と第3章は尺度開発過程，第4章と第5章は影響検討過程としてそれぞれ位置づけられる．それでは第1章より順に各章における内容について述べる．

第1章「序論」

序論では，まず，日常生活における主な活動の1つであるスポーツが，私たちの心身にどのような影響を与えているかについて，国内外の研究を概観した後，近年，スポーツとの関係が注目されている「ライフスキル」に焦点を当て，その定義や具体的内容，性質について述べている．

次に，国内外におけるスポーツとライフスキルに関する研究を概観し，海外では，スポーツを通したライフスキル教育プログラムが数多く開発され（例えば，Danish, 1996; Danish and Nellen, 1997），既に実践されていること，国内では，プログラム開発よりも調査研究が主流であり（例えば，Murakami et al., 2004; 上野・中込，1998），スポーツ経験のライフスキルへの影響について検討が行われていることを述べている．

そして，それら国内外におけるスポーツとライフスキルに関する研究を概観して，「どのような内容のスポーツ経験がライフスキルの獲得につながるのか十分に明らかにされていない」という問題点とともに，「ライフスキルに正の影響を与えるスポーツ経験の内容を明らかにする」「スポーツ経験によるライフスキル獲得モデルを構成し，その妥当性を検証する」という本研究の目的を述べている．なお，学生を調査対象としたのは，大学卒業後に自立した社会人となることが求められる彼・彼女らにとって，日々の生活を効果的に過ごすために必要な心理社会的能力であるライフスキルの獲得は特に重要な検討課題として考えられるからである．また，スポーツの中でも体育授業におけるスポーツに着目した理由は，当該授業が，運動部活動に参加する学生（以下，運動部学生）を含め，ほぼすべての学生が一同にスポーツとかかわる時間として位置づけられるからである．

尺度開発過程

第2章「ライフスキルを評価する尺度の開発」

WHO（1997）をはじめとした，ライフスキルに関する複数の先行研究をもとに，学生のライフスキルを多面的に評価することができる尺度の開発を行った．関東・近畿・東北地区における10大学729名（男性318名・女性411名：平均年齢19.6±1.3歳）の学生のデータをもとに開発された尺度は，「計画性（例：先を見通して計画を立てることができる）」「情報要約力（例：多くの情報をもとに自分の考えをまとめることができる）」「自尊心（例：自分の言動に対して自信を持っている）」「前向きな思考（例：嫌なことがあってもいつまでもくよくよと考えない）」「親和性（例：困ったときに，友人らに気軽に相談することができる）」「リーダーシップ（例：自分が行動を起こすことによって，周りの人を動かすことができる）」「感受性（例：困っている人を見ると援助をしてあげたくなる）」「対人マナー（例：目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができる）」という8下位尺度・計24項目からなり，「日常生活スキル尺度（大学生版）」と命名された．また，尺度における因子分析モデルはデータに十分に適合し，各々の下位尺度にはおおむね満足できる信頼性および妥当性が認められた．さらに，8つの下位尺度は，

ライフスキルを個人的なスキルと対人的なスキルからとらえている先行研究（Cross, 1996; Danish et al., 1993, 1995; 上野・中込, 1998）と同様に，主に個人場面で展開されるスキルである「個人的スキル（計画性，情報要約力，自尊心，前向きな思考）」と，主に対人場面で展開されるスキルである「対人スキル（親和性，リーダーシップ，感受性，対人マナー）」に大別されることが示された．

本尺度の開発により，中央教育審議会（1996）によりその育成が提唱された「生きる力」にきわめて近い概念（川畑, 1997; 上野, 2001）と言われるライフスキルの実態を少しでも明らかにできるとともに，ライフスキルに関する実証的研究を行うことが可能になったと言える．

第3章「スポーツ経験を評価する尺度の開発」

体育授業の楽しさを規定する要因を評価する尺度と，組織キャンプ場面での経験内容を評価する西田ほか（2002）の尺度等をもとに，体育授業における一般的なスポーツ経験を多面的に評価することができる尺度の開発を行った．国内5つの地域(関東，中部，北陸，近畿，四国)，12大学846名（男性386名・女性460名：平均年齢19.7±1.1歳）の学生のデータをもとに開発された尺度は，「自己開示（例：自分が思っていることを友人らに伝えた）」「他者協力（例：同じチームの仲間と協力してプレーした）」「挑戦達成（例：自分にはできないだろうと思っていたことができた）」「楽しさ実感（例：和気あいあいとした雰囲気の中でプレーした）」という4下位尺度・計14項目からなり，「大学体育実技経験評価尺度」と命名された．また，各々の下位尺度にはおおむね満足できる信頼性および妥当性が認められ，尺度における因子分析モデルのデータへの適合度も，十分に高いものであることが示された．

これまで個人のスポーツ経験は，危機経験（中込, 1993）や転機（杉浦, 2004），Flow（Jackson and Marsh, 1996; 杉山・猪俣, 2004）等というように，ある特定の側面に焦点が当てられてきており，また，高見ほか（1990）の指摘にもあるように，運動部活動への参加の有無や競技レベル，競技種目，競技継続期間といった，スポーツに関する個人属性によってとらえられてきた．しかし，本尺度の開発により，体育授業に参加する個人がそこでどのような内容のスポーツ経験をしているか，複数の側面から評価することができるようになったと言える．

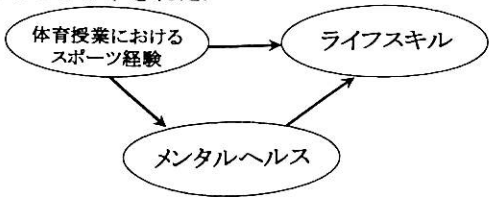
影響検討過程

第4章「スポーツ経験のライフスキルへの影響の検討」

第3章における大学体育実技経験評価尺度の4つの下位尺度のすべてを独立変数，第2章における日常生活スキル尺度の各々の下位尺度を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を，第3章におけるデータを用いて実施し，体育授業におけるスポーツ経験のライフスキルへの影響について検討を行った．その際，ライフスキルへの影響を詳細に検討できるよう，分析対象である体育授業に参加する学生を，運動部学生で体育授業に積極的な受講者（n=413）と消極的な受講者（n=23），運動部活動に参加していない学生（以下，一般学生）で授業に積極的な受講者（n=357）と消極的な受講者（n=53），の計4群に分類した．

ちなみに，体育授業に積極的な受講者とは，「健康や体力を維持・増進するため」「友人らとの仲を深めるため」「精神力（忍耐力や粘り抜く力）や競技レベルを高めるため」「スポーツそのものを楽しむため」のいずれかの目的意識のもとに授業に参加する個人であり，消極的な受講者とは，「ただ単位を取得するため」という目的意識のもとに授業に参加する個人である．

各々の群に対して分析を行った結果，体育授業におけるスポーツ経験は，特に，授業に積極的な運動部学生と一般学生のライフスキルに有意な影響を与えていることが明らかにされた．授業に積極的な運動部学生では，体育授業におけるスポーツの活動を通して，スポーツそのものの楽しさを実感する経験である「楽しさ実感」が，授業に積極的な一般学生では，競技スキルの向上に向けて積極的に取り組む経験である「挑戦達成」が，それぞれ，多様なライフスキルに正の影響を与える特徴的なスポーツ経験であることが示された．



注）「メンタルヘルス」はポジティブな側面を指す

図1　体育授業におけるスポーツ経験を通したライフスキル獲得モデル

第5章「スポーツ経験によるライフスキル獲得モデルの検討」

第4章の結果をもとに，第5章では，第3章におけるデータの中でも，体育授業に積極的に

参加する 770 名の学生を対象として，体育授業におけるスポーツ経験を通したライフスキル獲得モデルを構成し，その妥当性について検証を行った．

その際，「体育授業におけるスポーツ経験がライフスキルに影響を与える」という分析モデルには，授業におけるスポーツ経験のライフスキルへの直接的な影響に加えて，第 3 の変数を介した間接的な影響についても検討できるよう，媒介要因を導入した．実際には，スポーツ（運動）によるメンタルヘルスの改善(Biddle, 2001; ISSP, 1992) およびポジティブな心理的要因のライフスキルへの影響に関する先行研究（久木山，2005; 山崎，2006）をもとに，メンタルヘルスのポジティブな側面を媒介要因に設定した（図 1 参照）．

共分散構造分析（最尤法）により検証を行った結果，「ライフスキル」の箇所に個人的スキル（計画性，情報要約力，自尊心，前向きな思考の 4 つを観測変数とする潜在変数）を位置づけたモデルでは，直接的な正の影響に比べて媒介要因を介した間接的な正の影響の方が大きく，対人スキル（親和性，リーダーシップ，感受性，対人マナーの 4 つを観測変数とする潜在変数）を「ライフスキル」の箇所に位置づけたモデルでは，間接的な正の影響よりも直接的な正の影響の方が大きいことが明らかにされた．これまで，体育授業におけるスポーツ経験は，社会的スキルやコミュニケーションスキルといった，「対人的なスキルの獲得」という文脈から焦点が当てられてきたが（市村・中川，2002; 渋倉，2004; 杉山，2004，2005），本研究の結果からは，媒介要因を介した間接的な影響ではあるが，体育授業におけるスポーツ経験が，計画性や前向きな思考等といった個人的なスキルにも正の影響を与えていることが明らかにされた．加えて，2 つのモデルとも，分析に使用したデータに十分に適合する，信頼性と妥当性が確保されたものであることも示された．

第 6 章「総括」

第 6 章では，尺度開発過程と影響検討過程における内容をそれぞれ総括し，今後の主な課題について述べている．

まず，尺度開発過程では，研究を進めていくために必要なデータを収集する尺度の開発を行った．具体的には，学生のライフスキルと大学の体育授業におけるスポーツ経験を，それぞれ複数の側面から評価することができる 2 つの尺度を開発した．

次の影響検討過程では，それら開発された尺度を用いて，体育授業におけるスポーツ経験のライフスキルへの影響について検討を行った．そこでは，授業に積極的に参加する運動部学生と一般学生ごとに，多様なライフスキルに正の影響を与える特徴的なスポーツ経験の内容を明らかにした．これまでにおけるスポーツ経験とライフスキルに関する研究では，どのような内容のスポーツ経験がライフスキルの獲得に結びつくのか十分に明らかにされていない（西田，2004）と言われていたので，第 4 章における結果は，スポーツ経験とライフスキルに関する研究を一歩前進させるものとなった．また，体育授業場面において展開される，ライフスキル獲得を意図した授業実践の実現にも寄与することができると考えられた．

また，第 5 章では，メンタルヘルスのポジティブな側面という媒介要因を考慮した，体育授業のスポーツ経験によるライフスキル獲得モデルを構成し，その妥当性を検証した．その結果，授業におけるスポーツ経験は，対人的なスキルに加えて，個人的なスキルに対しても正の影響を与えていることが明らかにされ，体育授業におけるスポーツ経験のライフスキルへの影響を検討する際には，満足感等のメンタルヘルスのポジティブな側面を考慮することの重要性が示された．

そして最後に，今後の主な課題としては，まず，縦断的データを用いての検討の必要性が述べられた．すなわち，体育授業におけるスポーツ経験がライフスキルの獲得に結びつくのかという因果関係までも厳密に調べるためには，独立変数と従属変数の間に明確な時間的先行性が認められる縦断的データからの検討が必要ということである．また，本研究ではライフスキルへの有意な影響が認められなかった消極的な受講者においても，今後，当該学生についてのデータを多く収集し，授業におけるスポーツ経験のライフスキルへの影響を引き続き検討していくことの必要性が述べられた．

謝辞

本論文を執筆するにあたり，指導教員である石井源信教授には，修士・博士課程と多大なお力添えをいただきました．ありがとうございました．また，調査の依頼を快く引き受けていただきました先生方に対しても，心からのお礼を申し上げます．そして，拙いアンケート調査にご協力いただきました多くの学生の皆さんにも感謝いたします．

プレッシャーが運動スキルに及ぼす影響

田中　美吏（広島大学大学院総合科学研究科）
学位：博士（学術）　　授与機関：広島大学
取得日：2008年3月23日　　指導教員：関谷寛史准教授

第1章　先行研究の動向と課題ならびに本研究の目的

競技スポーツにおける重要な試合など，我々は社会生活における様々な運動行動場面で「あがり」を経験するが，Baumeister（1984）は，高いパフォーマンスを発揮することの重要性を高める因子をプレッシャーと呼び，プレッシャーによりパフォーマンスが低下する現象を「あがり」と定義した．本研究では，この定義に基づいてプレッシャーと「あがり」という用語を用いた．また，プレッシャーによって心理，生理，および行動の各側面に表れる反応をストレスと捉えた．

運動行動場面でのプレッシャーや「あがり」に関しては，これまで国内外において数多くの研究が行われ，プレッシャーの影響で心理，生理，および行動の各側面に様々な特徴が表れることが報告されてきた．特に，心理面と生理面に関しては多くの研究が行われてきたが，運動パフォーマンスを規定する大きな要素である行動面に関しては，研究の数が少なく，その特徴は不明であった．そこでプレッシャー下における行動的特徴を明らかにする研究が必要であった．

また先行研究では，プレッシャーによる運動パフォーマンスの低下について，身体運動に対する注意の増加が原因であるという意識的処理仮説や，注意散漫性の増加に伴って運動課題の遂行に必要な注意が不足することが原因であるという処理資源不足仮説など，注意の変化という心理面における認知機能に焦点を当てた複数の仮説が提唱されてきた．しかしこれらの研究では，注意の変化とパフォーマンスの変化の関係性を調べることに留まり，これらの間に介在する行動的特徴に関しては調べられていない．さらにこれらの研究では，生理面の影響についても言及されていないが，人間のパフォーマンスは心理，生理，および行動の3側面の相互作用を通して規定されるため，プレッシャーと「あがり」に関する研究においてもこれらの3側面の相互作用を考慮した研究が必要であった．

以上より本研究では，プレッシャー下で運動スキルを遂行するときの身体運動の変位，速度，加速度，ならびに発揮した力という行動的特徴を調べることを第1の目的とした．さらに，プレッシャー下で運動スキルを遂行するときの注意や感情という心理面の変化，覚醒水準という生理面の変化，運動学的変数および運動力学的変数という行動面の変化，ならびにパフォーマンスの変化を詳細に調べたうえで，これらの変化の関係性を調べることを第2の目的とした．なお，種々の運動スキルは，運動の連続性という観点から分離スキルと連続スキルに分類され，スキルを遂行するときの環境の安定性という観点から閉鎖スキルと開放スキルに分類されるが，本研究では，分離-閉鎖スキルに分類されるゴルフパッティングを実験課題として用いた．分離-閉鎖スキルは，多くの先行研究において注意の変化に伴いパフォーマンスが変化することが確認されており，本研究で得られる結果とこれらの先行研究の結果との比較検討を行えるという点で，本研究の目的に適した課題

であった．そして第1の目的については第2章から第4章にかけて検討を行い，第2の目的については第4章において検討を行った．

第2章　プレッシャー下における心理的，生理的，および行動的特徴

本章では，プレッシャー下でゴルフパッティングを行うときの行動的特徴と注意の変化を調べることを目的とした実験1を行った．そして観衆に見られ，さらにはパフォーマンス次第で賞金を獲得できるというプレッシャー下では，ゴルフに対する熟練者と初心者の双方において，心拍数が約10bpm増加するという低強度のストレスが喚起されて，さらには運動変位および運動速度が減少した．また，プレッシャーによる注意の変化は熟練者と初心者の双方において見られず，熟練度間の注意の相違も見られなかった．この結果は，プレッシャーによる運動変位および運動速度の減少が，注意の変化以外の要因から生じたことを示唆し，速度と正確性のトレード・オフが生じる日常的な運動において正確性を重視した場合の運動の変化がゴルフパッティングにおいても生じたことや，生理的な情動反応が運動制御に直接的に及ぼす影響からこれらの運動の変化が生じたことが他の要因として推察された．

第3章　プレッシャー下における運動パフォーマンスの低下を導く行動的特徴

本章では，プレッシャー下でゴルフパッティングを行うときの行動的特徴を再検討したうえで，パフォーマンスが実際に低下した被験者における行動的特徴を調べることを目的とした実験2を行った．実験にはゴルフに対する初心者が参加し，観衆に見られ，さらにパフォーマンス次第で賞金を獲得できるというプレッシャー下で課題を行わせた．その結果，質問紙STAI Y-1における状態不安得点が約8点，もしくは心拍数が約11bpm増加するという実験1と同程度のストレスが喚起された被験者において，運動変位および運動速度が減少した．しかし，右前腕屈筋および右前腕伸筋の筋放電量ならびに同時収縮率に変化は見られなかった．さらにストレスが喚起された被験者の中で，パッティング得点が低下した被験者においては運動変位の変動性が増加した．つまり本実験では，実験1と同様に，低強度のストレス喚起に伴い運動変位および運動速度が減少し，さらには，これらの運動の変化に加えて，運動の変動性の増加によってプレッシャー下におけるゴルフパッティングのパフォーマンスの低下が生じることが示された．

第4章　プレッシャー下における心理面，生理面，および行動面の変化の関係性

本章は，プレッシャー下でゴルフパッティングを遂行するときの心理面，生理面，行動面，およびパフォーマンスの変化を調べて，さらにはこれらの変化の関係性を調べることを目的とした．本章は2つの実験から構成され，まず，ゴルフに対する初心者が，パフォーマンス次第で電気刺激が与えられる可能性があるという偽教示を与えられ，さらには賞金を獲得できるというプレッシャー下でゴルフパッティングを行わせる実験3−1を行った．その結果，喚起されたストレスは質問紙STAI Y-1における状態不安得点が約7点増加し，さらには心拍数が約6bpm増加するという，実験1および実験2に比べてやや低い強度であった．しかしそのような中，プレッシャー下における身体運動に対する注意の増加とパッティングされたボールの停止位置の前後方向の変動性の増加との間に高い正の相関が認められた．さらに，プレッシャー下における注意散漫性の増加と運動変位の減少との間

に高い正の相関が認められ，注意散漫性の増加と運動速度の減少との間に中程度の正の相関が認められた．また，プレッシャー下における心拍数の増加と運動速度の増加との間に中程度の正の相関が認められた．

そして実験1から実験3－1に通じて見られた，スポーツの試合場面に比べたストレス強度の低さという問題や，行動面の指標の測定項目の制限および測定精度の低さという問題の改善を試みたうえで，実験3－1と同様の目的を再検討する実験 3－2 を行った．その結果，喚起されたストレスは心拍数が約8bpm増加するという実験1および実験 2 と同程度の強度であった．しかしそのような中，プレッシャー下における身体運動に対する注意の増加とパッティング得点との間に中程度の負の相関が認められ，さらには，身体運動に対する注意の増加と，運動時間の変動性の増加ならびに運動速度の変動性の増加との間に中程度の正の相関が認められた．また，プレッシャー下における心拍数の増加と運動加速度の増加との間に中程度の正の相関が認められた．

意識的処理仮説や処理資源不足仮説など，プレッシャーによる運動パフォーマンスの低下は注意の変化が原因となって生じることが多くの先行研究で示されているが，本章における 2 つの実験結果から，意識的処理には運動の変動性の増加が関連していることが示された．さらに，プレッシャー下における運動変位および運動速度の減少には，注意散漫性の増加が関連していることが示された．また，プレッシャー下における運動速度および運動加速度の増加は，覚醒水準の増加という生理面の影響が関連していることが示された．これらより，プレッシャー下における運動の変化やパフォーマンスの低下は，先行研究で示されているように注意の変化が原因となって生じるとともに，生理的な情動反応が運動制御に直接的に及ぼす影響も原因となり得ることが示された．

第5章　総合考察

4 つの実験結果から，プレッシャー下における分離-閉鎖運動スキルは，心理面，生理面，行動面，およびパフォーマンスの関係性に基づいて 3 つの特徴を有することが示された．第 1 の特徴は，プレッシャー下において身体運動に対する注意が増加することで運動の変動性が増加して，パフォーマンスにおいても変動性が増加することであった．第 2 の特徴は，プレッシャー下における注意散漫性の増加，もしくは方略の変化に伴って運動変位および運動速度が減少することであった．第 3 の特徴は，プレッシャー下における覚醒水準の増加に伴う生理的な情動反応の影響で，運動速度および運動加速度が増加することであった．

以上より本研究では，プレッシャー下における分離-閉鎖運動スキル遂行時の行動的特徴が明らかとなるとともに，注意の変化と行動的特徴の関係性も明らかとなった．さらに注意の変化という心理面における認知機能とともに，覚醒水準という生理面の影響がプレッシャー下における運動の変化の原因となり得ることも明らかとなった．今後は，課題の種類という課題特性，ならびにストレッサーの種類やストレス強度などの手続き特性を考慮したうえで，プレッシャーが運動スキルに及ぼす影響をさらに検討していくことが必要である．

付　記

本論文の作成にあたり，指導教官として長年に渡りご指導を賜りました広島大学大学院総合科学研究科の関矢寛史准教授，ならびに数々の貴重なご助言を賜りました多くの先生方に，この場をおかりして心より御礼申し上げます．

体育授業における友人関係ストレスと体育授業への適応

佐々木　万丈（仙台電波工業高等専門学校）

学位：博士（心理学）　　授与機関：名古屋大学
取得日：2008年3月25日　　指導教員：西田　保教授

本研究では，体育授業に対する肯定的態度を育てることの中には，体育授業中に生じる対人的問題に対して適切に対処する力(社会的能力)を身につけさせることが含まれると考えた．そこで，体育授業中の友人関係に関わる問題（友人ストレッサー）と，その問題に対する対処の実態，さらに友人ストレッサーに対する対処と体育授業に対する適応との関連を検討し，社会的能力の育成に寄与するための体育授業における生徒理解の方法と指導法について示唆を得ることを本研究の主眼とし，以下のような章を構成し検討を進めた．

第１章では，現代の子どもの生活実態を概観し，子どもを取り巻く生活環境において子どもの社会的能力が十分に育まれない条件が広がりつつあることが考察された．そして，子どもの社会的能力の向上を図ることに関わる体育授業の役割と意義について述べた（第１節）．その上で，これまでに提出された体育授業に取り組む子どもの心理学的検討課題を取り上げた国内外の研究を概観し，体育授業に取り組む児童生徒の社会的態度やスキル，さらに道徳性などを検討課題とする研究が近年多くみられるようになったことが確認された（第２節）．次に，以上に基づいて，今後取り上げられるべき検討課題として，生徒の認知的側面に着目することが指摘され，友人関係の問題処理に関わる「認知的過程」，心理的ストレス過程を説明する「認知的評価」と「コーピング」，および「原因帰属」の友人関係の問題処理に関わる適用の可能性，さらに「社会的スキル」と「適応」を視点に考察し，これらの要因の統合的考察が，生徒の社会的能力の向上と体育授業に対する適応を促すことにつながることが述べられた（第３節）．そして，その統合的考察を行う上での具体的検討課題として，①体育授業場面の心理社会的ストレッサーの把握，②友人ストレッサーに対する認知的評価の実態，③友人ストレッサーに対するコーピングの実態，④体育授業場面における心理的ストレス反応の実態，⑤友人ストレッサーとの遭遇における心理的ストレス過程の実態，⑥体育授業における社会的スキルの把握，⑦体育授業に対する適応状態の検討，⑧体育授業場面の友人ストレッサーへの対処と体育授業に対する適応の因果的関連の検討とその過程における原因帰属の役割についての考察が提示された（第４節）．

第２章では，第１章の国内外の研究の概観に基づき，体育授業における生徒の心理的側面に関する検討課題の問題点として以下の３点が指摘された．①体育授業場面の友人ストレッサーの解決や適切な友人関係の形成と維持に関わる認知的過程に着目した研究がみられない．②体育授業に取り組む生徒の，体育授業場面における友人関係の形成と維持に関わる認知的要因を測定する尺度が整備されていない．③体育授業

場面の友人ストレッサーを処理し，体育授業に対する肯定的態度が形成されるまでの認知的側面に関する要因の相互関連性についての検討が行われていない．そして，以上の検討課題を受け，中学生を対象に，心理学的ストレス研究の主要な理論である Lazarus and Folkman（1984）の認知的評価理論に依拠し，体育授業における友人関係の問題に対する対処と体育授業に対する適応との関連について検討することを，本研究の目的として設定した（第１節）．また，本研究の目的を達成するための研究計画が示された（第２節）．

第３章では，友人ストレッサーに対する心理的ストレス過程を検討するため，第１章第４節で提示された①から⑤の課題が各節において検討された．また，それぞれの要因を把握するための，信頼性と妥当性を備えた尺度が整備された．最終的に特定された各要因を説明する構成概念は以下の通りである．①体育授業場面のやる気を喪失させる心理社会的ストレッサー:「効力感の欠如」，「教師態度」，「被中傷」，「級友の不真面目」，「体調不備」（第１節）．②体育授業中のやる気を喪失させる友人ストレッサーに対する認知的評価：「脅威・影響性」，「コントロール可能性」，「挑戦の価値」，「予測性」（第２節）．③体育授業中のやる気を喪失させる友人ストレッサーに対するコーピング：「内省」，「無視」，「付き合い回避」，「自己主張」，「接近」，「受け流し」（第３節）．④体育授業中に生起する心理的ストレス反応：「悲哀・落胆」，「気力欠如」，「怒り・不機嫌」，「恐れ・心配」，「落ち着き欠如」（第４節）．

また，特定された要因の男女差と学年差を検討した結果，第二次性徴による体型変化の顕現化や，青少年期の心理社会的発達上の一般的性差と考えられる，男子よりも女子において他者のまなざしを強く意識する傾向がみられることなどが反映していると考えられる男女差が，複数の要因において確認された．また，学年の進行に伴う人間関係の複雑化とそれに伴う対人的態度の変化などが影響していると思われる学年差が，認知的評価やコーピングに対する評価において認められた．

次に，以上の第１節から第４節で明らかになった心理的ストレス過程に関わる認知的要因の因果的関連を想定し，⑤の検討課題である，体育授業場面の友人ストレッサーに対する心理的ストレス過程が検討された．構造方程式モデリング（SEM）に基づくパス解析の結果，想定された心理的ストレス過程は，データに対して適合することが示された．すなわち，生徒は，友人ストレッサーと遭遇した場合に，そのストレス状況について解決すべき問題かどうかなどを評価し，さらにそのストレス状況は自分に制御できることかどうかを考え，それに応じて対処を選択し，心理的反応が調整されていることが示唆された．この結果は，心理的ストレスモデル（Lazarus and Folkman，1984）に準拠し説明される認知的評価，コーピング，心理的ストレス反応の因果的関連にほぼ合致する過程であった（第５節）．以上により，体育授業における友人ストレッサーに対する対処に関わる心理的ストレス過程が明らかにされた．また．体育授業場面の生徒の心理と行動を理解するための指標（各要因の構成概念）が提示されたことと，それらを測定する尺度が整備されたことは，授業実践への活用を考えた場合には意義があると考えられた．

第４章では，第１章第４節で提示された検討

課題⑥の，体育授業における社会的スキルが検討された．そして，中学生が体育授業場面で用いている社会的スキルとして「規範維持スキル」，「積極的主張・行動スキル」，「共感的行動スキル」，「分与申請スキル」が特定された．また，各スキルを説明する項目によって構成される社会的スキル尺度が整備された（第1節）．さらに，社会的スキルの性差に関しては，「積極的主張・行動スキル」は男子で高く，友人との関係維持に関わる「共感的行動スキル」や「分与申請スキル」は女子において高いことが示され，青少年期の男子は「周囲の目に抵抗する形で，あるいは平行する形で，自分なりに自分をみる」ということと，女子では「他者のまなざしを意識し全体の中で自分をみる」（梶田，1988）という心理社会的発達の男女の相違点が反映されたと思われる結果が認められた（第2節）．さらに，社会的スキルと心理的ストレス過程の関連性に関わる検討が行われていないことが指摘され，その検討の必要性が述べられた．

第5章では，検討課題⑦の，体育の授業に対する適応について検討され，適応を説明するための構成概念として，「仲間に対する連帯志向性（連帯志向）」と「体育の授業に対する肯定的認識（肯定的認識）」の2つが特定された．そして，それぞれを説明する項目からなる尺度を構成し，その信頼性と妥当性が検証され，体育授業適応感尺度が整備された．さらに，体育の授業に対する適応状態に応じて生徒を4つの適応タイプ（連帯―適応型，仲間遊び―不適応型，脱連帯―不適応型，マイペース―適応型）に分類することが可能であると考えられた（第1節）．次に，その適応タイプ別に心理的ストレス反応の生起状況と社会的スキルの高低が比較検討され，心理的ストレス反応と社会的スキルの実態を考慮した場合には，男子の「脱連帯―不適応型」が体育授業に対する不適応状態としてはもっとも重篤であることが指摘された．また，体育授業に対する適応においては，仲間との関わり合いが重要であることや，適応状況に応じた生徒理解の必要性などが指摘された（第2節）．

第6章では，第3章から第5章までの分析結果によって明らかになった，体育授業における友人ストレッサーに対する心理的ストレス過程を説明するストレスレベル認知，認知的評価，コーピング，および心理的ストレス反応と，社会的スキルおよび体育の授業に対する適応の状態を説明する「仲間に対する連帯志向性（連帯志向）」と「体育の授業に対する肯定的認識（肯定的認識）」，そして原因帰属との関連が考察され，「体育授業適応モデル」が提唱された．

このモデルの特徴は，第1に，これまでに提出されている心理学的ストレスモデルを，ストレス過程の概念的枠組みに従って修正し，心理的ストレスの変化と体育授業に対する適応との関連を明確にしている点である．第2の特徴は，体育授業場面におけるネガティブな友人関係への対処過程に原因帰属を関連づけている点である．ストレス反応が低減しなかった場合の原因帰属が，ストレス反応の低減にポジティブにフィードバックされる場合には，再評価の過程を経過することなくストレス反応は低減もしくは解消されるということを想定している．第3の特徴は，社会的スキルが心理的ストレス過程と体育授業適応過程のどの部分に，どのような影響を及ぼすのかということを因果的関係の視点から捉えようとしている点である．「体育授業適応モデル」の以上3つの特徴は，本研究のオ

リジナルな視点として提出されたものである．

第７章では，「体育授業適応モデル」が生徒の心理的過程を説明するモデルとして妥当性をもつものであるかどうかが，構造方程式モデリング（SEM）に基づくパス解析によって検討され，さらに，実践場面への適用可能性という視点から検証された．第１章において明らかにされた友人ストレッサーのうちの「被中傷」を特に取り上げ，友人からネガティブな干渉を受けたときの生徒の心理的ストレス過程と体育授業に対する適応状態との関連が検討された．SEMによるパス解析の結果からは，モデルによって示される各要因の因果的関連が，生徒から収集されたデータに対してよく適合することが示された．これにより，社会的スキルと心理的ストレス過程および体育授業に対する適応を説明する要因との因果的関係と，「被中傷」を経験する生徒の心理的ストレス過程と体育授業への適応過程を説明する要因の因果的関連が示された．なかでも，社会的スキルは，認知的評価やコーピングとの連係によって初めて，その機能的目的である友人との良好な関係の構築に貢献できることが示唆された点が注目される．さらに，以上のデータから明らかになった要因間の関連の実態を受けて，体育授業場面で，友人からの中傷やネガティブな干渉を受けた場合の対処方法やそれを指導するための介入方法の視点などが検討された（第１節）．次に，17名の生徒を対象とする介入実践を行い，パス解析によって示された因果的関連に基づく認知行動的対処方略の指導を合計２回（40分と20分），介入指導用に作成された資料を読みながら実体験の確認を交えて指導を受けた生徒の介入効果が検討された．介入前と介入後の心理的側面の変化を比較した結果，被介入生徒の友人ストレッサーに対するストレスレベル認知は有意に低下し，体育授業の楽しさと体育授業に対する肯定的認識が向上していた．これにより，モデルに基づく介入指導の授業実践場面への適用性が概ね認められた（第２節）．

第８章では，第１章から第７章までの総括が行われた．そして，本研究により得られた体育授業の実践場面に対する教育的示唆として，体育授業における友人との対人関係に関わる問題によって，体育授業への適応に対するネガティブな影響が及ばないようにするためには，その問題に対する認知的評価，コーピング，社会的スキル，心理的ストレス反応の変化に対する原因帰属などを適切に連係させることが重要であることと，そのような認知行動的能力を高めるためには教師による指導介入が必要であることなどが指摘された．最後に，今後に残された課題として，体育授業の内容や方法に関わる検討課題と生徒の心理的側面に関わる検討課題の統合的視点に基づく研究の必要性と，現場教師と研究者とによる協力体制に基づく研究推進の必要性などが指摘された．

付記：本論文の作成にあたり，主査としてご指導をいただいた名古屋大学総合保健体育科学センター西田保教授，また，副査として有益な示唆を与えていただきました同大学大学院教育発達科学研究科速水敏彦教授，同大学総合保健体育科学センター山本裕二教授に，心から感謝を申し上げます．

高校運動部員の心理的ストレスに関する研究：部活動ストレスモデルの構築と介入プログラムの作成

渋倉　崇行（県立新潟女子短期大学）

学位：博士（心理学）　授与機関：名古屋大学
取得日：2008年3月25日　指導教員：西田　保教授

本研究は，高校運動部員（以下，部員と称す）がストレスマネジメントを行うことによって運動部活動（以下，部活動と称す）への適応を実現していくことに大きな関心があった．そのため，部活動ストレスモデルの構築と部員用のSMP（Stress Management Program）の作成を研究目的として掲げ，理論的および実践的研究を行った．

以下では，本研究の目的や意義，そして本論文の各章で検討された研究結果を要約する．

第１章　運動部活動の意義とストレスマネジメント研究の動向

第１章では，部活動の意義が参加者の現在と将来における健康の獲得にあることを指摘し，このような部活動の意義を現実のものとするためには，部員がストレスマネジメントを行うことよって部活動の環境に適応することが必要であることを示した．そして，心理的ストレスに関わる研究の動向を概観することによって心理的ストレスの概念について整理し，特に本研究に関連の深いスポーツ領域で行われた国内外の心理的ストレス研究の成果と問題点を整理した．その結果，部員の部活動適応の促進をねらいとした心理的ストレス研究を行ううえで，①部員の心理的ストレスの実態把握と部活動ストレスモデルの構築が必要であること，②部員のストレスマネジメントを促進する介入プログラムを作成する必要があること，③部活動ストレスの肯定的側面に注目した研究を推進することの３つが課題となることが指摘された．

第２章　本研究の目的と意義

第２章では，第１章で指摘された課題を受け，本研究の目的が以下の通り提示された．すなわち，①部員の心理的ストレスを理解するための部活動ストレスモデルを構築すること，②部員のストレスマネジメントを促進する介入プログラムを作成することの２つであった．また，本研究の意義として，①SMPが作成されることによって，部員が部活動においてストレスマネジメントを行えるようになること，②部活動ストレスモデルが作成されることによって，現場の指導者がストレスマネジメントに関する具体的な指導や支援を行えるようになること，③部活動ストレスを体験することの教育的意義を示すことによって，部活動指導に関わる新たな視点が提示されることの３つが指摘された．

第３章　運動部員の心理的ストレス過程に関する研究

第３章では，第１の研究目的であった部活動ストレスモデルの構築に向けた研究が行われ，部員の心理的ストレス過程の構

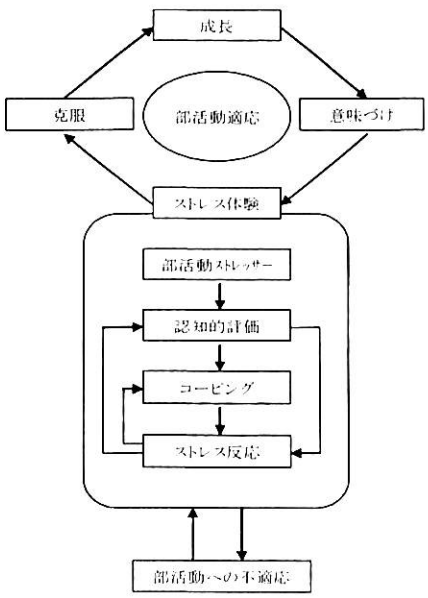
造やそこに含まれる変数間の因果関係が検討された．最初に，心理的ストレス過程に含まれる４変数を測定する部員用の尺度が作成された．すなわち，「抑うつ・不安」，「不機嫌・怒り」，「焦燥」，「無気力」，「引きこもり」の５下位尺度から構成される高校運動部員用ストレス反応尺度，「指導者」，「練習時間」，「競技力」，「仲間」，「怪我・病気」の５下位尺度から構成される高校運動部員用ストレッサー尺度，「問題解決」，「回避」，「カタルシス」，「気晴らし」，「肯定的思考」の５下位尺度から構成される高校運動部員用コーピング尺度，そして「挑戦」，「脅威」，「コントロール可能性」の３下位尺度から構成される高校運動部員用認知的評価尺度が作成された．また，これらの尺度は高い信頼性と妥当性を持つことが確認された．

つづいて，作成された尺度を用いて，部員の心理的ストレス過程における変数間の因果関係が検討された．重回帰分析の結果，部員の心理的ストレス過程は Lazarus and Folkman（1984）のモデルを大枠として支持することが示された．また，部員のストレスマネジメントにおける重要な知見も見出された．すなわち，①部員は部活動ストレッサーを基本的に脅威と評価しやすいが，練習時間，競技力，怪我・病気関連のストレッサーについては挑戦とも評価しやすいこと，②部員は部活動ストレッサーを脅威と評価した場合にはストレス反応の表出を導きやすいが，対処可能であると評価した場合にはストレス反応の表出を低減しやすいこと，③部員が部活動ストレッサーを脅威であると評価した場合には情動焦点型のコーピングが採用されやすいこと，また部活動ストレッサーを自分にとって挑戦であると評価した場合や対処可能であると評価した場合には問題焦点型のコーピングが採用されやすく，情動焦点型のコーピングは採用されにくいこと，④部員は部活動ストレッサーに対して情動焦点型のコーピングを採用した場合にはストレス反応の表出を導きやすいことが見出された．このように，第３章では部員の心理的ストレス過程の構造とそこに含まれる変数間の因果関係が，質問紙から得たデータを統計的手法によって分析する量的研究によって明らかにされた．

第４章　運動部員の心理的ストレス体験に関する研究

第４章では，部員の心理的ストレス体験が部員の主観的視点の側面から探索的に検討された．第３章と同様に第１の研究目的である部活動ストレスモデルの構築に向けた研究であり，ここでは対象者の主観的な語りをデータとして仮説生成を行う質的研究が行われた．具体的には，グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用し，「部員にとって部活動におけるストレス体験はどのような意味があるのか」というリサーチ・クエスチョンのもと，適応部員と中途退部者の心理的ストレス体験の意味が検討された．その結果，適応部員のストレス体験は，部活動ストレスの「体験」段階，部活動ストレス体験による「成長」段階，部活動ストレス体験への「意味づけ」段階の３段階に分けて考えられることが示された．また，中途退部者のストレス体

験は，その一連の過程の中で「部員としての不適応プロセス」，「高校生としての適応プロセス」，そして「個人としての成長プロセス」を経験していることが示された．さらに，SMP の作成に生かされるいくつかの支援の視点も見出された．まず，部員は「体験→成長→意味づけ→体験'」のサイクルを円滑に辿ることで部活動への適応を促進させていると考えられた．すなわち，このサイクルを部員が円滑に辿れるよう支援することはSMPの大きな目標となることが指摘された．また，適切なコーピングスキルと利用可能なソーシャル・サポートの獲得を中心とした支援を行うことが，部員の不適応を予防するうえで重要であることも指摘された．



第５章　部活動ストレスモデルの構築

図　部活動ストレス－適応モデル

第５章では，第３章による部員の心理的ストレス過程に関する研究と，第４章による部員の心理的ストレス体験に関する研究の結果を受け，部員のストレスマネジメントを効果的に進めるための「部活動ストレス－適応モデル」が作成された（図）．このモデルの特徴は，部員の心理的ストレスを「ストレス体験」を起点として部活動適応に至る過程と部活動不適応に至る過程の両側面から捉えようとする点であった．特に，部活動適応に至る過程は，「ストレス体験→克服→成長→意味づけ」のプロセスが循環的に描かれており，部員がこの過程を辿ることで部活動への適応が次第に実現に向かっていく様子が示された．また，この循環過程はストレスマネジメントを活性化する働きを持つものとして捉えられた．さらに，部活動への適応や不適応という現象が，部員がどのようなストレス体験をするのかということに依存することを明確に示した点も，このモデルの大きな特徴であった．このことによって，部員がストレスマネジメントを行う重要性が強調された．

ところで，本研究で構築された「部活動ストレス－適応モデル」は，部員の部活動への適応を促進しようとする本研究のねらいのもとに作成されたものであり，スポーツ領域におけるこれまでのストレスモデルとは内容的に異なるものであった．また，これまでのスポーツ領域における心理的ストレス研究では，個人の生産性を低下させたり，あるいは適応を阻害したりする要因として心理的ストレスを捉えてきが，本モデルでは心理的ストレスの否定的な側面のみならず肯定的な側面にも着目していた．すなわち，このモデルには，「ス

トレス体験による成長」という要素が含まれた．さらに，部活動適応に向かう「ストレス体験→克服→成長→意味づけ」のプロセスがモデル内で描かれることにより，本モデルはストレスマネジメントの実践とともにその活性化も視野に入れることが示された．このようなことから，本研究で構築された「部活動ストレス－適応モデル」は，これまでのスポーツ領域におけるストレスモデルと比較しても独創的なモデルであると考えられた．

第６章　運動部員のストレスマネジメントに関する実践的研究

第６章では，第５章で作成された「部活動ストレス－適応モデル」を理論的根拠とすることで，第２の研究目的である部員のストレスマネジメントを促進する介入プログラムの作成が行われた．すなわち，SMP の目標は，①部活動におけるストレスマネジメントの主体的な実践を通じて部活動への適応を促進すること，および②部員の対処資源を強化することで部活動への不適応を予防することとされ，その目標を実現する SMP の内容が提案された．また，SMP の方法論として体験学習モデルを採用してプログラムが構成された．つづいて，SMP を部員に対して実施し，その効果が検討された．SMP における部員の心理的ストレス過程に対する働きかけの効果を，部員用のストレッサー尺度，認知的評価尺度，コーピング尺度，ストレス反応尺度を用いることによって検討した．また，SMP の部活動への適応促進と不適応予防に及ぼす効果を，部員用の部活動適応感尺度を用いることによって検討した．最後に，「ストレス体験→克服→成長→意味づけ」の循環過程の円滑化に向けた支援が SMP において適切に行われたのかどうかの判断を，部員のワークシートにおける記述を基に検討した．その結果，いくつかの課題が指摘されたものの，部員のストレスマネジメントを促進する介入プログラムとして SMP の効果は概ね認められると判断された．

第７章　総合的考察

第７章では，各章で検討された研究結果が要約された後，本研究結果の部活動指導に対する貢献が以下の通り考察された．すなわち，①部活動ストレスにポジティブな意味が加わったことによって，部活動ストレスに対する新しい見方を現場に持たせることができるということ，②本研究で構築された「部活動ストレス－適応モデル」とそれを理論的根拠とする SMP は，部活動への適応を自ら実現することができる自立的な部員の育成を促進するということ，③本研究で作成された SMP は，部活動現場に導入しやすい介入プログラムであることが指摘された．最後に，今後の検討課題として，①SMP の現場での適用可能性を高める工夫が必要であること，②本研究のライフスキル研究への発展が期待されること，③部活動における特徴的なストレス状況に着目した介入プログラムの作成が必要であることが議論された．

謝辞　本論文を作成するにあたり，指導教員である名古屋大学総合保健体育科学センター教授西田保先生より，多くの貴重なご助言を頂きました．記して深く感謝申し上げます．

A study on reaction times to a visual target during smooth pursuit eye movement.

追従性眼球運動中に呈示される視覚刺激への反応時間に関する研究（英文）

瀬谷　安弘（東北大学加齢医学研究所）

学位：博士（理学）　　授与機関：東京都立大学
取得日：2007年3月25日　　指導教員：今中國泰教授

論文概要

本論文では，移動する視覚対象を観察する時に生じる，追従性眼球運動が注意機能に及ぼす効果について，反応時間より検討した．論文は，実験心理学的手法を用いた実験的検討の5実験とシミュレーション実験の，計6実験から構成された．ここでは，主要な4実験について概要を述べる．

序

認識すべき視覚対象が視野内を移動する場合，私たちはその対象の移動に合わせて滑らかに視点を移動させる．この視点の移動は追従性眼球運動と呼ばれる．移動対象を正確に追従するためには，背景の中からその対象を選択的に知覚する必要がある．それ故，追従中には，視覚対象の空間的な選択及びその視覚情報処理の促進機能として働く注意が，移動対象に向けられていると考えられている（Kowler, van der Steen, & Tamminga, 1984）．

最近の反応時間課題を用いた研究において，追従の進行方向と同側の視野（例えば，右追従時の右視野）に視覚刺激が呈示されると，逆の場合に比べて反応時間が速くなることが報告されている（van Donkelaar & Drew, 2002）．これは，追従によって注意の空間的配置が，視野中心ではなく，追従方向の視野に移動するために，追従方向の視野に呈示された視覚刺激の検出が促進されたと説明されている．

また，追従が，注意の空間特性のみならず，複数の課題に同時に注意を向けて処理する能力が有限であるという，注意の容量特性に作用し，結果として追従の正確性と反応の速さがトレードオフする，即ち追従が正確になるほど，反応時間が遅くなることも示唆されている（van Donkelaar & Drew, 2002）．

以上のように，先行研究において，追従が注意の空間的配置や注意容量に影響し，反応時間を変化させることが示唆されている．但し，これまでの研究では，注意に関する実験的な操作は行われておらず，反応時間の変化を注意によって解釈しているに過ぎない．それ故，追従の注意機能への影響については，客観的事実の裏付けが必要とされている．

実験1：追従中に呈示される視覚刺激への反応時間の再検討

実験1では，先行研究で報告されたように，追従の方向や速度によって反応時間が変化するのかどうかを再検討した．

方法：図1のような反応時間課題を用いて，実験を行った．被験者の課題は中心の円枠

を追従し，ランダムな時点でいずれか一つの円枠の中に呈示される光点に対して，素早く反応することであった．円枠の移動速度は 1〜40° /sec であった．また，統制条件として，刺激が静止して画面中央に呈示される静止条件も併せて行った．反応時間と眼球運動が測定された．

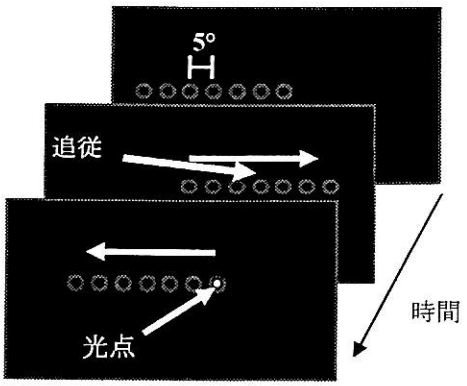


図 1．実験 1 で用いた刺激模式図．

結果と考察：実験 1 で得られた結果を図 2 に示す（右追従時のみ）．5° /sec（●）から 10° /sec（◇）の刺激速度間で反応時間に大きな差があった．この結果は，先行研究の結果と一致し，追従速度の速くなることにより，追従に要する注意容量が増大し，結果として反応課題に要する注意容量が減少したために，反応時間が遅くなったと考えられる．

追従方向の効果に関して，光点が呈示される視野方向が追従方向と一致した場合と不一致の場合の反応時間差を算出したところ，右追従時に一致試行の反応時間は不一致試行よりも速かった（図 2）．この結果は，先行研究の結果と一致し，追従方向の視野に注意の空間的配置が移動したために，その方向に呈示された光点の検出が促進されたと考えられる．

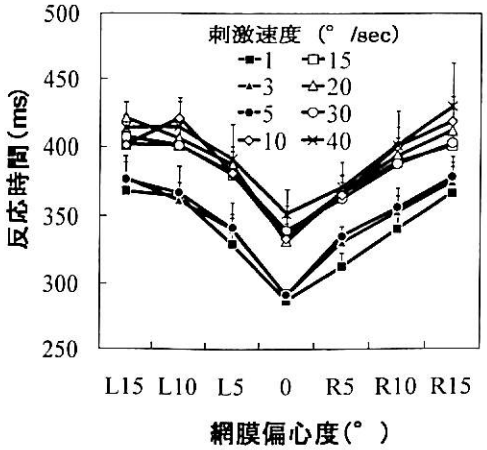


図 2．実験 1 の平均反応時間（右追従時のみ）．L は光点が左視野，R は右視野，0 は中心窩に呈示されたことを意味する．縦棒は SE を示す．

実験 2：反応時間における網膜像運動の効果の検討

実験 1 では，追従時の反応時間を再検討し，結果は先行研究の結果を支持した．但し，一般に，移動対象の追従は必ずしも正確ではなく，刺激速度が速くなるほど，追従速度誤差（追従速度と刺激速度の差）が大きくなる．それ故，網膜上での刺激像の動きが反応時間に影響している可能性がある．即ち，実験 1 での追従速度や方向の反応時間への効果は像運動の速度（Westheimer, & Mckee, 1975）や方向の効果（Ball & Sekuler, 1980）を反映している可能性がある．

この可能性を検討するために，実験 2 では，実験 1 での網膜上での像運動を模擬した刺激を，被験者は凝視（眼球静止状態）

しながら観察し，その間に呈示される光点への反応時間を検討した．もし，実験1の結果が，追従時に生じる網膜像運動の効果を反映しているのであれば，凝視時であっても，追従時と同様な反応時間のパターンを示すと考えられる．

方法：方法は次の2点を除いて，実験1と同じであった．(1) 被験者は画面中央に静止して呈示された凝視刺激を凝視しながら，移動する円枠とターゲットを観察した．(2) 刺激の移動速度は 0～15°/sec であった．これらの刺激速度は，実験1の追従速度誤差に相当する．

結果と考察：結果は，網膜偏心度が大きくなる，または刺激速度が速くなるに伴い，反応時間が遅くなることを示した．図3は網膜像の運動速度（実験1の結果は，追従速度誤差）を関数とした，実験1と2の平均反応時間を示す．図より明らかなように，追従中の反応時間は凝視中の反応時間よりも遅かった．また，追従中の反応時間は，およそ 0.3° /sec の網膜像運動速度（実験1の刺激速度 5° /sec に対応）を境に，反応時間に大きな差があったのに対し，凝視中の反応時間に大きな差はなかった．この結果は，実験1の 5° /sec を境とした反応時間の差が網膜像の運動速度では説明できないことを示唆する．

網膜像の運動方向の効果に関して，光点が呈示される視野方向が網膜像の運動方向と一致した場合と，不一致の場合の反応時間差を算出したところ，反応時間は必ずしも像運動の方向に依存して変化しなかった．この結果は，像運動の方向では，実験1での追従方向による反応時間の変化を説明できないことを示唆する．

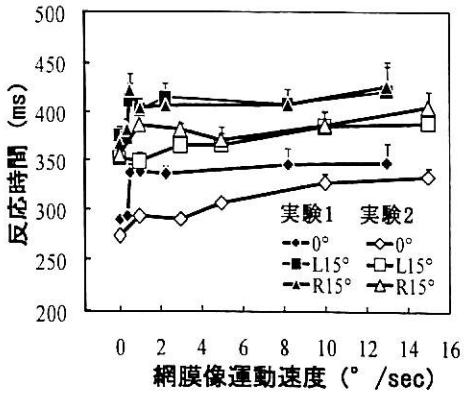


図 3．網膜像運動速度を関数とした実験1と2の反応時間の比較（偏心度条件 0, L15, R15° のみ）．実験1の結果は，左から刺激速度 0（静止条件），1, 5, 10, 15, 20, 30, 40° /sec 条件の結果に対応する．縦棒は SE を示す．

実験3：追従の正確性と反応の速さのトレードオフの検討

実験3では，注意容量に関連する，追従の正確性と反応の速さのトレードオフ現象を検討した．実験では，反応時間に上限値を操作することで反応課題に要する注意容量を操作した．もし，トレードオフ現象が生じるのであれば，反応時間の上限値が短くなるほど，反応課題に要する注意容量が増大することが予測されることから，結果として，追従速度誤差が大きくなると考えられる．

方法：方法は以下の点を除いて，実験1と同じであった．(1) 被験者は予め設定された反応時間の上限値以内（300, 400, 500 ms のいずれか）に反応することが教示された．また，各試行において，反応時間が上限値以内であったかに関するフィードバ

ックが音によって与えられた．(2) 光点が呈示される位置が中心の円枠及び±5° の円枠のいずれかであった．(3) 刺激の移動速度は 10，20，30，40°/sec であった．

結果と考察：図 4 に，反応の上限値における，平均追従速度誤差を示す．結果は，20° /sec 以上の刺激速度では，上限値が短くなるほど，追従は不正確になることを示した．一方，10° /sec の刺激速度では，上限値によって追従の正確性は変化しなかった．これらの結果は，高速で追従を行う場合に追従の正確性と反応の速さがトレードオフすることを示唆する．

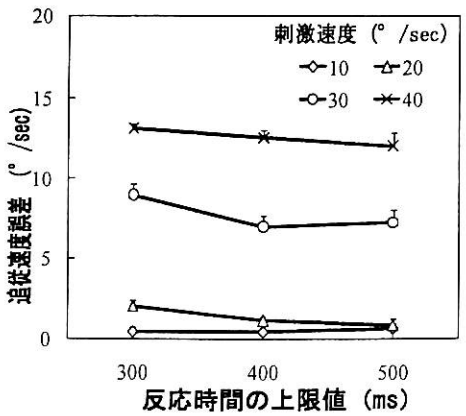


図 4. 実験 3 で得られた平均追従速度誤差．縦棒は SE を示す．

実験 4：追従中の反応時間における注意の空間的移動の効果の検討

実験 4 では，注意の空間的移動について検討するために，光点の呈示方向に関する手がかりを光点呈示の直前に，被験者に呈示することで，注意の移動を促した (Posner, 1980)．もし，凝視時と同様に，追従時においても注意の移動が可能であるならば，手がかりの示す方向に光点が呈示された場合に反応時間が速くなると考えられる．

方法：方法は以下の点を除いて，実験 1 と同じであった．(1) 光点が呈示される直前に，光点が呈示される方向（例えば，中心の円枠より右側，または左側）に関する音手掛りが呈示された．但し，光点が中心の円枠に呈示される試行を除き，全試行の 75%では，手がかりは光点の呈示方向を正しく示し（有効試行），残り 25%では誤った方向を示した（無効試行）．音手がかりが呈示されるタイミング（stimulus onset asynchrony; SOA）は光点呈示の直前 50，100，150 ms のいずれかであった．(2) 光点が呈示される位置は中心の円枠，または ±5° と 10° の円枠のいずれかであった．(3) 刺激の移動速度は 10°/sec であった．また，移動条件の他に，刺激が静止して呈示される静止条件も併せて行った．

結果と考察：図 5 に移動条件の平均反応時間を示す．結果は，有効試行において，無効試行に比べて反応時間が速く，また SOA が長くなると有効・無効試行の反応時間の差は大きくなることを示した．これらの結果は，凝視中の注意を検討したこれまでの研究の結果と一致し，追従中においても注意を移動できることを示唆する．有効試行では，手がかりにより，光点の呈示方向に予め注意が移動するために，光点の検出が速くなり，他方，無効試行では光点呈示方向とは逆方向に注意が移動するために，反応が遅くなったと考えられる．

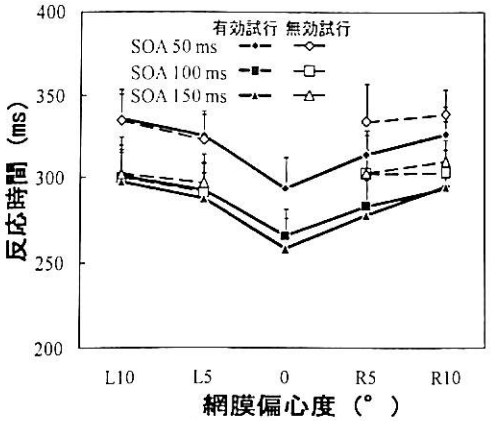


図 5. 実験 4 で得られた平均反応時間(移動条件のみ)．縦棒は SE を示す．

まとめ

以上の 4 実験の結果は，追従中の反応時間が追従の正確性と反応の速さのトレードオフ現象や注意の空間的配置の移動を反映することを示し，先行研究の見解を支持した．

追従性眼球運動がスポーツ競技場面や自動車運転場面において，頻繁に生じる眼球運動の 1 つであることから，本研究の追従が注意に及ぼす効果に関する知見は，注意研究だけでなく，スポーツビジョンや運転者の視覚情報処理といった応用研究においても重要な知見を提供すると考えられる．

引用文献

Ball, K., & Sekuler, R. (1980). *Perception*, **9**, 317-325.

Kowler, E., van der Steen, J., Tamminga, E. P., & Collewijn, H. (1984). *Vision Research*, **12**, 1789-1798.

Posner, M. (1980). *The Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **32**, 3-25.

van Donkelaar, P., & Drew, A. S. (2002). *Progress in Brain Research*, **140**, 267-277.

Westheimer, G., & Mckee, S. P. (1975). *Journal of the Optical Society of America*, **65**, 847-850.

謝辞

本研究の実施及び論文の執筆に当たり，指導教員としてご指導下さいました，首都大学東京の今中國泰教授，北一郎教授，九州大学の森周司教授に，心より感謝申し上げます．

学位取得に関わる論文リスト

Seya, Y., & Mori, S. Tradeoff between response speed and pursuit accuracy. *Motor Control*, **11**, 109-118, 2007.

Seya, Y., & Mori, S. Motion illusion reveals fixation stability of karate athletes. *Visual Cognition*, **15**, 491-512, 2007.

スポーツ競技者の継続的自己モニタリング技法の開発

崔　回淑　（筑波大学博士特別研究員）

学位：博士（体育科学）　授与機関：筑波大学
取得日：2008年3月25日　指導教員：中込四郎教授

スポーツ競技者の安定したパフォーマンス発揮には，日々のトレーニングや競技会において競技者の体験する情動を如何にコントロールして最適状態に整えるかとうい問題が重要となる．従来の体育・スポーツ心理学の領域では，「覚醒とパフォーマンス」といったテーマから多くの研究がなされ，パフォーマンス発揮にとっての最適な覚醒水準の存在が指摘されてきた．しかしながら，その研究のほとんどは両者間の関係を説明するいくつかの理論の提示に止まり，覚醒の最適水準に近づけるための具体的なトレーニング法の開発やその効果の直接的検証を目的とした取り組みがなされなかった．このような背景から，本研究では，特定の情動に対する個人の最適水準を具体的に示すIZOF（Individual Zones of Optimal Functioning, Hanin, 2000）理論を下敷きに，現場でのトレーニング活用に向けた，特に心理的コンディショニングにつながる情動コントロール能力の向上のためのトレーニング手段として，「自己モニタリング技法」と称したトレーニング法（自己記述式トレーニングシート）を開発し，競技現場での適用を通して，その有効活用を明らかにした．また，モニタリング法の心理的機序に対する説明を行った．

本研究は，7章（第1章「序論」，第2章「本研究の目的」，第3章「IZOF理論の検証及びトレーニング手段としての活用」，第4章「継続的モニタリングのためのトレーニングシートの改良」，第5章「継続的自己モニタリングによる内的変容の検討」，第6章「心理的介入を伴った長期に渡る自己モニタリングトレーニングの有効性の検討」，第7章「総括」）で構成されている．

第1章では，競技スポーツにおける心理的コンディショニングの重要性や困難さに触れ，情動コントロールに対する継続的自己モニタリングの影響について述べた．また，情動とパフォーマンスの関係を予測・説明する理論を概観し，本研究にIZOF理論を用いる有効性を述べるとともに，IZOF理論に関する先行研究を展望しその問題点や課題を整理した．

第2章では，本研究の目的を述べた．本研究の目的は，スポーツ現場で活用できる心理的コンディショニングのためのトレーニング手段として，新たにモニタリング技法を開発し，その有効性及び認知要因からその機序を明らかにすることである．

第3章（研究課題1）では，IZOF理論の情動

プロファイリング手法に則り，情動項目やパフォーマンスについて自己評価を行う「心理的コンディショニングシート」を試作し，49 名の大学スポーツ競技者に約 2 ヶ月間に渡るモニタリングを実施した．その結果，IZOF 理論の仮説が概ね検証され，各個人におけるパフォーマンス発揮と関連した情動の最適範囲（IZOF）の存在を認めた．さらに，トレーニング継続により，情動変動の幅の減少，最適範囲への適合頻度の増大，心理的競技能力の向上が認められた．このようなトレーニング効果により，継続的な情動の振り返り作業が，自己への気づきや情動コントロール能力を高め，良好な心理的コンディショニングにつながると考察した．

第 4 章（研究課題 2）では，研究課題 1 の結果を受け，競技現場での活用においてより有効なトレーニングシートとなるよう改良を加えた（改訂版心理的コンディショニングシート）．その主な改良点は，情動項目の精選，日常生活やパフォーマンス評価側面の付加，そして練習や試合時の同一次元での評価，等であった．改訂版心理的コンディショニングシートの記入例を図 1 に示す．本シートを用いて 46 名のスポーツ競技者に研究課題 1 とほぼ同一条件で 2 ヶ月のトレーニングを実施した．その結果，種々の側面から改訂版シートの有効性が確認され，さらに，改訂前のシートよりも大きな効果を得ることができた．

第 5 章（研究課題 3）では，モニタリングトレーニング効果に介在すると考えられる認知要因を背景とした「スポーツセルフ・モニタリング能力

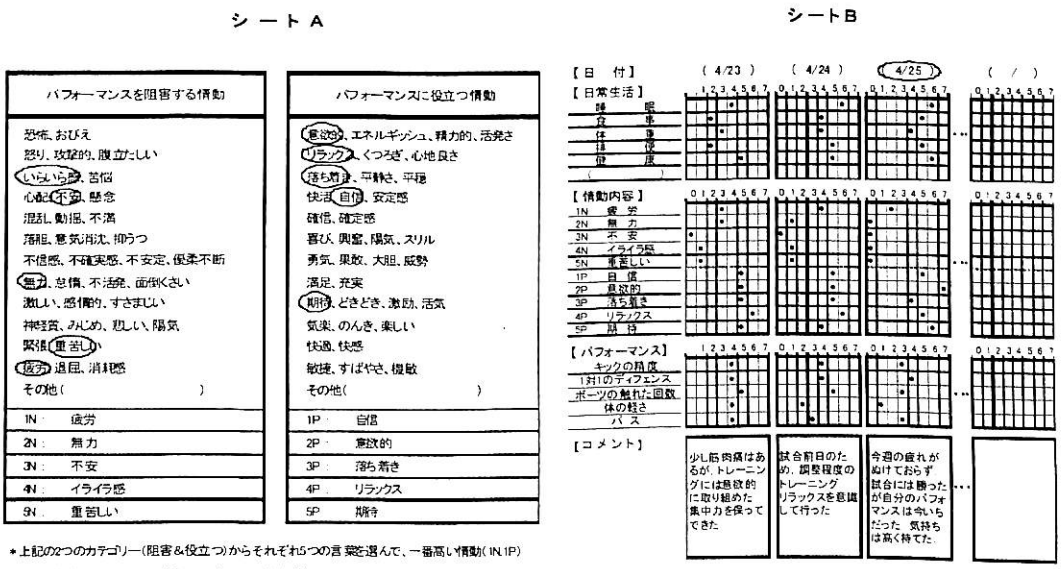


図 1　改訂版心理的コンディショニングシートの記入例

尺度」を作成した．本尺度の項目の選定には，研究課題1及び2における対象者らの内省報告ならびに心理的競技能力・競技意欲・身体的統制感や精神的安定性に関わる既存尺度を参考にした．そして本尺度を 343 名のスポーツ競技者に実施し，得られた資料をもとに因子分析を施したところ，「動機づけ」，「気づき」，「意図性」，「統制感」の 4 つの因子を抽出できた．さらに，種々の側面から行った信頼性や妥当性の検討では，尺度の有効性が確かめられた．特に，改訂版シートを用いた約2ヶ月に渡るモニタリングトレーニングの参加者と非参加者の比較では，参加者が全ての因子（下位尺度）において高い値を示した．このようなことから，継続的自己モニタリングトレーニングによる効果が，上述の 4 つの認知要因の向上によってもたらされると考察した．また，本尺度が今後スポーツ選手の新たな心理適性要因を査定する心理テストとして，メンタルトレーニング指導現場で活用できることが考えられた．

第 6 章（研究課題 4）では，より顕著なモニタリングトレーニング効果を得るために，トレーニング期間の延長とともに情動のモニタリングを介しながら情動面の振り返りを促進する介入（個別の面接）を行いその効果を検討した．対象者は，韓国スケートナショナルチームの男女 14 名の選手のうち7名をトレーニング群そして残りの7名を非トレーニング群とし，約9ヶ月のトレーニング期間を設け，その間に4回の個別面接による介入を図った．ここでのトレーニング効果については，両群の全般的な比較及び個別事例による詳細な検討を行った．全般的な比較では，トレーニング群のシーズン最高記録及び心理的競技能力に有意な向上が見られ，情動の最適範囲への適合においてもトレーニングの後半期での増加が認められた．さらに事例検討からは，個別面接が情動とパフォーマンスや競技生活での出来事との照会を促進させ，両者間の対応関係への理解を深め，時に，面接による介入が競技不振に伴う情動面の直面化に対する心理サポート機能を果すことが明らかとなった．これらのことから本トレーニングの効果をさらに高めることが考えられた．

第 7 章では，各章で示された結果をまとめ，総合的な考察を行った．以上の一連の成果から総括して次のことが結論できた．本研究で開発した「心理的コンディショニングシート」への記入を通した継続的自己モニタリングは，情動のコントロール能力の向上や安定した実力発揮に有効である．そしてそのような効果は，自己への「気づき」，心身の「統制感」，行為や目標への「動機づけ」や「意図性」といった認知要因の向上によってもたらされる．また，継続的自己モニタリングと同時に適切な介入（心理面接）を組み入れることにより，その効果をさらに高めることができる．

付記：本論文を作成するにあたって，研究指導教官として長年のご指導を賜りました中込四郎教授，ならびに貴重なご助言を賜りました先生方に深く感謝申し上げます．また，研究調査にご協力して頂いた現場の競技者及び関係者の方々に心からお礼を申し上げます．

競争場面の認知に関する精神生理学的研究
—事象関連電位を中心に—

松本　清（奈良女子大学博士後期課程研究生）
学位：博士（学術）　授与機関：奈良女子大学
取得日：平成20年3月24日　指導教員：佐久間春夫教授

本研究は、頭皮上から導出され、感覚刺激に対する時系列的な脳内情報処理過程を反映する事象関連電位（ERP: event-related potential）を用い、競争事態における認知の特徴を明らかにすることによって、競争という社会的事象と生理学的反応との対応関係を明らかにすることを目的としたものである。

第1章では、競争がストレス刺激となることを指摘し、競争時の心理や情報処理過程を検討するために、ERPを用いることの有用性について述べた。これまでのERPを用いた精神生理学の先行研究に基づき、ERPの主要な成分であるCNV、PINV、P300、N400についての知見をまとめ、本研究で取り上げることの意義と仮説を示した。

日常的なストレス事態の一つである競争は、優越や達成の動機と失敗回避動機が混在した葛藤状態であり、これがストレス刺激となって生理応答として検出されることが期待される。

一方、目に見えない心理状態や情報処理過程をとらえる指標の一つとして、ERPが挙げられる。ERPは、空間分解能には劣る反面、時間分解能が高く、複数の成分を同時に観察することができること、事象の認知処理における無意識的処理過程と意識的処理過程を視察的に分離できること等、fMRIやPETといった脳機能イメージング研究にはない長所がある。

ERPが認知研究には非常に有用であり、本研究では、運動反応の直前の状態を反映するCNV、その直後の状態を反映するPINV、刺激の認知処理過程を反映するP300およびN400の4成分に注目した。

先行研究より、CNVは競争時にかかるストレス、PINVは競争の結果に対する期待、P300振幅は結果に対する注意配分、P300潜時は競争結果の処理時間、N400は競争の社会的文脈を反映するとの仮説を立て、次章以降においてその検証を行った。

第2章では、競争事態におけるERPの特徴を検討するために、反応時間課題を用い、競争場面を設定してERPの導出を行った。

その結果、CNV、PINV、P300の3つの成分の出現が確認された（図1）。波形の視察、平均電位の比較、内省報告の分析から、競争に勝った時には、CNVの平均電位は反応直前の動機づけや準備状態が良好であったことを反映し、また、PINVの振幅は結果への期待の増加を、P300の振幅は結果への注意配分の増加をそれぞれ反映し、各成分の増大を示す結果を得た。

これらの結果はCNV、PINV、P300が競争事態におけるストレスの指標として、妥当性を有することを示すものであると考えられる。

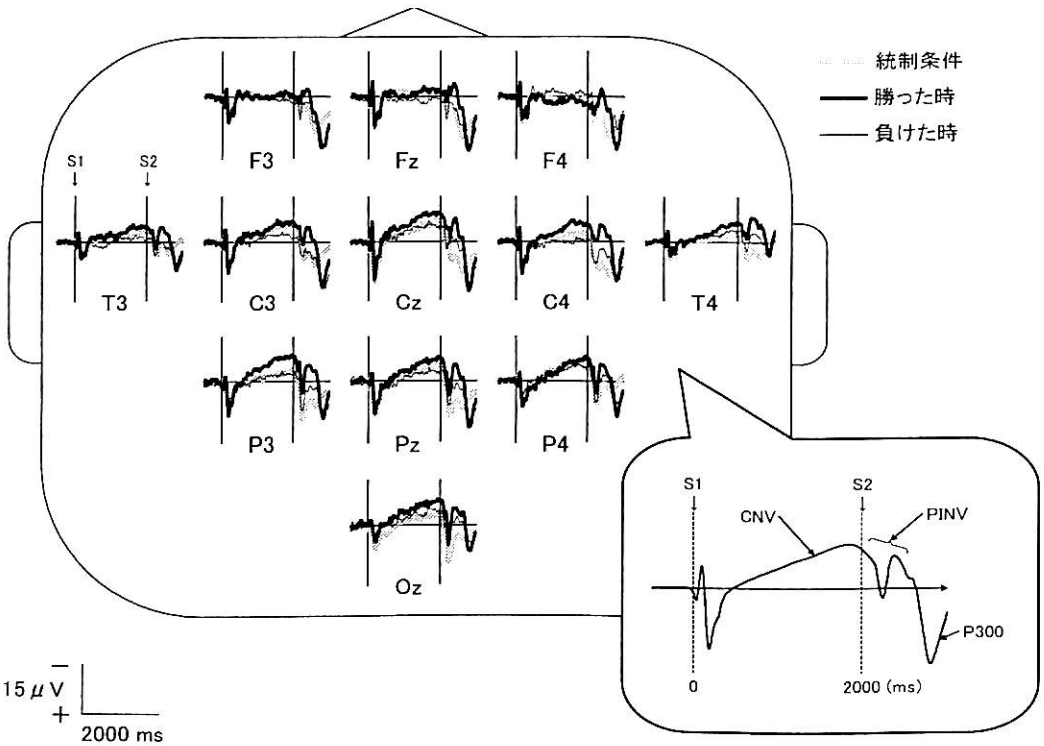


図1 CNV波形

第3章では、競争に対する認知に関わる特性として競争心の高さと、競争時の環境的要因として相手の可視性に注目した。これらの要因が競争時の認知に与える影響を検討するために、第2章と同様の手続きを用いてERPの導出を行った。

競争相手の可視性とは、スポーツのように相手と空間を共有する競争場面と、インターネットを介したテレビゲームのように相手と空間を共有しない競争場面とを想定したものである。競争心の高さは質問紙によって測定された。

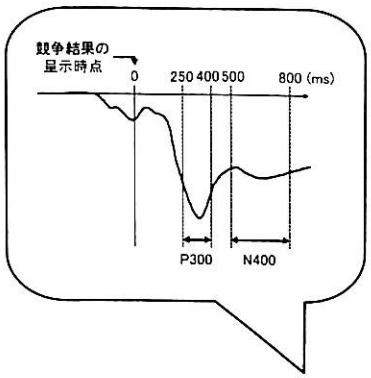
その結果、相手が見える場合は、見えない場合に比べ覚醒水準が上昇し、これを反映してCNVの平均電位およびPINVの振幅が増大することが示唆された。また、競争心の高い人は結果へのこだわりから、提示される結果情報を待つだけでなく、自ら積極的に情報収集し結果を予測するため、注意が分散することを反映して、P300の振幅が競争心の低い人よりも減少することが示唆された。

これらの結果から、CNVの平均電位およ

びPINVの振幅は、競争相手の可視性の違いによる覚醒水準の指標となり、P300 の振幅は、競争心による結果へのこだわりの強さの指標となる可能性が示された。

第4章では、競争の結果に対する認知がその後の活動に大きな影響を与えることから、その処理過程を反映する ERP 成分についての同定を行った。

第3章で得られた結果を基に、競争結果の呈示時点に同期された ERP を算出し、競争結果に関連して出現する P300、N400 を見出した（図2）。



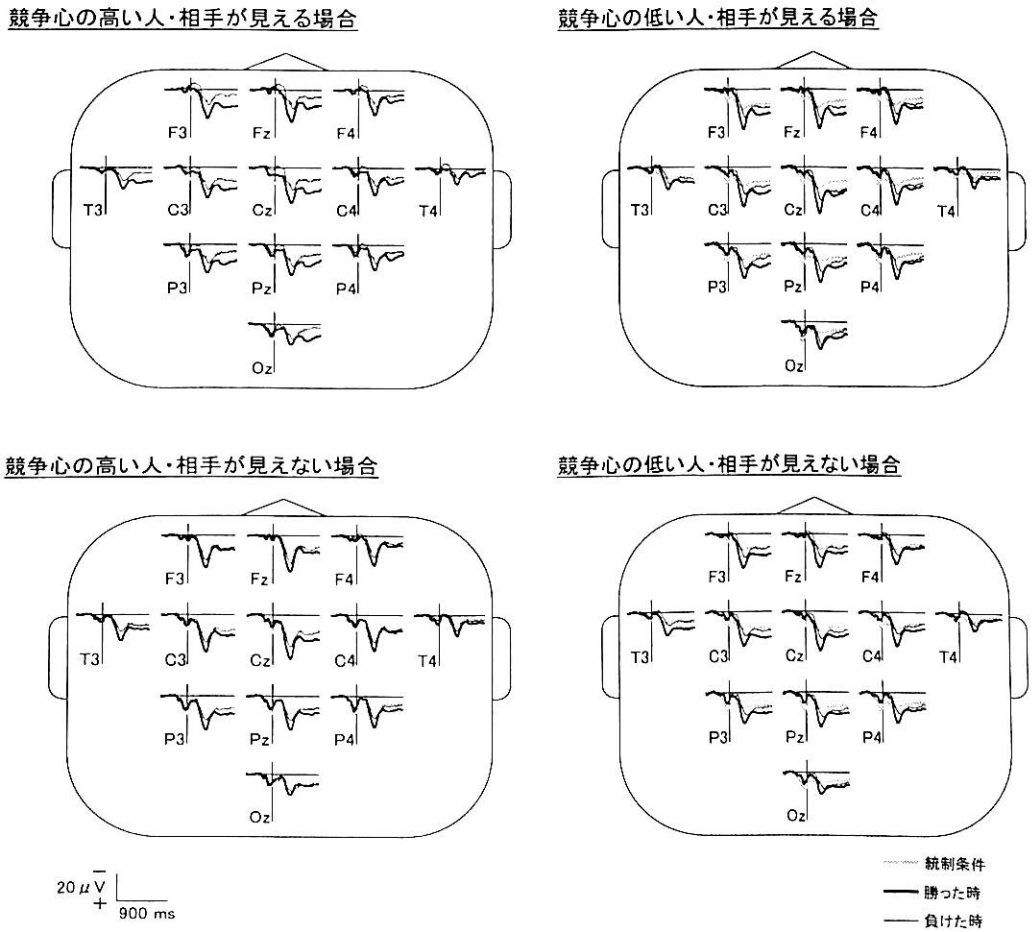


図2 ERP 波形

勝った時には、注意配分の増加を反映してP300 の振幅が増大し潜時が短縮すること、呈示結果への依存度を反映して競争心の低い人がより大きなP300 振幅を示すこと、さらに、競争相手が見えない場合は手がかりが少なく結果の予測が困難であるため、結果に強いこだわりを持つ競争心の高い人のP300 潜時は、処理にかかった時間を反映して勝敗に関係なく一定であること等が示唆された。

また、競争場面では勝つために課題を遂行するという文脈と結果が不一致であること等から、負けた時にはN400 の振幅が増大すること、競争場面における心的努力の大きさを反映して競争心の高い人の方がより大きなN400 の振幅を示すこと、競争心の高さによるERP の違いは競争相手が見える場合に顕著であること等が示唆された。

これらの結果から、P300 振幅は、第3章の結果と同様に、呈示される結果情報に対する注目度や依存度の指標となり、潜時は呈示結果の認知処理に要した時間の指標となる一方、N400 は競争場面における勝つという目的に対する心的努力の指標となる可能性が示された。

第5章では、第2章から第4章までに得られた知見をもとに、総括論議として競争場面における一連の認知処理とERP 各成分の時間的空間的特徴について検討を行った。

ERP からみた競争場面における認知機能の特徴として、CNV、PINV、P300 振幅は勝った時に増大し、P300 潜時は勝った時に短縮したことから、競争に際しては勝つことを目標として課題遂行され、よりよい準備状態・動機づけ状態であった時に競争に勝つことが示唆された。

N400 は負けた時に増大したことから、負けた時には、目標と異なった結果に対する解釈や次の試行のための修正等のフィードバック処理が行われていることが示唆された。

また、CNV、PINV、P300 潜時は、競争相手の可視性といった環境の変化に鋭敏は指標であり、P300 潜時、N400 は競争心の高さといった個人の特性に鋭敏は指標であることが示唆された。これらの結果から、競争といった社会的状況における認知・処理過程を、ERP でとらえることは可能であることが示されたといえる。

以上のように、ERP と主観測度・行動測度に関するモデルを提唱することによって、本研究がSocial Psychophysiology 分野への貢献するものであり、また、バイオフィードバック技法の開発のための基礎的資料となり、臨床的応用性の高いものであることが示唆された。

付記：博士前期課程から本学位論文の作成に至るまで、長年にわたって温かいご指導を賜りました佐久間春夫教授、ならびに貴重なご助言を賜りました先生方、実験にご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

幼児の運動有能感に及ぼすジェンダーの影響に関する研究
―運動有能感を高める幼稚園での保育実践をもとに―

岡澤　哲子（名古屋学芸大学子どもケア学科）
学位：博士（学術）　　授与機関：奈良女子大学
取得日：平成 20 年 3 月 24 日　　指導教員：佐久間春夫教授

本研究は，有能感の認知が内発的動機づけを生じさせ，自律的な行動を促すとする理論的背景を基に，身体を媒介とした有能感である運動有能感を高めることの意義と方略について，幼児期を対象に実証的分析を行った。

第Ⅰ部では，幼児の運動有能感の認知と他律的な行動因としての社会的環境要因であるジェンダーの認知との関係の実態を明らかにした（第 1～4 章）。第Ⅱ部では，ジェンダーの顕現性を弱める保育環境要因の工夫により，性にかかわらず幼児の運動有能感を高めることが可能なことを保育実践をもとに検証した。（第 5～8 章）。

序論では，幼児の運動有能感と運動行動に関する先行研究，および幼児の自己知覚に影響を及ぼす社会的環境要因としてのジェンダーに関する先行研究を総括し，幼児の運動有能感の構造を明確にすること，さらに運動有能感の性差の実態を捉え，保育現場への介入によるジェンダーの影響の顕現性を弱め，性に起因しない運動有能感を高める具体的な援助法の必要性を明らかにし，社会的認知理論を基礎に運動有能感とジェンダーの認知過程を布置連関した理論的枠組みを作成し，本研究で検証すべき概要を明らかにした。

第 1 章では，従来の幼児の運動有能感測定尺度に準拠しながら，幼稚園の運動場面に限定した絵カード式の幼児の運動有能感テストを新しく作成し，因子分析の結果から，幼児の運動有能感の構造を明らかにし，内的整合性による信頼性および再テストによる信頼性，妥当性の高い幼児の運動有能感を測定するための基礎的尺度として有効であることを示した。幼児の運動有能感を構成する第一因子を「運動の受容感」，第二因子を「運動の有能感」とした。

第 2 章では，筆者の作成した絵カード式幼児の運動遊びに対する性度測定による 1993 年と 2005 年の調査結果から，両年においても幼稚園における幼児の身近な運動遊びに対して幼児がジェンダー・ステレオタイプに一致した性度を認知しており，運動遊びといった環境に対してジェンダー・ラベルが変わらず作用していることを見出した。

幼児の運動遊びに対する性度は，一番男の子に似合うと認知されている遊びから一番女の子に似合うと認知されている遊びまでの順序は，「ボールけり」「ボール投げ」「かけっこ」「鉄棒」「なわとび」「表現遊び」であった。

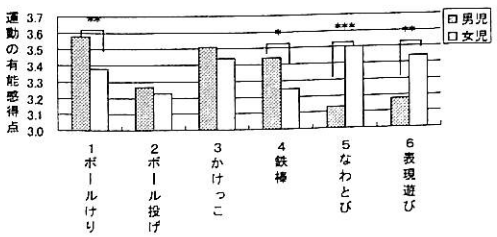
そして，そのような，ジェンダー・ステレオタイプに影響された幼児期における運動遊びに対する性度の認知は，幼児期の遊びの選択だけではなくその後の運動やスポーツへの参加や，種目選択を規定し，そのことによって運動学習経験の違いなどを引き

起こすのではないかと考察した。

第3章では，幼稚園での具体的な行動面に観られるジェンダーの影響をみるために，自由遊び時における遊びの選択を取り上げ，集団的時間標本観察法により検討を行った結果，第2章での結果と同様に，幼児がジェンダー・ラベルに影響された遊びを選択していることを見出した。

第4章では，第1章で作成した尺度を使用して幼児の運動有能感を測定し，男女児ともに第2章での運動遊びの性度に対応した運動遊び，すなわち自分の性に似合うと認知している運動遊びへの運動有能感をより高く認知していることを明らかにした。

その結果を図12に示した。

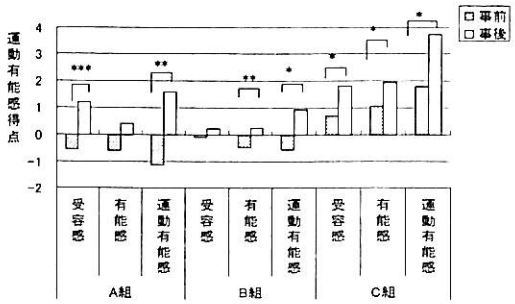


*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

図12　運動の有能感得点

第5章では，幼稚園の保育現場に介入し，教師の言葉がけの中に幼児の運動有能感を高めるフィードバック機能をもつよう変えることが，性とは関係なく幼児の運動有能感を高める結果を得た。具体的には，幼児を励まし，幼児の名前を呼ぶこと，教師が個々の幼児にかかわり，具体的なフィードバックを与えることで幼児の運動有能感を高めた。また，事例分析から，教師と幼児の関係性が運動有能感の高まりに質的差異をもたらし，一人ひとりに応じる教師の受容的な言葉がけがジェンダーの顕現性に関与していることを明らかにした。

図15はクラス別の運動有能感の変化を示したものである。



*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

図15　クラス別運動有能感得点

第6章では，前章での教師の受容的な言葉がけの重要性を受け，教師の態度を，幼児一人ひとりを受容的に捉え，直接幼児に働きかけることを意識化した保育実践として保育日誌を改善し，半年間の観察を行った。その結果，遊びの選択や受容感の認知にはジェンダーの影響がみられたが，教師の受容的な態度が幼児の友達関係に対してモデリングされ，性にかかわらず幼児の運動有能感を高める結果を得た。

第7章では，競争場面のある運動会を挟む保育期間において，幼児の運動有能感を高めるという明確なねらいに教師の態度を変容させることを試みた。保育へのねらいを明確にもった教師の態度は，性にかかわらず幼児の運動有能感を高めること，とりわけ運動有能感が低かった幼児への効果が顕著であるとの結果を得た。

第8章では，保育の人的環境のひとつである友人関係に焦点をおき，運動遊び時に幼児同士の応援時間や応援コーナーを設定し，名

前を呼ぶ，励ます，褒める，拍手をする，ハイタッチをするといった正のフィードバックを運動場面に意識的に取り入れることで，性にかかわらず運動有能感を高めることになるかについて検証を行った。

その結果，友達からの正のフィードバックの有無に関わらず女児の運動有能感が男児より高く，ジェンダーの影響による運動に対する社会からの期待がより大きいと思われる男児の運動有能感を顕著に高める結果は得られなかった。第5章で明らかにされた教師の言語的フィードバックと比較した結果，友達からのフィードバックが幼児の運動有能感の認知に及ぼす影響について明らかにできなかった理由について触れた。

終章では，第1章から第4章までに得られた結果をもとに，幼児の運動有能感に及ぼすジェンダーの影響の実態を明らかにし，第5章から第8章における保育環境要因に介入した実践研究の結果をもとに，保育の環境要因を変えることによりジェンダーの顕現性が弱められ，幼児の運動有能感が高められるkとについて総括討議を行い，考慮すべき保育環境について以下のような提言を行った。

運動遊びへのジェンダー・ラベルが遊び選択と運動有能感に影響を及ぼしているという実態に対しては，幼児一人ひとりに応じた教師の言葉がけや教師という1人の人間としての受容的な態度が，幼児の運動有能感を性にかかわらず高めることに最も寄与する。すなわち，教師という人的保育環境によってジェンダーの顕現性を弱めることが可能であり，また，幼児の運動行動にとって外発的な動機づけと考えられる運動遊びへのジェンダー・ラベルの影響は残ったが，男児または女児という枠の中で幼児を捉えない環境づくりをすることによって，特に運動有能感が低い幼児の遊びの種類や行動様式，および友だち関係を変えることが可能である。そして，保育の長いスパンの中で，運動有能感が高まることで内発的な運動行動をすることを幼児が繰り返して経験することが，ジェンダーという外発的な社会的環境の顕現性を弱めることになる。

本研究のテーマである，幼児の運動有能感とジェンダーの影響に関する残された課題として，①運動有能感の年齢的な変化を検討する研究や縦断的研究等を視野に入れること，②幼児のジェンダーに関して保育における運動以外の領域や幼児に関わる保育以外の分野と連携した実践研究，③運動有能感を高めるためのより望ましい教師の援助方法を検討することの必要性を述べた。

付記：本学位論文の指導教官として、実践と理論をひとつの方向性をもって科学的根拠にもとづいて学位論文としてまとめるようにと温かな励ましと共に最後まで常に冷静なご指導をしていただきました奈良女子大学大学院人間文化研究科の佐久間春夫教授に心より感謝申し上げます。

VI. 海外情報

マックマスター大学における研究生活

石倉　忠夫（同志社大学）

2007年3月28日から2008年3月27日までの一年間、大学から在外研究期間を頂き、カナダ・オンタリオ州ハミルトンにあるマックマスター大学キネシオロジー学部に訪問教授として在籍させていただいた。

ハミルトンはカナダ最大の都市トロントからナイアガラの滝に行く中間地点にあり、オンタリオ湖に面した人口 50 万人の都市である。湖岸に沿ってクイーン・エリザベス・ウェイ（QEW）という高速道路があり、トロントまで車で1時間、ナイアガラの滝まで車で1時間と何かと便利な都市であった。湖岸地域は製鉄工場が建ち並び、かつては日本の商社マンが多く在住していたらしい。また、内陸部は台地が広がり、マウンテンと呼ばれる住宅地域となっていた。オイル・マネーの好景気を象徴するかのように新興住宅街が広がりつつあった。

私はダンダスという大学から徒歩 50 分くらいの所にある閑静な住宅街にある一軒家を借り家族と共に過ごした。大学へはレイル・トレイルと呼ばれる遊歩道を途中まで歩き、春から秋にかけてはインライン・スケートを履いて大学へ通った。トレイルは郊外に張り巡らされており、リスや鹿、ビーバーの巣を観察することのできる自然の宝庫であった。また、近隣の人々は散歩やジョギング、サイクリングを楽しみ、冬には歩くスキーやスノー・シューを楽しんでいた。老若男女問わず、健康のためのスポーツ活動が生活の一部になっている。話には聞いていたがカルチャー・ショックであった。

マックマスター大学キネシオロジー学部において、私は運動学習研究分野で著名な Timothy D. Lee 教授にお世話になり、人間行動研究室の活動に参加させていただけた。Lee 教授は Schmidt 教授と共に Motor Control and Learning の 3ed Edition と 4th Edition (Human Kinetics, 1999, 2005) を執筆されている。運動スキル学習のプロセス、練習スケジュールやフィードバック情報が技能習得へ及ぼす影響、そして個人や環境要因が学習過程に及ぼす影響に関して興味を持たれ、数多くの研究成果を発表されている。近年では、bimanual coordination pattern の学習に注目した研究をテーマに活躍されている。これまで私が興味を持った研究テーマにおいて、Lee 教授の研究論文は必ずと言っていいほどリストにあがり、時には私の研究意欲を駆り立たせてくれる論説も執筆されている。Lee 教授のもとで今後の私の研究の方向性を見出すきっかけをつかみたいという気持ちに加え、数年前に Lee 教授のもとで在外研究期間を過ごされた愛知教育大学の筒井教授と鹿屋体育大学の森教授にお話を伺う機会が得られた。さらに両教授から Lee 教授を学会（NASPSPA）で紹介して頂き、在外研究が実現した次第である。

人間行動研究室には Lee 教授の他、Jim Lyons 教授が在籍しており、知覚と運動制御に関連した研究に携わっている。NASPSPA の元会長で、エキスパート研究

や Manual aiming 研究をされている Jannet Starks 教授は私が研究室に通いだした頃に丁度退職されていた。また、NASPSPA 前会長であり、Manual aiming 研究をはじめ、ダウン症患者の運動制御研究など多くの業績を残しておられる Digby Elliott 教授が在籍されていたが、7 月にイギリスの Liverpool John Moores University に移動された（現在、Starks 教授と Elliott 教授はキネシオロジー学部で集中講義という形で継続して教鞭を執られている)。ポスト・ドクターとして、フェンシングの女子ナショナル・ジュニア・チームのコーチでもある Ranil Sonnadara 博士が在籍し、学部授業や大学院生の研究の相談に精力的に携わっていた（Toronto University に就職)。大学院生は博士課程 4 名、修士課程 4 名、研究助手が 1 名であった。私が滞在していた期間は、教授の半分が研究室を離れるという悪いタイミングであったが、充実した教授陣、そして何よりも研究室の雰囲気が良く、最高の研究教育環境であった。

研究室ミーティングが毎週 1 回開催され、私も参加させていただいた。ミーティングは興味関心を持つ教員・学生であれば誰でも参加が可能であった。そこでは研究の進度、研究室の利用スケジュールの調整など研究教育に関わる話から生活に関する話など多岐にわたり一人ずつ近況を報告し、情報交換を行っていた。近年は運動制御研究の人気が高く、大学院生の殆どが運動制御に関する研究をテーマとしていた。主な研究会や学会としては、大学院生の発表を主体とした South Ontario Psychomotor Behavior Conference が 5 月に、North American Society for the Psychology of Sport and Physical Activity（NASPSPA）が 6 月に、そして 11 月には Canadian Society for Psychomotor Learning and Sport Psychology (SCAPPS) が開催され、研究の発表と情報交換が活発に行われていた。また、学部学生や大学院生の間では理学療法士やリハビリテーションの職に人気があり、学部卒業後にそれらの資格を取得するために専門大学への進学を考えている学生が非常に多いという印象を受けた。

私はこの一年間、私の興味ある研究テーマの有効性と限界について検討するための知見を得るとともに、今後の研究の方向性を探り、その中で帰国後に取り組む研究についての下準備をすることを目的として過ごした。前半は日本から持ってきた研究データをまとめたり、興味関心のある論文を読みあさって過ごした。幸運にもデータの論文化を Lee 博士に協力して頂いている中で共同研究のお誘いを頂き、参加させていただくことになった。思い立ったら即実行、その行動力には驚かされた。研究施設として、6 畳程度の広さの実験室が 5 部屋、30 畳程度の実験室が 1 部屋あり、パーソナルコンピュータに有線の発光ダイオードが直結された動作分析システムが 2 台、刺激提示や測定機器の制御に非常に便利である心理実験用ソフトウエアが導入され、実験実施・データ分析に要する時間的コストを削減した実験環境が整えられていた。

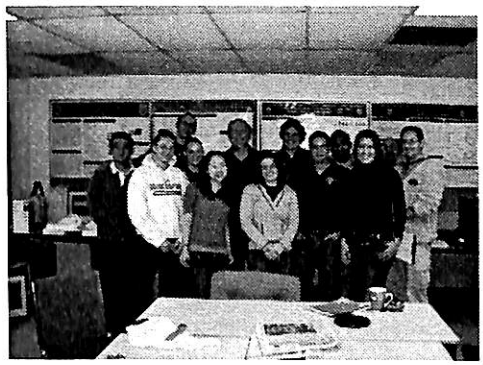
一年の後半では Lee 博士との共同研究が継続された。また、私の研究アイディアを Lee 博士に紹介したところ実験の実施を薦められ、予備的な実験を行うことができた。1 月から Lee 博士が担当する修士課程の論

文講読の授業に参加する機会が得られた。この授業ではキネシオロジーの大学院生以外に健康科学分野の大学院生も受講していた。2時間30分の講義で4名が発表を担当し、Letterサイズ一枚にまとめられた資料を基に議論するという形式であった。取り上げられた論文は、受講生が興味を持つ研究テーマをもとにした、Lee博士が選んだ最新論文であった。議論はリハビリテーションにおける運動技能制御・学習研究の応用など幅広い内容に展開した。

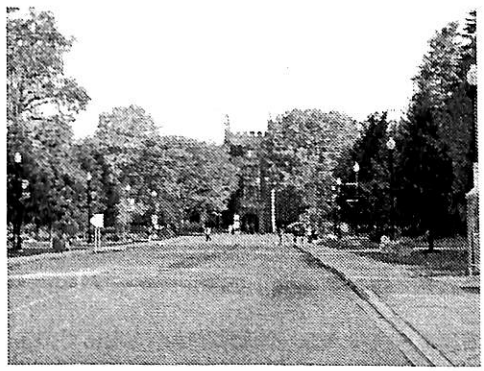
Lee博士は夏にはゴルフ（HC4の腕前、毎週開催される競技会に参加されている）、冬にはアイス・ホッケー（大学教職員と一緒にゲームを楽しんでいる）を楽しんでいる。私の家族全員がアイス・ホッケーを楽しんでいることもあり、「ホッケーを楽しんでいるか？子供は学校を楽しんでいるか？」と家族のことをもよく気遣って下さる心優しい方であった。週末の早朝から始まる子供の練習をわざわざ見に来て頂いたこともあった。

この原稿を執筆している今、帰国して2ヶ月経とうとしている。日本とカナダの大学事情のギャップを自分なりに整理し、カナダでの経験を今後の私の研究教育活動に活かしていきたいと思う。

"Department of Kinesiology, McMaster University"
http://www.mcmaster.ca/kinesiology/index.cfm



研究室の面々（後左から4番目がLee教授、右から2番目がLyons教授、筆者は左）



大学構内のメインストリート

Prince of Wales 医学研究所滞在記

乾　信之（鳴門教育大学）

平成19年度大学教育の国際化推進プログラムに採択されて，オーストラリア，シドニーのランドビックにあるPrince of Wales医学研究所で５ヶ月間勉強することができました。ランドビックは空港と市の中心部の中間に位置し，ガイドブックに学生街と紹介されていましたが，Prince of Wales病院を中心とした街でした。研究所は病院とニューサウスウエールズ大学の間にあり，3つの組織が複合体になっていました。ランドビックは起伏の激しい地形で，ランドビックの交差点から南太平洋の水平線が見え，交差点からクイジービーチまで歩いて20分の距離でした。研究所は155人の研究スタッフ，18人の事務官・技官，35人の大学院生からなっています。

研究所だから当たり前なのでしょうが，活発の一言で，私がお世話になっていたガンディビアは小柄なハイテンションの人で，教授室の床まで論文のコピーを並べ，論文を書いていると思ったら，いつの間にか実験をしているという感じでした。自宅の書斎も同様な様子でした。ガンディビア研究室では准教授格の研究員２人，研究員４人，大学院生５人が運動制御と呼吸の２群に分かれて研究しており，実験は教室員全員が被験者になり合って行われていました。新しい実験のはじめには必ずガンディビア自身が被験者になって実験の微調整を行っていました。

ガンディビア研は私がみただけでも４つの実験が同時進行していました：運動と麻酔が肘と手首のポジショニングに与える影響，皮膚を振動させた時の固有感覚への影響，筋への電気刺激と経頭蓋磁気刺激による運動ニューロンの動態，呼吸時の外肋間筋運動単位の動態。実験の一番の特徴はヒトを対象として様々な方法で末梢からのフィードバックをブロックして，運動指令をみようとしていることです。主要な研究テーマは遠心的コピーの概念に関する消去理論の実験的裏付けを示すことです。

私の研究テーマは小径無髄線維（痛覚，温覚）が麻痺すると，抑制されていた体性感覚野が脱抑制されて身体図式が変化するといわれていますが，大径有髄線維（触覚，固有感覚）が麻痺しても身体図式が変化することを証明することです。実験は右手の指と手首を伸展または屈曲した姿勢で固定し，右手上腕にカフを巻き付けて圧を加え，末梢神経を麻痺させていきます。その過程で触覚，温覚，痛覚の脱落の程度を追跡していきました。同時に，木製の手のモデルによって被験者に手指と手首の関節角度の知覚を再現させ，そのモデルをカメラ撮影し，手指と手首の関節角度の知覚変化を計測しました。次に，カフ圧下の手の大きさの知覚を評価するために，大きさの異なる手の図を用い，被験者

の手の大きさの知覚に一致する図を選択させました。

これら実験から，カフ圧によって大径有髄線維と小径有髄線維が麻痺し，手指と手首の関節角度の知覚はカフ圧前の姿勢に依存して劇的に変化しました。また，これらの両線維の麻痺によって，手の大きさの知覚も変化しました。従来身体図式の変化は痛覚の小径無髄線維の変化に依存しているといわれていたことと異なっていました。

このように身体図式は不変なものではなく，何らかの情報によって簡単に変化します。おそらく，身体図式は常に更新され，運動プログラムは更新された身体図式に基づいて作成されるようです。



Price of Wales 医学研究所の玄関



ガンディビア研究室のスタッフ
私の左がガンディビア教授で，右が１ヶ月だけベルギーから招かれていたデストロイヤー教授.

Ⅶ. 日本体育学会第59回大会案内

早稲田大学

2008年9月9日～9月12日

日本体育学会第59回大会（早稲田大学）の内容

1．プレセミナー

日　時：9月9日（火）16：00～18：00
会　場：8号館B1　101教室
テーマ：体育心理学の知見を体育授業現場にどう活かすか―実践を踏まえて―
演　者：岡澤　祥訓（奈良教育大学）
司　会：鈴木　壯（岐阜大学）
＊詳細はp.95-97を参照

2．キーノートレクチャー1

日　時：9月10日（水）11：00～12：00
会　場：7号館　321教室
テーマ：教員養成系大学における「体育心理学」の講義をめぐって
演　者：杉原　隆（十文字学園女子大学）
司　会：土屋　裕睦（大阪体育大学）
＊発表内容はp.98を参照

3．キーノートレクチャー2

日　時：9月11日（木）13：00～14：00
会　場：7号館　321教室
テーマ：応用実践科学におけるフィールドの持つ意味―運動学習研究より―
演　者：山本　裕二（名古屋大学）
司　会：荒木　雅信（大阪体育大学）
＊発表内容はp.99を参照

4．シンポジウム

日　時：9月11日（木）9：00～11：00
会　場：7号館　321教室
テーマ：体育・スポーツ場面における個人差・パーソナリティ要因に関わる研究の課題
司会・企画：中込　四郎（筑波大学）
演　者：鈴木　聡（東京学芸大学附属世田谷小学校）
小学校体育科授業実践における個人差の捉えと授業づくり
竹之内　隆志（名古屋大学）
スポーツ経験とパーソナリティ発達をめぐる研究の課題
荒井　弘和（大阪人間科学大学）
個人差を大切にした研究の実践：現場で得たデータを実践に活用する
＊詳細はp.100-102を参照

5．口頭発表

日　時：9月12日（金）9：00～10：40
会　場：10号館　407、408教室

（教室1）
座　長：津田　忠雄（近畿大学）、橋本　公雄（九州大学）
演　者：橋本　公雄（九州大学）
　ポジティブ特性へのスポーツドラマチック体験の規定力
古田　久（埼玉大学）
　大学生を対象とした運動不振尺度の開発―妥当性と信頼性の検討―
渋倉　崇行（県立新潟女子短期大学）
　高校運動部員に対するストレスマネジメントプログラムの実施と
　その評価
津田　忠雄（近畿大学）
　コミュニケーションとしての＜からだ＞―身心の揺れと共振について―
小谷　克彦（埼玉大学）
　運動部活動場面での葛藤対処に伴う指導者の情緒的体験

（教室2）
座　長：山本　裕二（名古屋大学）、杉山　佳生（九州大学）
演　者：杉山　佳生（九州大学）
　小学校の体育授業を通してライフスキルを獲得・向上させる試み
乾　信之（鳴門教育大学）
　手指の力の適応制御における遠心性コピーの役割
山本　裕二（名古屋大学）
　ソフトテニス・シングルスゲームにおけるダイナミクス
　－対人間協応の観点から－
藤井　進也（京都大学大学院）
　世界最速ドラマーはどれくらいすばやく叩けるか？

6．ポスター発表

日　時：9月10日（水）8：50～10：50
会　場：8号館B1　ロビー
発表者：長岡　由紀子（浜松大学）
　体育学における心身関連の研究にみる研究法について
炭谷　将史（聖泉大学）
　嗅覚刺激が脳波に与える影響に関する実験的研究（4）
　－α波F0比を指標とした検討－
高井　秀明（日本体育大学大学院）
　心拍バイオフィードバックがアーチェリー競技のパフォーマンスに
　及ぼす影響（3）
　―心拍音を手がかりとした発射タイミングの統制から―
池田　早耶香（滋賀大学大学院）
　サプリメント（還元型CoQ10）が感性を中心とした心理的要素に与える
　影響

菅生　貴之（大阪体育大学）
競技者におけるストレス課題・リラクセーション法実施時の
心理的変化と心・血管系自律神経機能および免疫機能の関連について
野田　さとみ（名古屋女子大学短期大学部）
手指の運動を伴うあそびにおける生理心理的変化について（4）
服部　明子（大阪青山短期大学）
若者の身体存在の実感を高めるムーブメント・ワークの有効性の検討
酒井　美帆（奈良県立畝傍高等学校）
脳波から見た課題の違いによる集中時の様相について3
近藤　正子（大阪リゾート＆スポーツ専門学校）
背景脳波の変動パターンからみたストレッチングワークの
リラクセーション効果（2）
松山　友哉（大阪体育大学大学院）
投動作における随意筋収縮と運動関連脳電位の関係
松本　清（奈良女子大学大学院）
競争事態における事象関連電位（CNV）の主成分分析
竹内　高行（中京大学大学院）
野球の打撃時における視覚的手掛かりについて
東山　明子（畿央大学）
毛様体筋・眼筋調節機能向上トレーニングの注意集中効果
山陰　繁恵（畿央大学大学院）
足底刺激環境の違いによる前額皮上電位の検討
兄井　彰（福岡教育大学）
重さの筋運動感覚残効が砲丸投げの運動パフォーマンスに及ぼす効果
續木　智彦（日本体育大学）
サッカーペナルティーキック時のコース予測能力と心理的スキルの関係
本多　芙美子（九州大学大学院）
スクーバ・ダイビングにおける期待と快適感情のメカニズムの検討
品治　恵子（奈良女子大学大学院）
球技における状況判断能力の構成要因について
永山　貴洋（東北大学）
動作のコツ習得に必要な選手の知的協力はどのようにして
喚起されるのか
伊藤　彩（日本体育大学）
暗示者の相違が暗示呼吸の主観的評価に及ぼす影響
横山　慶子（名古屋大学大学院）
ダイナミカルシステムとしてのボールゲーム
－異なるレベルに共通の法則－
上野　朋子（順天堂大学）
ランニングAddictionと主観的健康状態に関する研究
田島　誠（川崎医療福祉大学）
ダンスの振り付けに対するビデオモデルの提示スケジュールの影響

川田　裕次郎（順天堂大学大学院）
学生陸上競技選手の目標志向性と有能さの認知が達成動機に及ぼす影響
―競技レベルに着目して―
水野　基樹（順天堂大学）
プロスポーツ選手のキャリアトランジションに関する研究（Ⅰ）
―分析枠組みとしての役割卒業モデルに対するキャリア・アンカー概念の援用―
飯田　玲依（順天堂大学大学院）
プロスポーツ選手のキャリアに関する研究（Ⅰ）－分析枠組みとしての役割卒業モデルに対するキャリア・アンカー概念の援用－
北山　八与（日本大学大学院）
コーチの言動や行動によって選手はどのように動機づけられるのか
重藤　誠市郎（東海大学）
大学スポーツ選手の自己愛傾向と他者意識
滝　省治（甲子園大学）
体育実技履修者の精神健康度評価
－UK 検査からみた単位取得者と不合格者－
井上　則子（津田塾大学）
PAC 分析による「個」の運動学習過程
中村　剛（武蔵野大学）
一般大学生のストレスに運動が及ぼす影響①
暖　素代（奈良女子大学大学院）
女子大学生の健康行動と主観的健康統制感との関係
内田　友幸（日本大学大学院）
大学生体操競技選手におけるスポーツ傷害発生に関わる心理社会的要因
安田　貢（山梨大学）
運動継続に影響を及ぼすソーシャルサポートと競技ストレッサーに関する研究
野崎　真代（日本大学）
ジュニアスポーツ選手におけるソーシャルサポートが社会的スキルに及ぼす影響
下川　浩一（山梨大学大学院）
バレーボールにおける集団規範に関する研究　第 2 報
～台湾大学運動部の実態～
猪崎　弥生（お茶の水女子大学）
バレエと日本舞踊における手による感情表現
－舞踊運動評価尺度を用いた認知実験－
武藤　力也（東海大学大学院）
少年柔道指導者の指導のあり方―コミュニケーション能力、動機づけの方法、コーチング能力に基づく分析―
西田　順一（群馬大学）
大学新入生における身体活動とコミュニケーションスキルとの関係

平山　浩輔（日本体育大学大学院）
高校年代におけるサッカー指導者の勢力が選手のライフスキルに及ぼす影響

徐　揚（東海大学大学院）
中国と日本のメディアスポーツ比較
－テレビ放送・新聞報道資料による分析－

内田　遼介（大阪体育大学大学院）
競技スポーツ集団の動機づけを規定する要因
－自由記述質問紙を用いた探索的検討－

袴田　敦士（山梨大学大学院）
バレーボールにおけるタッチング行動に関する研究

田中　純夫（順天堂大学）
中学校における身体活動を取り入れたピアサポートプログラムのシステム構築

齊藤　茂（松本大学）
高齢者の運動継続に焦点を当てた専心性（コミットメント）形成過程の質的分析

石原　瑞子（大阪体育大学大学院）
ゴルファーはゴルフをどのように体験するのか
―アマチュアゴルファーの分析―

山本　真己（順天堂大学大学院）
大学生アスリートにおける攻撃性に関連するパーソナリティ要因
－H.Kohutの自己愛モデルを援用して－

船橋　孝恵（名古屋大学）
身体障害児における対象操作行動の出現過程

五十嵐　辰也（順天堂大学大学院）
高校運動部員の道徳判断と青年期における親からの独立及び重要な他者への信頼感との関連について

朝西　知徳（米子松蔭高等学校）
高校野球における特待生と非特待生の競技成績についての比較

伊達　萬里子（武庫川女子大学）
スポーツ傷害が心身に及ぼす影響

井上　真実（順天堂大学大学院）
スポーツNPOスタッフの組織コミットメントに関する研究
―ミッションの受容を中心的視座に据えて―

山田　真行（順天堂大学）
運動選手の劣等感と達成動機との関連

鈴木　悠介（日本体育大学大学院）
投手における投球前の呼吸操作が気分、コントロールに及ぼす影響

北見　好（日本体育大学大学院）
暗示語の基礎的研究（２）

土屋　裕睦（大阪体育大学）
大学生アスリートが求める心理的サポート・プログラム（2）
－大学新入部員がプロスポーツ選手になるまで－
佐々木　史之（日本体育大学）
暗示放尿が気分・感情に及ぼす影響
橋口　泰一（日本大学）
障害のあるスポーツ選手を対象とした心理的サポートのニーズ
および心理的問題の基礎的研究
奥村　基生（東海学園大学）
剣道競技の熟達水準による失敗回避法の相違
布施　洋（山梨大学大学院）
バレーボールの試合中に指導者が受けるストレスの実態に関する
事例的分析～心拍数に着目して～
李　佳（東海大学大学院）
大学生アスリートの競技価値観に関する日中比較
原　妃斗美（鳴門教育大学大学院）
高校女子バレーボール部員に対する心理サポートの効果
西出　一裕（大阪体育大学大学院）
投手のためのパフォーマンスルーティン獲得を目指した
メンタルトレーニングの実践事例
林　晋子（大阪体育大学大学院）
女子ホッケー選手におけるスランプの認知に関する探索的研究
加藤　真利江（日本大学大学院）
バレーボール選手の競技中におけるコミュニケーションについて
山﨑　将幸（九州大学大学院）
自己の試合映像の視聴が心理的およびパフォーマンス側面に与える効果
－映像によるパフォーマンス向上のメカニズム検討－
奥野　真由（大阪体育大学大学院）
思考パターンの修正を目指した認知療法的アプローチ
―大学陸上競技者のストレス低減のために―

7．総会

日　時：9月11日（木）11：00～12：00
会　場：7号館　321教室

8．理事会

日　時：9月10日（水）12：10～13：00
会　場：10号館　202教室

日本体育学会体育心理学専門分科会・プレセミナー

1．日　時：９月９日(火)　16時～18時
2．会　場：早稲田大学西早稲田キャンパス８号館Ｂ１　101教室
3．テーマ：体育心理学の知見を体育授業現場にどう活かすか―実践を踏まえて―
4．演　者：岡澤　祥訓（奈良教育大学）
5．司　会：鈴木　壯（岐阜大学）
6．企画趣旨：　体育心理学専門分科会企画委員会
石井　源信、伊藤　政展、鈴木　壯

体育・スポーツに関連する学会等において、心理学に関わる学会発表や研究等はスポーツ心理学に関連する事項が多く、体育心理学に関わるテーマはそれほど多いわけではないように思われる。しかし、体育心理学は体育を考える時に重要な知見を示してくれるものであり、もう少し多くの関心が持たれても良いと思われる。実際の体育の授業では、心理学の知見の適用・応用はかなりの部分を占めているからである。今回のプレセミナーはそういったことが背景にあって企画している。演者はまさのそのテーマを実践されている先生である。体育心理学専門分科会のみならず、他の分科会の会員にも参加していただきたいと思っている。

プレセミナー発表抄録

体育心理学の知見を授業にどのように活かすか
-実践をふまえて—

岡澤　祥訓（奈良教育大学）

Ⅰ．実践から学ぶ意義

体育心理学のほとんどの研究成果は体育授業で活かすことが可能なはずである．なぜなら体育心理学の研究は運動やスポーツの指導場面に必要な知識を生産するために行われているからである．しかし，多くの指導者は体育心理学の研究の成果を享受していると感じていないであろう．原因はほとんどの研究が指導現場で行われたものではなく，実験室での研究や調査研究が中心であり，指導のどのような場面で，生産された知識が役立つのかが分かりにくいからである．私の現在の職場は奈良教育大学の体育科教育研究室である．もともと体育心理学の研究室で学んできたので，体育心理学をベースにした体育科教育学を模索してきた．換言すれば体育心理学研究の成果をどのように体育授業に活かすのかを探求してきた．最初は，体育授業中の生徒の行動（ALT-PE）や教師行動（教授技術）の分析を行った．この行動分析を通して，体育授業中に生徒や教師が何をしているのか，何が問題であるのかが見えてきた．生徒が進んで課題にチャレンジすること，クラスの雰囲気を明るく積極的にすること，授業時間を有効に使うことなどの教授技術の内容が明らかにできた．

体育心理学研究の知見を体育授業に活かすためには，体育授業の問題を解決するために役立つことが必要である．そのためには二つの方法がある．一つは，教師がその問題を解決するために体育心理学のどの領域の研究が参考になるのかを判断できるようになることであり，教師教育に関わる学校の体育，スポーツ心理学の講義内容を十分検討する必要がある．研究者は体育授業で何が問題であるのかを理解した上で，授業で活かすことが可能な知識を生産することが必要である．そのためには教育現場に出向き，教師に声を聞くこと，できれば，共同研究が有効である．このとき体育授業の場で実践研究が行われることも有効であると考えられる．

奈良体育授業研究会では，現場教師と大学の研究室が協力して実践研究を行ってきた．ここではここ十数年行ってきた運動有能感を高める授業研究の一部を紹介し，討議の材料を提供する．

Ⅱ．生涯体育・スポーツの実践者（運動に内発的に動機づけられた児童生徒）を育成する体育授業を求めて

我々は，運動が上手にできるという自信である「身体的有能さの認知」，努力すれば，練習すればできるようになるという自信である「統制感」，指導者や仲間から受け入れられているという自信である「受容感」の運動有能感の三つの側面を高めるために，教

材，教師行動，評価の三点から工夫を行い，その有効性に授業実践をとおして検討を加えてきた．

1．教材の工夫に関して

1）個人スポーツの集団ゲーム化

2）ボールゲームのルールを変更する方法

2．教師行動の工夫に関して

叱責や罰ばかりを与える教師のもとで学習している児童・生徒の努力は，認められることはなく，運動有能感を高めることはできないであろう．反対に児童・生徒を誉め，努力を認めるような教師の肯定的な働きかけは，運動有能感を高めることになる．原因帰属理論からも有効な関わり方が明らかにされている．

3．評価，目標設定に関して

評価の方法や「めあての設定」は運動有能感に大きな影響を与える．相対評価から絶対評価に．しかしそれだけで，問題が解決するのであろうか．運動有能感を高めるための自己評価に関して体育授業での取り組みを紹介したい．また，「めあての設定」に関する実践研究も紹介する．

4．その他の授業実践

社会性を高める体育授業，ピアーサポートの体育授業実践などの工夫を取り入れた体育授業実践を紹介する．

以上のように体育授業実践を行うにあたって，体育心理学の研究成果をもとに検討を加え，演繹的に体育授業をつくり，その結果から体育授業のあり方を求めてきた．しかし，研究計画法からみると，統制群がないなどの問題点があり，原因と結果の関係が不鮮明になってしまっている．体育科教育の授業実践研究で統制クラスの授業をどのように考えるのかは議論する必要があるが，解決できないわけではなかったと思う．体育授業実践研究によって生産された知識がもっと受け入れられるようにするために，どのような努力が必要なのかを議論したいと思う．勿論それを提案できるわけでも，答えをもっているわけでもない．

キーノートレクチャー１

教員養成系大学における「体育心理学」の講義をめぐって

１．日　時：９月１０日(水)　11:00　～12:00
２．会　場：７－３２１
３．演　者：杉原　隆（十文字学園女子大学）
４．司　会：土屋　裕睦（大阪体育大学）
５．講演要旨：

教員養成大学での約四半世紀にわたる「体育心理学」の講義で最も重視してきたことは、学問的な成果とそれらから構築された理論を実践に結びつけるかたちで授業を展開するための講義内容をどう構成すればよいかということであった。

体育心理学に含まれる多くの領域を総花的に取り上げたのでは、領域個別的で表面的な知識の脈絡のない提供に終わってしまう。講義内容全体に一貫した筋を通して体系的な知識を提供し、実践に結びつくようにしたいと常に考えてきた。

学校体育の目的はすべて、運動の学習活動を通して達成される。運動の学習活動なしに体育は成立しえない。その意味で体育心理学の中核は運動学習である。運動学習の前提基盤となるのは動機づけであり、また、児童生徒の運動に対する動機づけを高めることは、体育の最も重要な目的であるとされている。さらに、運動学習によって充足される動機づけは、体育の重要な目的である人格形成とも密接に関係している。そこで運動学習、動機づけ、人格形成に関する知識を相互に関連づけ一貫した体系の下に体育心理学の講義を行うのがよいと考えた。そのためのテキストとして執筆したのが「運動指導の心理学」（大修館書店 2003）である。

キーノートレクチャー２

応用実践科学におけるフィールドの持つ意味―運動学習研究より―

１．日　時：９月１１日(木)　13:00　～　14:00
２．会　場：７－３２１
３．演　者：山本　裕二（名古屋大学）
４．司　会：荒木　雅信（大阪体育大学）
５．講演要旨：

自身の競技体験を契機として身体運動に関する研究を始めて以来、20 年近く毎年何百人もの学生に運動指導を行ってきた。その中で自身の立ち位置はゆれ動きながらもある安定点に行きつつあるように思える。ここでは運動学習研究を通して、身体運動科学という応用実践科学におけるフィールドの持つ意味を考える。

私にとってのフィールドあるいは実践の場は、理論探索の場でもある。実践の場においては、生じるあらゆる問題に対して何らかの解の導出を余儀なくされるが、自ら出した解の出自を問う時、そこに理論が立ち現れる。実践の場での解の導出には運動指導、運動学習、運動制御の理論が重層的にかかわるために、これらの理論検証が必要となるが、現存する理論の組み合わせでは理解できないことの方が多い。したがって、実践の場で立ち現れた理論を自らが実験的に検証し、再度実践の場へ還元し、実践の場で検証を試みる。この円環の中でゆらぎながらも安定点に行き着くように感じる。行き着くと言うのは、あらかじめ到達点が明確になっているわけではないと言うことである。長い時間をかけてこの円環を繰り返していく中で、ベクトル場に導かれながら行き着くのである。私は、解が一意に決まらないベクトル場（フィールド）に身を置くことによって、最適解を探索し続ける。

シンポジウム

体育・スポーツ場面における個人差・パーソナリティ要因に関わる研究の課題

1．日　時：9月11日(木)　9:00　～　11:00

2．会　場：7－321

3．司会・企画：中込四郎（筑波大学）

4．演　者：鈴木　聡（東京学芸大学附属世田谷小学校）

竹之内　隆志（名古屋大学）

荒井　弘和（大阪人間科学大学）

5．企画主旨：

心理学を「個人差」（個体間・個体内差）への配慮・注目から出発した学問であると捉えている。しかしながら、客観性や普遍性を強く志向するに従って、直接個人差を扱うことが少なくなり、その代わり、収集した多数のデータに精緻な推測統計（有意差検定）を施し、間接的に個人差を扱うようになってきたように思われる。必然的に、個人差要因を組み込んだ研究計画が少なくなった。また、個人差変数・要因として真っ先に思い浮かぶのがパーソナリティであるが、体育心理学の中でパーソナリティ研究も激減した。伝統的なテーマとも言える、「スポーツとパーソナリティ形成」においても、個人差の視点を強く意識していれば自ずと対象者らの体験内容に迫ることになろう。パーソナリティ研究と個人差変数を扱った研究が下火となった背景はどこかで繋がっているにちがいない。そして、現場から遊離した研究との批判には、個別事象への関わりが薄くなったことも一部起因しているのかもしれない。

本シンポジウムは、減少傾向にある個人差やパーソナリティ研究を再考し、今後の研究課題探しに繋げたいとの思いから企画された。関連研究の激変を周囲からの要請が少なくなったからと早急に受けとめず、まず身近から発掘していく試みも必要ではないかと思う。それによって、これまで扱われてきた研究事象や成果に対して、新たな見方が加えられるのかもしれない。3名の演者からはそれぞれの研究フィールドで個人差やパーソナリティ要因にどのように関わっているのか具体例を提示いただき、フロアーとの間で標記のテーマについて討議を深めたい。

小学校体育科授業実践における個人差の捉えと授業づくり

鈴木　聡（東京学芸大学附属世田谷小学校）

小学校に限らず、学校教育における体育科授業の場において、「個人差」という現状は大きな問題関心である。それは、選択制や技能別に行われる授業を除く多くの実践において、運動経験や運動技能、さらには「体育が好きか嫌いか」という情意面に至るまで、実に多様な「個」が学習集団を形成しているためである。小学校においては、ほとんどの場合男女教習で行われるため、そこには、「性差」という側面も常に存在している。

体育科の授業フィールドにおいては、個人差が存在することは当然の状況であり、むしろ個人差があるからこそ集団で学ぶ価値があるという見方ができる。近年体育科教育において注目されている「学習内容の明確化」という課題を考えたとき、それが技能習熟や関わり合いの形成、器械運動領域の分析学習やボール運動領域の戦術学習のいずれであっても、成功裡な学習のために個人差の存在が前提に立つ「異質な個で形成される小集団」におけるグループ学習という学習形態が効果的であるという研究報告が多い現状を見ても明らかであろう。

本シンポジウムでは、以上のような現状の中で実践している一人として、授業における個人差の現状や問題を生かした学習をいかにしてつくっているのかという事例を紹介してみたい。さらには、スポーツ心理学におけるパーソナリティ研究の成果を授業実践により一層生かしていける可能性を、参加される先生方とともに探っていきたい。

スポーツ経験とパーソナリティ発達をめぐる研究の課題

竹之内　隆志（名古屋大学）

スポーツにおけるパーソナリティ研究にはいくつかの観点があるが、演者はこれまでスポーツ経験がパーソナリティ発達に及ぼす影響について検討してきた。この種の研究では、スポーツ経験を独立変数とし、パーソナリティを従属変数とするので、パーソナリティよりもスポーツ経験の内容や質の違いの方に重きが置かれる。つまり、本シンポジウムのテーマは個人差であるが、演者が着目したい個人差とは、パーソナリティという個人差ではなく、各自のスポーツ経験の質的な差の方であり、そうした立場からの話題提供となる。

さて、スポーツ経験とパーソナリティ発達の関連は伝統的なテーマであるが、一定の結論に収束することなく近年研究が減少した。その理由としては研究方法論上の問題が指摘されており、スポーツ経験の質を詳細に概念化すること、スポーツによって変容が期待されるパーソナリティ変数を選択すること、変容のメカニズムを説明する理論を援用するこ

と、などが必要と言われてきた。このような点を考慮して、演者はスポーツ経験による自己概念の変容や自我発達について検討してきた、そこで本シンポジウムでは，これらの研究や先行研究を概観しながらスポーツ経験とパーソナリティ発達についての今後の研究課題を考えたい。また、スポーツ経験がパーソナリティ発達に及ぼす影響にも個人差があるが、そうした個人差が生じる背景についても各自のスポーツ経験の質的差異という点から考えたい。

個人差を大切にした研究の実践：現場で得たデータを実践に活用する

荒井　弘和（大阪人間科学大学）

「個人差は大切にされるべきである」という意見に、異論を差し挟む者はいないであろう。実践においては、個人差を無視することはできないためである。しかし、実践に役立たせるために行われるはずの研究において、個人差を重視することは少ないと感じられる。もちろん、この現状は、個人差を重視することを否定しているわけではない。研究では「個人差を重視するべきである」または「重視するべきでない」という議論は不毛であり、どちらの立場で行われた研究も、実践に貢献できるはずである。おそらく、個人差を積極的に扱わない研究が目指すべきなのは、多様な現場において実践の拠り所となる「指針」を示すことであり、個人差を積極的に扱う研究が目指すべきなのは、具体的で生き生きとした「事例」を示すことなのであろう。

現在の体育心理学研究に鑑みた時、個人差を扱わない研究に偏重しているため、個人差を積極的に扱った研究がより行われるべきなのかもしれない。そこで、以下の 3 点について話題提供を行う。まず、個人差を積極的に扱った具体的な研究事例を紹介する。次に、個人差を積極的に扱うことのできる研究方法を取り上げる。最後に、対象者の行動を観察して記録すること、現場で得られたデータを元に介入を行うことなどについて、シンポジウム参加者の先生方と議論したい。本シンポジウムが、体育心理学研究において、個人差を扱うことに関する指針を導くためのステップになればと考えている。

Ⅷ. 事務局報告

平成１９年度事業報告（平成１８年総会～平成１９年総会）

日本体育学会第５８回大会関連（於：神戸大学六甲台キャンパス）

１．キーノートレクチャー１

日　時　　９月６日（木）　13：00～14：00
会　場　　Ｂ棟 110 号教室
題　名　　体の動きが心を作る　―身体心理学という観点から―
演　者　　春木　豊（早稲田大学名誉教授）
司　会　　吉川政夫（東海大学）

２．キーノートレクチャー２

日　時　　９月７日（金）　10：00～11：00
会　場　　Ｂ棟 110 号教室
題　名　　スポーツオノマトペの情報伝達機能が運動パフォーマンスに及ぼす影響
演　者　　藤野良孝（メディア教育開発センター研究開発部）
司　会　　谷口幸一（東海大学）

３．シンポジウム

日　時　　９月５日（水）　9：00～11：00
会　場　　Ｂ棟 110 号教室
テーマ　　モチベーションを高める指導法
司　会　　高妻容一（東海大学）
演　者　　西貝雅裕（太成学院大学中学・高等学校）
　　中学生、高校生の生徒や選手に対する指導
　　原田隆史（原田総合教育研究所所長・天理大学非常勤講師）
　　教師・指導者・ビジネスマンに対する指導
　　菅生貴之（大阪体育大学・前国立スポーツ科学センター研究員）
　　オリンピック選手などトップレベル競技者に対する指導

４．一般研究発表

口頭発表　　（Ｂ210 教室）
ポスター発表（武道館）
日時　　平成１９年９月５日（水）～９月６日（木）
発表数　　89 題（口頭発表 6 題、ポスター発表 83 題）

５．理事会　　９月６日(木)　12：10～13：00　　Ｂ４０１教室

６．総　会　　９月７日(金)　11：00～12：00　　Ｂ２１０教室

平成１９年度体育心理学専門分科会総会議事録

日時　：　平成１９年９月７日（金）　１１時～１２時
会場　：　Ｂ棟２１０教室

１．開会の辞

谷口理事より総会を開催する旨の開会の辞があった。

２．会長挨拶

猪俣公宏会長より、以下の挨拶がなされた。

体育心理学専門分科会は研究発表数が多く活発な活動をしている。研究活動に関しては、研究の積み重ねに対する認識、体育心理学のルーツなどの歴史的な背景に注目することが必要である。実験心理学のヴントの流れ、心理学の流れ、スポーツ・運動学の流れから体育心理学を考えること、身体的なものだけでなく心理的なアプローチが必要という考え方に立って運動・スポーツ・体育に取り組まなければならない。ドイツの影響を受けた日本の体育心理学の発足は1928年であり、国際的に見ても早い。米国やロシアは1925年であり、日本の体育心理学は早い時期からスタートしている。このような背景に関する認識を踏まえて、体育心理学専門分科会においては体育、運動、スポーツの研究に関して学際的な発展をさせていきたい。

２年間という限られた時間ではあるが、前向きに進めていきたいと考えているので、ご協力をお願いしたい。

３．議長選出

総会議長に高見　和至氏（神戸大学）を選出し議事に入った。

４．報告事項

１）平成19年度事業報告について

吉川理事長より、資料を用いて以下の報告があった。

（1）役員（理事長、事務局担当理事、監事）選出結果および理事会内の委員会構成について

体育心理学専門分科会の役員及び委員会構成（敬称略）
任　期：平成19年4月1日～平成21年3月31日
会　長：猪俣　公宏
理事長：吉川　政夫
理　事：学会大会委員会（○中込　四郎，荒木　雅信，土屋　裕睦）

企画委員会（○石井　源信，伊藤　政展，鈴木　壮）
広報委員会（○吉田　茂，佐久間　春夫，竹中　晃二）
庶務・会計委員会（○谷口　幸一，高妻　容一）　　○：委員長
監　事：栗木　一博，高見　和至
幹　事：松本　秀夫

（2）日本体育学会第58回大会（神戸大学）における専門分科会活動について

一般研究発表（口頭6題・ポスター83題の計89題）、オーガナイズドセッション、キーノートレクチャー1、2、シンポジウム、理事会、総会が開催された。

学会全体では、654 演題の発表件数があり、体育心理学専門分科会の発表件数は今年の学会全体の13.6%を占めていた。春木先生のキーノートレクチャー1の参加者は１６０名、藤野先生のキーノートレクチャー2の参加者は５０名で会った。シンポジウムは、「モチベーションを高める指導法」というタイトルで、１２５名の参加者があった。

（3）体育心理学専門分科会会報第１９号（通巻第４６号）の発行について

会報発行が遅れていることに関する報告とお詫びがあった。

（4）その他

分科会の会員数は２００７年8月１６日現在、６５２名である。その内、新入会員は３４名である。分科会の日本体育学会会員構成比率は9％である。最も会員数が多い分科会は体育方法で１３０６名、１８％、次いで運動生理学１１２１名、１５．５％、バイオメカにクス８５４名、１１．８％、体育科教育学７２７名、１０．１％である。体育心理学の会員数は5番目である。

2）理事会の開催について

吉川理事長から平成１９年9月6日に理事会が開催されたことが報告された。

3）その他

（1）名誉会員の推薦に関して、兵頭　寛先生が候補者であったが、辞退されたため、専門分科会からの推薦は行わなかった。

（2）日本体育学会の会員数（平成１９年7月２５日現在）は正会員５，９０２名である。平成１８年度の6，０６６名から１６４名減である。

（3）平成１９年度より、日本体育学会の年会費が8，０００円から１０，０００円に値上げされた。

（4）体育学研究編集委員会（平成１９年度・２０年度）の副委員長に徳永　幹雄氏（第一福祉大学）、編集委員に石井　源信氏（東工大）が就任された。

（4）平成１９年度・２０年度の学会の会計委員会の委員に佐久間　春夫氏（奈良女子大学）が就任された。

5．審議事項

1）平成１９年度決算について

吉川理事長より、資料１(巻末に掲載)に基づき平成１９年度決算報告がなされた。決算報告に関して栗木監事より監査報告があり、承認された。

なお、橋本　公雄氏より、決算の期日について質問があった。昨年の大会から今年の大会前までが決算の期日であるとの回答が吉川理事長からあった。

2）平成２０年度事業計画について

吉川理事長から以下の提案と説明がなされ、承認された。

（1）日本体育学会第59大会における専門分科会活動の企画運営について（学会大会委員会）

・早稲田大学にて開催（平成２０年9月９日～１２日の４日間）

・一般研究発表（口頭・ポスター）、シンポジウム、キーノートレクチャー１・２、理事会、総会を開催する。

（2）プレセミナーの開催について(企画委員会)

学会会員の中から人選し、魅力あるテーマでプレセミナーを企画したい。

（3）体育心理学専門分科会会報第１９号(通巻第４７号)及び第２０号(通巻第４８号)の発行について(広報委員会、事務局)

第１９号を速やかに発行したい。第２０号については平成２０年７月に発行予定である。

3）平成20年度予算案について

吉川理事長より、資料２(巻末に掲載)に基づき平成２０年度予算案の提案があり、審議の結果、承認された。

4）その他

特になし

6．議長退席

議長より総会終了が宣言された。

7．閉会の辞

谷口理事より、閉会が宣言された。

平成１９年度体育心理学専門分科会理事会議事録

日　時：　平成１９年９月６日（木）　１２時１０分～１２時５０分

場　所：　神戸大学　Ｂ４０１号室

出席者　猪俣　公宏(会長)、吉田　茂、伊藤　政展、吉川　政夫、土屋　裕睦、
谷口　幸一、高妻　容一　(以上、理事)
松本　秀夫（事務局選出幹事)
粟木　一博（監事)、高見　和至（監事)

議題
１）理事長選挙
２）理事の役割分担の決定
３）平成１９年度事業報告
４）平成１９年度決算報告
５）平成２０年度事業計画
６）平成２０年度予算案
７）総会の開催（総会次第）について

１．理事長選挙

事務局より理事長選挙が遅れたことのお詫びがあった。本理事会において理事長選挙が行われ、理事の単記無記名投票の結果、吉川理事が理事長に選出された。

２．理事の役割分担の決定

理事の役割分担として、学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会の各委員を決定した。理事会内の委員会構成は総会議事録の役員及び委員会構成を参照されたい。

３．報告事項

下記の通り平成１９年度事業報告がなされた。

１）第５８回大会（神戸大学）における専門分科会活動報告

一般研究発表（口頭６題・ポスター83 題の計 89 題)、オーガナイズドセッション、キーノートレクチャー１、２、シンポジウム、理事会、総会が開催される旨の報告が学会大会委員会からなされた。

２）役員（理事長・監事）決定及び理事の役割分担報告

監事として、会長指名により、粟木一博氏(仙台大学)、高見和至氏（神戸大学）が選出された報告があった。両氏が紹介され、その後、理事会から退席された。

事務局より理事長選挙の結果報告と理事の役割分担の報告確認がなされた。

3）会報の発行報告

広報委員会と事務局より、第１９号の発行が遅れているので速やかに発行すること、会報第２０号の発行に関しては平成２０年７月を目処に行う旨の報告があった。

4）その他

事務局より、分科会の会員数の報告、名誉会員推薦の件、日本体育学会の年度会費値上げの件、分科会会員が関わる日本体育学会役員人事の件について報告があった。

4．審議事項

1）平成１９年度決算について

庶務・会計委員会より資料１（巻末に掲載）に基づき決算に関する説明と監査結果の報告があり承認された。

2）平成２０年度事業計画について

（1）第５９回大会（平成２０年9月９日～１２日、早稲田大学）における企画運営（学会大会委員会）

例年通り、一般研究発表（口頭・ポスター）、シンポジウム、キーノートレクチャー１・２、理事会、総会を開催する。

（2）プレセミナーの開催（企画委員会）

学会会員の中から人選し、魅力あるテーマでプレセミナーを企画する。

（3）会報第１９号、第２０号の発行、ＨＰの開設（広報委員会、事務局）

第１９号を速やかに発行する。第２０号については平成２０年７月に発行予定である。

ＨＰの開設も議論され、費用がかからなければ開設を検討することとなった。

3）平成２０年度予算案について

庶務・会計委員会より資料２（巻末に掲載）の通り提案され承認された。

なお、今後の課題として、分科会会費の値上げがとりあげられた。

5．総会の開催（総会次第）について

1）司会および議長の選出

総会の司会進行は谷口理事が行う。議長はフロアから案が出ない場合、高見　和至氏（神戸大学）に依頼する。

2）総会次第の進行について

報告事項の報告と審議事項の提案は吉川理事長がまとめて行う。

3）その他

特になし

平成19年度決算報告

＜資料1＞

平成19年度決算報告(自　平成18年度総会　至　平成19年度総会)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)		778,024	735,948	42,076
前期繰越収支差額		885,390	885,390	0
収入合計(B)		1,663,414	1,621,338	42,076
支出の部				
当期支出合計(C)		900,000	330,200	569,800
次期繰越収支差額(B)－(C)		763,414	1,291,138	△ 527,724
支出合計		1,663,414	1,621,338	42,076

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	説明
・前年度繰越金		885,390	885,390	0	
・年度会費		640,000	597,000	43,000	1千円×597名 ※会員数652名(納入率91.6%)
・郵便貯金(利息)		24	348	△ 324	
・体育学会専門分科会補助金		138,000	138,600	△ 600	
○収入合計(B)		1,663,414	1,621,338	42,076	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	説明
・分科会会報関連費用	小計	550,000	25,000	525,000	
	印刷費		0		
	郵送料		0		
	原稿料(特別寄稿等)		0		
	原稿料(研究会活動報告)		25,000		0.5万×5名
	謝礼(会報発行作業補助)		0		
・シンポジウム等関連経費	小計	250,000	260,000	△ 10,000	
	謝礼(演者・司会)		105,000		1万×8名,2万×1名,0.5万×1名
	謝礼(傍聴記・参加記等寄稿者)		95,000		0.5万×19名
	専門分科会懇親会補助		0		開催なし
	謝礼(写真撮影・大会運営)		20,000		0.5万×2名,1万×1名
	シンポジウム打ち合わせ補助		10,000		プレセミナー打ち合わせ
	非会員交通費補助		30,000		3万×1名
・事務局事務費	封筒印刷費等	50,000	35,200	14,800	
・通信費	会員・理事連絡費	50,000	10,000	40,000	切手代
・当期支出合計(C)		900,000	330,200	569,800	
・予備費(B)-(C)		763,414	1,291,138	△ 527,724	
○支出合計		1,663,414	1,621,338	42,076	

△は超過

*会員数昨年度661名から652名へと9名減

平成19年　9月　7日

この決算書は適正であることを認めます.

監事　高見　和至

栗木　一博

平成20年度予算案

＜資料2＞

平成20年度予算案(自　平成19年度総会　　至　平成20年度総会)

○収入の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	説明
・前年度繰越金		885,390	1,291,138	△ 405,748	
・年度会費		597,000	600,000	△ 3,000	1千円×600名
・郵便貯金(利息)		348	300	48	
・体育学会専門分科会補助金		138,600	138,000	600	
・当期収入合計(A)		735,948	738,300	△ 2,352	
○収入合計(B)		1,621,338	2,029,438	△ 408,100	

○支出の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	説明
・分科会会報関連費用	印刷費,郵送料,会報作成補助費等	25,000	1,000,000	△ 975,000	
・シンポジウム等関連経費	小計	260,000	350,000	△ 90,000	
	・謝礼				
	(演者,司会,会報原稿協力者等)				
	・専門分科会懇親会補助				
	・シンポジウム打ち合わせ補助等				
・事務局事務費	文具,印刷費,発送業務・資料整理等	35,200	50,000	△ 14,800	
・通信費	会員・分科会役員連絡費等	10,000	50,000	△ 40,000	
・当期支出合計(C)		330,200	1,450,000	△ 1,119,800	
・予備費(B)－(C)		1,291,138	579,438	711,700	
○支出合計		1,621,338	2,029,438	△ 408,100	

△は超過

編集後記

体育心理学専門分科会会報（第 20 号：通巻第 48 号）をお届けします．

本号は，事務局の速やかな対応のおかげをもちまして，予定通り発行することができました．内容は，巻頭言をはじめとし，特別寄稿，第 58 回大会関連，研究会活動，学位論文紹介，海外情報，第 59 回大会案内、事務局報告などです．原稿をお寄せ頂いた方々，ご協力ありがとうございました．

本会報で学位論文紹介が定着し，多様なテーマで展開されていることは喜ばしい限りです．地道な研究活動を 1 つの総合論文にまとめ上げることは，ご本人の研鑽および斯学への貢献になり，実に意義深いことです．特に若き研究者の皆さんには，学会活動を通して論議力を養い，学術誌に投稿することで説得力を高め，そして学位論文に取り組むことで貫通力をつけていただきたいと強く念願しています．

広報委員会では事務局とともに，2008 年 2 月にホームページを開設しました．まだ構築途中ではありますが，徐々に整備していきます．本号の内容もネット公開用にレイアウトし直してアップする予定ですので，しばらくお待ちください．ご意見ご要望などは，事務局までお寄せください．

なお，本会ホームページには「日本体育学会」(http://wwwsoc.nii.ac.jp/jspe3/)から，「リンク」，「体育心理学専門分科会」でたどれますので，是非閲覧下さい．

広報委員会委員長　吉田　茂

日本体育学会体育心理学専門分科会会報　第 20 号（通巻第 48 号）

発　行	平成 20 年 8 月 1 日　発行　（非売品）
発行責任者	吉川　政夫（代表）
発行所	日本体育学会体育心理学専門分科会事務局
	〒259-1292　平塚市北金目 1117 番地
	東海大学体育学部生涯スポーツ学科　吉川研究室内
	TEL：0463-58-1211　内線 3586（研究室）
	FAX：0463-50-2056（学部事務室）
印　刷	東海大学教育支援センター印刷業務課
	TEL：0463-58-1211